

令和3年度
業務年報



Annual Report 2021
Fukushima Agricultural Technology Centre

福島県農業総合センター

目 次

I 農業総合センターの概要

1 機能と沿革	I	1
2 所在地	I	3
3 組織及び事務の概要	I	4

II 技術開発・企画調整

1 試験研究課題一覧	II	1
2 共同研究、受託研究、研究協定一覧	II	6
3 試験研究の概要	II	7
A 東日本大震災・原子力災害からの復興の加速化による農林水産業の再生を支援するための試験研究の推進	II	7
B 農林水産業の生産力を強化するための、先端技術を活用した技術開発等の推進	II	14
C 県産農林水産物の競争力を強化するための、「ふくしま」ならではの価値向上に資する品種開発等の推進	II	16
D 地球温暖化等の気候変動に対応し、環境と共生する農林水産業を進めるための技術開発等の推進	II	21
E 安全・安心な県産農林水産物の安全供給と生産者の所得向上のための試験研究の推進	II	24
F 技術移転、緊急課題	II	28
4 試験設計・試験成績検討会の開催状況	II	29
5 試験研究成果の公表	II	29
6 品種登録・職務発明	II	33
7 技術開発に伴う表彰・学位取得	II	33
8 有識者懇談会の開催	II	34
9 技術・研究に関する職員研修	II	34
10 試験研究推進会議の開催	II	35
11 所内ゼミ	II	35
12 初任者研修・新規採用職員研修	II	36
13 その他研修	II	36

III 地域農業支援

1 技術移転・技術支援	III	1
(1) 農業総合センター技術移転セミナー	III	1
(2) 技術支援（鳥獣害防止対策）	III	2
(3) 有機農業技術実証の取組	III	3
(4) 営農再開に向けた作付実証の取組	III	4
2 指導・啓発活動	III	6
(1) 研修会	III	6
(2) 技術指導資料	III	8
(3) 技術相談対応件数	III	8
3 主要農作物種子生産実績	III	9
4 オリジナル品種の親株等の供給実績	III	10
5 家畜管理及び生産実績	III	10
(1) 畜産研究所本所	III	10
ア 家畜繋養実績	III	10
イ 各家畜繋養状況	III	11

ウ	各種生産実績	III	12
(2)	沼尻分場	III	15
IV	先進的農業者育成・支援		
1	農業短期大学の業務実績	IV	1
(1)	概要	IV	1
(2)	農業経営部の取組	IV	1
ア	学生の状況	IV	1
イ	専修教育の状況	IV	1
ウ	進路指導の取組	IV	3
エ	学生募集の取組	IV	4
オ	学生数	IV	4
カ	教育科目	IV	5
キ	非常勤講師一覧	IV	8
ク	教育行事	IV	8
ケ	各種表彰者	IV	9
コ	卒業生の進路状況	IV	9
(3)	研修部の取組	IV	10
ア	研修実施状況	IV	10
イ	研修実績	IV	10
2	福島県農業総合センター農業短期大学校運営会議の開催	IV	13
3	福島県インターンシップの受入れ	IV	14
V	食の安全・環境と共生する農業支援		
1	安全農業推進部の業務実績	V	1
(1)	指導・有機認証課の業務	V	1
ア	農薬に関する業務	V	1
イ	農作物の野生鳥獣被害とりまとめ	V	1
ウ	肥料に関する業務	V	1
エ	飼料に関する業務	V	2
オ	有機認証に関する業務	V	3
(2)	発生予察課の業務	V	3
ア	病害虫発生予察事業	V	3
イ	病害虫診断同定	V	4
ウ	ミバエ類等侵入警戒調査事業	V	4
エ	ウメ輪紋ウイルス(plum pox virus)の発生状況調査	V	4
オ	キウイフルーツかきよう病Psa3系統の発生状況調査	V	4
カ	スイカ果実汚斑細菌病	V	4
キ	種馬鈴しょ検査	V	5
ク	ダリアPSTVd調査	V	5
ケ	農林水産データ管理・活用基盤強化事業	V	5
コ	主要病害虫の発生状況	V	5
(3)	分析課の業務	V	10
ア	農林水産物を対象とした緊急時環境放射線モニタリングの実施	V	10
イ	その他検査の実施	V	11
ウ	放射性物質測定技能試験	V	11
2	有機農業推進室の業務実績	V	11
VI	県民との交流・情報発信		
1	交流事業	VI	1
(1)	クイズラリー	VI	1

(2) 農的楽しみセミナー	VI	1
(3) 子どもアグリ科学教室	VI	1
(4) イモ掘り体験学習	VI	1
(5) 第12回田んぼの学校	VI	1
(6) 農業総合センター農業短期大学の取組	VI	1
2 視察見学者の受入状況	VI	2
3 施設の利用状況	VI	2
4 研究成果の発表	VI	4
(1) 学会等研究発表	VI	4
(2) シンポジウム等講演	VI	7
(3) 学会誌等投稿	VI	8
(4) 雑誌等投稿	VI	10
5 刊行物	VI	11
6 主要作物の生育情報の提供	VI	11
7 インターネットによる情報提供	VI	11
8 マスメディアによる報道	VI	12

VII 職員・財産

1 職員数	VII	1
2 施設・ほ場の面積及び飼養家畜数	VII	1

I 農業総合センターの概要

1 機能と沿革

(1)機能

福島県農業総合センターは、農業関係の試験研究機関、病虫害防除所、肥飼料検査所及び農業短期大学校を再編統合し、5つの機能（ア 技術開発・企画調整機能、イ 地域農業支援機能、ウ 先進的農業者育成・支援機能、エ 食の安全・環境と共生する農業支援機能、オ 県民との交流・情報発信機能）を兼ね備えた本県農業振興の新たな拠点として平成18年4月郡山市日和田町に開所した。

ア 技術開発・企画調整機能

共通研究部門（経営・作業技術・生物工学・生産環境）、専門研究部門（水田畑作・園芸・果樹・畜産）、地域研究部門（会津・浜）が緊密に連携し、統合集中化のメリットを最大限に発揮することにより、実用性の高い技術の迅速かつ効率的な開発に取り組む。

イ 地域農業支援機能

地域農業を支援するため、既存の技術のみでは解決が困難な地域の課題に対し、現地の普及指導員、農業者、農業団体及び市町村等と共同して解決にあたる。

ウ 先進的農業者育成・支援機能

先進的な技術や最新の知見を営農条件に合った形に組み立て、実用的な新技術として生産現場に適応させることにより、複雑化・高度化する生産現場の課題解決の迅速化を図る。

農業教育面では、農業短期大学校と研究部門が一体的に地域を先導する農業後継者の育成にあたる。

エ 食の安全・環境と共生する農業支援機能

農業の振興には、環境に配慮し、消費者のニーズを重視して農産物を生産してゆくことが重要であるため、農業生産面からの環境保全や農薬等生産資材の適正使用の推進、農産物の安全性の確保に積極的に取り組む。また、県内における有機農業の普及拡大を強力に支援する。

オ 県民との交流・情報発信機能

センター整備の基本理念の一つである「開かれた試験研究機関」を具現化し、県民の様々な期待に応えられる交流・学習拠点としての役割を果たすため、県民の憩いの場や、子供たちの農業体験や食農教育、高齢者等の生涯学習等の機会を提供する。

(2) 沿革

年 度		事 項
和 暦	西 暦	
明治 29 年	1896 年	安積郡小原田村(現 郡山市小原田)に農事試験場(後の農業試験場)を設置
34 年	1901 年	福島町(現 福島市)に肥飼料検査室(後の肥飼料検査所)を設置
35 年	1902 年	安達郡高川村(現 郡山市熱海町)に種馬飼育場(後の畜産試験場)を設置
43 年	1910 年	郡山町虎丸町(現 郡山市虎丸)に移転
大正 3 年	1914 年	伊達郡梁川町(現伊達市)に原蚕種製造所(後の蚕業試験場)を設置
7 年	1918 年	河沼郡若宮村(現 河沼郡会津坂下町)に農事試験場特別試験地(後の農業試験場会津支場) を設置
12 年	1923 年	石城郡神谷村 (現いわき市)に石城分場(後の農業試験場いわき支場) を設置
14 年	1925 年	田村郡片曾根村(現田村市)にたばこ試験場を設置
昭和 10 年	1935 年	信夫郡平野村(現 福島市飯坂町)に農事試験場信達分場(後の果樹試験場)を設置 西白河郡矢吹町に県立修練農場(後の農業短期大学校)を設置 ※改称、統廃合により昭和 63 年(1988 年)現在名称
		相馬郡八幡村(現 相馬市成田)に農事試験場相馬水稻試験地(後の農業試験場相馬支場)を設置
		耶麻郡猪苗代町(現 猪苗代町)に猪苗代試験地(後の農業試験場冷害試験地)を設置
11 年	1936 年	郡山市に種鶏場(後の養鶏試験場)を設置 ※昭和 40 年(1965 年)改称、郡山市富田町に移転
17 年	1942 年	種馬飼育場を信夫郡荒井村(現 福島市)に移転(後の畜産試験場)
23 年	1948 年	安積郡富田村(現 郡山市富田町)に農事試験場を移転※昭和 36 年(1961 年)改称
27 年	1952 年	県内 16 か所に病虫害防除所を設置
33 年	1958 年	県特用作物原種農場をこんにゃく試験地として改称移管
42 年	1967 年	県農業短期大学校を設立
49 年	1974 年	会津農業センターの設立

年 度		事 項
和 暦	西 暦	
54 年	1979 年	会津支場を会津農業センター庁舎に移転 農業経営大学校を設置
55 年	1980 年	園芸試験場を果樹試験場に改組
63 年	1988 年	農業短期大学校、農業経営大学校及び会津農業センター（長期研修課程）を統合し、県立農業短期大学校を開校（矢吹町）
平成 8 年	1996 年	農業試験場創設 100 周年
14 年	2002 年	梁川支場を開場し、蚕業試験場を廃止
18 年	2006 年	農業総合センター発足 試験研究機関（農業試験場（本場・4 支場・2 試験地）、果樹試験場、たばこ試験場、畜産試験場（本場・1 支場）、養鶏試験場）、農業短期大学校、病虫害防除所、肥飼料検査所を再編統合 梁川支場を廃止
23 年	2011 年	センター本部安全農業推進部に分析課を設置
25 年	2013 年	独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構東北農業研究センター福島研究拠点内（福島市）に福島市駐在を設置
27 年	2015 年	福島市駐在を廃止し、南相馬市に浜地域農業再生研究センターを設置 畜産研究所養鶏分場（郡山市）を廃止
28 年	2016 年	畜産研究所（福島市）に養鶏科を設置
29 年	2017 年	農業短期大学校を農業経営部 5 学科に再編し、研究科を廃止

2 所在地

福島県農業総合センター 本部

〒963-0531 郡山市日和田町高倉字下中道^{しもなかみち}116 番地
TEL 024-958-1700 FAX 024-958-1726

果樹研究所

〒960-0231 福島市飯坂町平野字檀^{だん}の東^{ひがし}1 番地
TEL 024-542-4191 FAX 024-542-4749

畜産研究所

〒960-2156 福島市荒井字地藏原甲 18 番地
TEL 024-593-1096 FAX 024-593-4977

畜産研究所 沼尻分場

〒969-2752 耶麻郡猪苗代町大字蚕養^{こがい}字日影^{ひかげ}山乙 3696 番地
TEL 0242-64-3321 FAX 0242-64-2844

会津地域研究所

〒969-6506 河沼郡会津坂下町大字見明^{みみょう}字南原 881 番地
TEL 0242-82-4411 FAX 0242-82-4416

浜地域研究所

〒979-2542 相馬市成田字五郎右エ門橋 100 番地
TEL 0244-35-2633 FAX 0244-35-0319

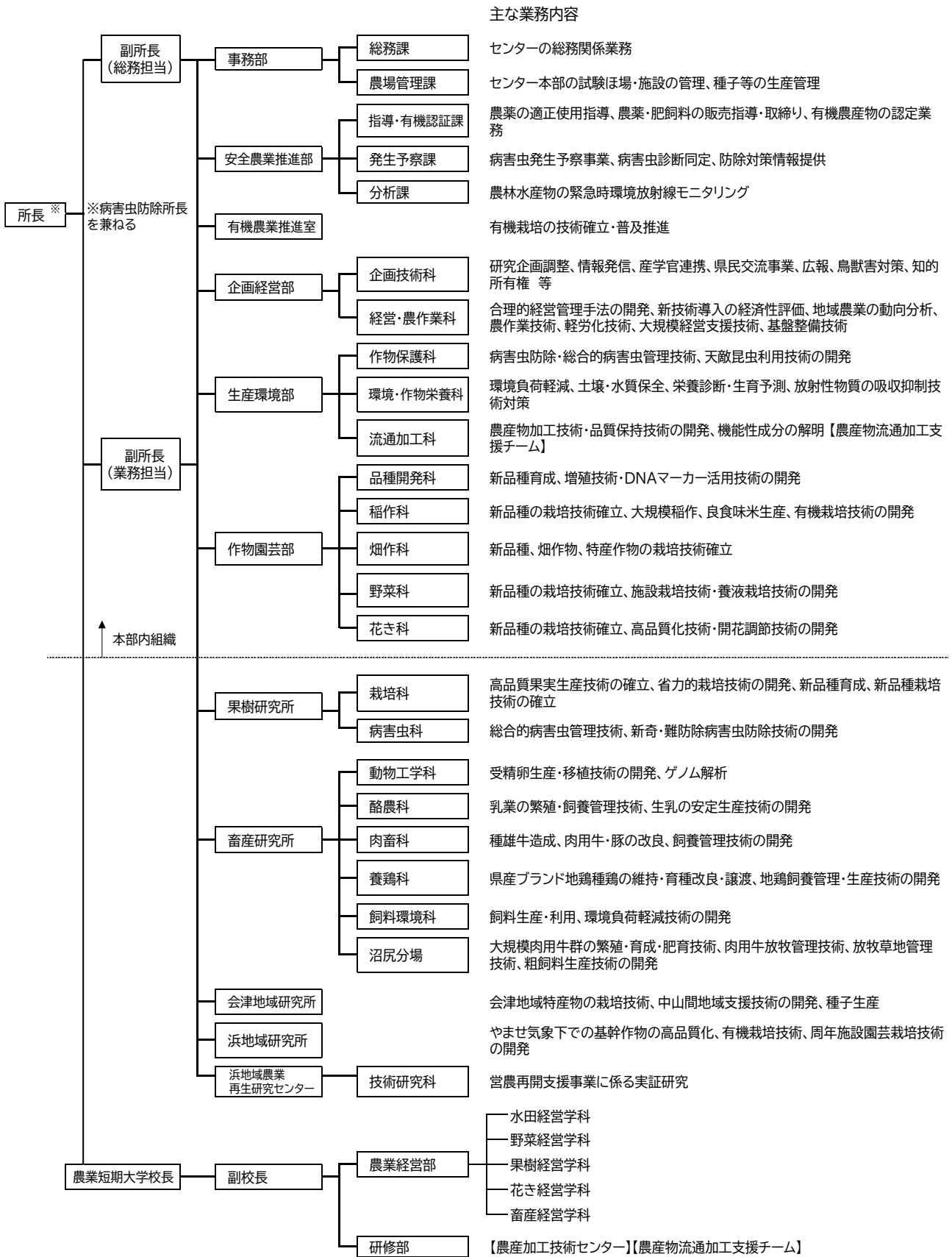
浜地域農業再生研究センター

〒975-0036 南相馬市原町区萱浜^{かいはま}字巢掛^{すかけ}場 45 番 169
TEL 0244-26-9562 FAX 0244-26-9563

農業短期大学校

〒969-0292 西白河郡矢吹町一本木^{いっぼんぎ}446 番地 1
TEL 0248-42-4111 FAX 0248-44-4553

3 組織及び事務の概要



Ⅱ 技術開発・企画調整

1 試験研究課題一覧

課題番号	試験課題（大課題・中課題・小課題）	始期	終期	担当部所	予算区分
A 東日本大震災・原子力災害からの復興の加速化による農林水産業の再生を支援するための試験研究の推進					
A1 農業における総合的な放射性物質対策の研究開発					
A1-1 放射性物質の分布状況の把握					
A1-1-1	土壌の経年調査	R3	R7	生産環境部 果樹研究所 浜地域農業再生研究センター	受託※1
A1-1-2	農地における放射性セシウム濃度深度分布の把握	R3	R7	生産環境部	繰入金
A1-1-3	郡山市における大気浮遊塵及び降下物中の放射性セシウム濃度調査	R3	R7	生産環境部	繰入金
A1-1-4	果樹における放射性物質濃度の経年変化の把握	R3	R7	果樹研究所	繰入金
A1-2 放射性物質の吸収抑制技術等の確立					
A1-2-1	水稲におけるカリ施用の適正量の検討	R3	R7	生産環境部	繰入金
A1-2-2	基準値超過等要因解析	R3	R7	生産環境部	繰入金
A1-2-3	県内農地土壌の交換性塩基含量の実態解明	R3	R7	生産環境部	繰入金
A1-2-4	非交換性カリ含量簡易測定法の開発	R3	R5	生産環境部	繰入金
A1-2-5	除染後水田水口へのカリ資材等を活用した放射性セシウム吸収リスクの低減技術の実証	R3	R5	生産環境部	繰入金
A1-2-6	除染後水田に対する中長期的な地力の実態解明と効果的な地力回復技術の開発	R3	R5	生産環境部	繰入金
A1-2-7	ゼオライト施用時における玄米への放射性セシウム移行リスク評価	R3	R4	生産環境部	受託※1
A1-2-8	水稲の生産性と安全性の評価ならびに放射性物質移行抑制の実証	R3	R7	作物園芸部	繰入金
A1-2-9	畑作物の放射性セシウム吸収に対する土壌の影響解明	R3	R7	作物園芸部	繰入金
A1-2-10	カキ・ユズにおける放射性物質の吸収抑制技術等の確立	R3	R7	果樹研究所	繰入金
A1-2-11	避難指示区域等における農作物中放射性セシウム吸収抑制技術の開発	R3	R7	浜地域農業再生研究センター	繰入金
A1-2-12	放射性セシウム濃度低減のための野菜栽培と調理加工	R3	R7	生産環境部 浜地域農業再生研究センター	繰入金
A1-3 特定復興再生拠点区域等の円滑な営農再開に向けた技術実証					
A1-3-1	計測ロボットを活用した放射性物質等分布実態の把握	R3	R7	浜地域農業再生研究センター	受託※1
A1-3-2	営農再開を阻害する加害動物の行動特性や動物種把握による獣害防止策の提案	R3	R7	浜地域農業再生研究センター	受託※1
A1-3-3	通い農業支援システム等を活用した栽培状況の可視化と評価	R3	R7	浜地域農業再生研究センター	受託※1
A1-3-4	緑肥作物等の利用による地力回復技術の開発と蜜源利用	R3	R7	浜地域農業再生研究センター	受託※1
A1-3-5	効率的雑草管理技術の開発と実証	R3	R7	浜地域農業再生研究センター	受託※1
A1-3-6	特定復興再生拠点等における農作物栽培の生産性と安全性の評価	R3	R7	浜地域農業再生研究センター 畜産研究所	受託※1
A1-3-7	放射性物質移行抑制技術の実証・開発と畑作物の安全性の評価	R3	R7	作物園芸部	受託※1
A1-3-8	草地における放射性セシウム吸収抑制技術の開発・実証と未除染牧草地利用可否基準の策定	R3	R7	畜産研究所 浜地域農業再生研究センター	受託※1
A1-3-9	山羊乳及び山羊肉の放射性セシウムの移行調査	R3	R5	畜産研究所	受託※1
A1-3-10	生産現場における最適放射性セシウム移行リスクの評価手法およびほ場特性に合わせた移行低減技術の提案	R3	R7	生産環境部	受託※1
A2 避難地域等の営農再開を支える技術の実証					
A2-1 避難地域の営農再開を支援する研究					
A2-1-1	避難地域等における営農再開のための支援研究	R3	R7	浜地域農業再生研究センター	営農再開支援事業
A2-2 広域エリアを対象とした大規模水田営農における生産基盤技術の確立実証					
A2-2-1	広域エリアにおける水田輪作栽培管理技術の開発・実証	R3	R7	作物園芸部 浜地域研究所	受託※1

課題番号	試験課題（大課題・中課題・小課題）	始期	終期	担当部所	予算区分
A2-2-2	営農再開に対応した大規模水田輪作体系の実証	R3	R7	作物園芸部	受託※ ¹
A2-2-3	広域エリアにおける ICT を用いた省力的ほ場管理技術	R3	R7	生産環境部	受託※ ¹
A2-2-4	飼料用トウモロコシの安定多収、加工・調製技術の開発と実証	R3	R7	畜産研究所	受託※ ¹
A2-2-5	経営管理システムを活用した経営データ分析・活用手法	R3	R7	企画経営部	受託※ ¹
A2-3 先端技術を活用した施設野菜・畑作物の省力高収益栽培・出荷技術の確立					
A2-3-1	施設果菜類の雇用労力とロボットを作業主体とした大規模経営技術の開発・実証	R3	R7	企画経営部 作物園芸部 浜地域研究所	受託※ ¹
A2-3-2	加工適性の高いコムギの導入による省力高収益生産技術の開発・実証	R3	R7	作物園芸部	受託※ ¹
A2-3-3	露地野菜栽培における難防除雑草の優占化機構の解明と対策技術の確立	R3	R7	作物園芸部 浜地域農業再生研究センター	受託※ ¹
A2-4 避難地域の営農再開を促進する先端プロ技術の社会実装					
A2-4-1	花きの計画的安定生産技術の実証	R3	R7	作物園芸部	受託※ ¹
A2-4-2	早期成園化が可能な樹形によるナシ、ブドウ、モモの省力・高品質安定生産技術の実証	R3	R7	果樹研究所	受託※ ¹
A2-4-3	肉用牛の AI 超音波肉質診断技術の実証	R3	R7	畜産研究所	受託※ ¹
B 農林水産業の生産力を強化するための、先端技術を活用した技術開発等の推進					
B1 先端技術を活用した新たな農業生産技術の開発					
B1-1 イノベーションによる避難地域の新たな農業生産技術の開発					
B1-1-1	稲作の大規模化・省力化に向けた農業用水利施設管理省力化ロボットの開発	R3	R5	企画経営部	受託※ ¹
B1-1-2	「見える化」技術を活用した土壌肥沃度のバラツキ改善技術の開発	R3	R5	浜地域農業再生研究センター	受託※ ¹
B1-1-3	ICT・放牧を活用した肉用繁殖牛管理技術の効率化	R3	R5	畜産研究所	受託※ ¹
B1-2 スマート農業技術を活用した農業生産技術の確立					
B1-2-1	中山間地における水稻スマート有機栽培	R2	R3	有機農業推進室	受託※ ¹
B1-2-2	データベースを活用したスマート農業経営の構築	R3	R5	企画経営部	県単
B1-3 先端技術を活用した省力的栽培技術の確立					
B1-3-1	水稻無コーティング湛水直播による業務用米の低コスト生産技術の確立	R2	R4	作物園芸部	受託※ ¹
B1-3-2	IoT による遠隔監視システムを活用した育苗管理の省力化技術開発	R3	R5	企画経営部	県単
B1-3-3	「米処」会津地域における新たな稲作経営の展開のための栽培技術の確立	R3	R5	会津地域研究所	受託※ ¹
B1-3-4	水田畦畔雑草の省力効率的管理法の確立	R1	R3	会津地域研究所	受託※ ¹
B1-3-5	ブロッコリー選別自動収穫機の機械化栽培体系の確立	R3	R6	企画経営部	県単
B1-3-6	ブロッコリー栽培における一斉収穫・出荷・販売体系の構築	R3	R5	企画経営部	受託※ ⁶
B1-3-7	ICT・IoT 技術を活用した花きの新たな農業生産技術の確立	R3	R7	会津地域研究所	県単
B1-3-8	大規模酪農経営における飼養管理技術の確立	R3	R6	畜産研究所	県単
C 県産農産物の競争力を強化するための、「ふくしま」ならではの価値向上に資する品種開発等の推進					
C1 市場ニーズに対応したオリジナル品種・系統と生産技術等の開発					
C1-1 個性豊かな県オリジナル水稻、野菜、花き品種の育成					
C1-1-1	個性豊かな県オリジナル水稻品種の育成	R3	R7	作物園芸部 浜地域研究所	国庫 県単
C1-1-2	個性豊かな県オリジナル野菜品種の育成	R3	R7	作物園芸部	国庫 県単
C1-1-3	個性豊かな県オリジナル花き品種の育成	R3	R7	作物園芸部	国庫 県単
C1-1-4	個性豊かな品種育成のための促進技術開発	R3	R7	作物園芸部	県単
C1-1-5	バイオテック活用による優良原種苗の長期保存・増殖技術開発	R3	R7	作物園芸部	国庫 県単

課題番号	試験課題（大課題・中課題・小課題）	始期	終期	担当部所	予算区分
C1-2 作物、野菜、花きの有望品種・系統の評価					
C1-2-1	奨励品種決定調査	R3	R7	作園芸部 会津地域研究所 浜地域研究所	県単
C1-2-2	大豆系統適応性検定試験	R3	R3	作園芸部	受託※ ⁴
C1-2-3	麦類育成系統の地域適応性試験	R3	R7	作園芸部	受託※ ⁴
C1-3 作物、野菜、花きの有望系統・新品種の栽培技術の確立					
C1-3-1	県産米の高品質化・良食味米生産のための栽培管理技術の確立	R3	R3	作園芸部 会津地域研究所	受託※ ^{3,6}
C1-3-2	県オリジナル酒造好適米の栽培方法の確立	R3	R5	作園芸部 会津地域研究所	国庫
C1-3-3	野菜の有望系統・新品種の栽培技術の確立	R3	R7	作園芸部	国庫
C1-3-4	花きの有望系統・新品種の栽培技術の確立	R3	R7	作園芸部 会津地域研究所	国庫
C1-4 個性豊かな県オリジナル果樹品種の育成					
C1-4-1	個性豊かな県オリジナル果樹品種の育成	R3	R7	果樹研究所	国庫 受託※ ^{1,2} 県単
C1-5 果樹の有望系統の評価および新品種・有望系統の栽培技術の確立					
C1-5-1	果樹系統適応性検定試験	R3	R7	果樹研究所	受託※ ⁴
C1-5-2	県オリジナル果樹品種の安定生産・流通技術の確立	R3	R7	果樹研究所	県単
C1-6 個性豊かな県優良家畜等の改良					
C1-6-1	牧草・飼料作物の優良草種・品種の選定	R3	R7	畜産研究所	県単
C1-6-2	「フクシマL2」の開放型育種	R3	R7	畜産研究所	県単
C1-6-3	県ブランド鶏の改良と開発	R3	R7	畜産研究所	県単
C1-6-4	胚移植技術を活用した高能力肉用牛の効率的生産技術の確立	R3	R7	畜産研究所	県単
C1-6-5	ゲノム情報を活用した家畜の育種改良技術の確立	R3	R7	畜産研究所	国庫 県単
C1-6-6	ゲノミック評価を利用した繁殖雌牛の評価	R3	R5	畜産研究所	受託※ ²
C2 農産物を「ふくしま」ならではの産品にする技術の開発					
C2-1 県産農産物の特性を活かした利用技術の開発					
C2-1-1	県産農産物の加工技術の開発	R3	R7	生産環境部	県単
C2-1-2	県産農産物の品質保持技術の開発	R3	R7	生産環境部	県単
C2-1-3	本県農産物の機能性成分の評価と利用技術の開発	R3	R7	生産環境部	国庫
C2-2 県産農産物の輸出拡大に向けた生産・保鮮技術の確立					
C2-2-1	モモせん孔細菌病に対する多目的防炎網を活用した防除効果の検証	R3	R7	果樹研究所	国庫
C2-2-2	ダリアの鮮度保持技術の開発	R3	R4	作園芸部	繰入金
C2-2-3	シュッコンカスミソウの輸出に向けた鮮度保持技術の開発	R3	R7	会津地域研究所	繰入金
C2-2-4	ナシ黒星病に対する秋期及び果実肥大後期の新防除体系の検証	R3	R5	果樹研究所	国庫
C2-3 「福島牛」ブランド競争力強化技術の確立					
C2-3-1	「福島牛」の高付加価値生産システムの確立	R3	R7	畜産研究所	国庫 県単
C2-4 「ふくしま」ならではの地域特産物を活かした栽培・流通技術の確立					
C2-4-1	エゴマの省力高品質生産技術の確立	R1	R3	企画経営部 生産環境部 作園芸部	国庫 県単
C2-4-2	オタネニンジンの省力・安定生産技術の確立	R1	R3	作園芸部 会津地域研究所	国庫 県単
C2-4-3	積雪を活かした野菜の栽培及び貯蔵技術の確立	R1	R3	生産環境部 会津地域研究所	国庫 県単

課題番号	試験課題（大課題・中課題・小課題）	始期	終期	担当部所	予算区分
D 地球温暖化等の気候変動に対応し、環境と共生する農林水産業を進めるための技術開発等の推進					
D1 気候変動に対応し農業生産の安定化に寄与する技術の開発					
D1-1 気候変動に対応した生産技術の開発					
D1-1-1	夏季高温条件下における良質・良食味米生産技術の確立	R3	R7	作物園芸部	受託※2
D1-1-2	主要野菜の安定生産技術の確立	R3	R7	作物園芸部	国庫 県単
D1-1-3	温暖化傾向に対応した花きの安定生産技術の確立	R3	R7	作物園芸部	県単
D1-1-4	主要農作物生育作柄解析調査研究	R3	R7	作物園芸部 会津地域研究所 浜地域研究所	県単
D1-1-5	温暖化に対応した果樹の生育予測技術及び生育障害対策技術の確立	R3	R7	果樹研究所 会津地域研究所	県単
D2 環境負荷を低減する農業生産に資する研究開発					
D2-1 中山間地における農地管理技術の開発					
D2-1-1	受益者対応型中山間地域の暗渠排水技術の確立	H28	R4	企画経営部	繰入金
D2-1-2	中山間地における農地保全管理の省力技術体系の確立	R1	R5	企画経営部	繰入金
D2-1-3	遊休農地再生利用のための土地利用型作物栽培体系の確立	R3	R7	会津地域研究所	県単
D2-2 環境と共生する病害虫防除技術の開発					
D2-2-1	総合的病害虫管理（IPM）による環境と共生する農業技術の確立	R3	R7	生産環境部	県単
D2-2-2	果樹における生物資源等を活用した環境と共生する病害虫防除技術の開発	R3	R7	果樹研究所	受託※1 県単
D2-3 有機農産物の低投入持続型栽培技術の確立					
D2-3-1	有機農産物の低投入持続型栽培技術の確立	R3	R7	有機農業推進室	国庫
D2-4 環境負荷の低減に向けた技術の開発					
D2-4-1	温室効果ガス排出軽減技術の確立	R3	R7	生産環境部	受託※1
D2-4-2	農地における土壌管理実態調査	R3	R7	生産環境部	国庫
D2-4-3	果樹園における省力的環境負荷軽減のための肥培管理技術の確立	R3	R7	生産環境部	県単
D2-4-4	緑肥作物の栽培すき込みが根圏および非根圏土壌の物理化学性に及ぼす影響	R1	R3	浜地域農業再生研究センター	科研費
D2-4-5	効率的肥培管理技術の確立	R3	R7	生産環境部	県単
E 安全・安心な県産農林水産物の安定供給と生産者の所得向上のための試験研究の推進					
E1 産地や経営体において収益性を高める技術の研究開発					
E1-1 水稻、畑作物の安定生産技術の確立					
E1-1-1	寒冷地における雑草イネ省力防除技術の開発	R1	R5	作物園芸部	受託※1
E1-1-2	省力的な稲作栽培に適応した雑草防除技術の開発	R3	R7	作物園芸部	県単
E1-1-3	畑作物の高品質・安定栽培技術の確立	R3	R7	作物園芸部	受託※8 県単
E1-1-4	マルチオミクス解析に基づく作物の安定多収に向けた栽培技術の開発	H30	R6	作物園芸部	受託※1
E1-1-5	葉たばこ特別調査	R3	R3	作物園芸部	受託※5
E1-2 野菜・花きの安定生産技術の確立					
E1-2-1	地域特性を活かした施設花きの安定生産技術の確立	R3	R7	作物園芸部	県単
E1-2-2	ふくしまの特色ある露地花きの安定生産技術の確立	R3	R7	作物園芸部	受託※2 県単
E1-2-3	特産野菜の安定生産技術の確立	R3	R7	作物園芸部	受託※2
E1-3 会津地域に適した作物、園芸品目等の生産技術の確立					
E1-3-1	会津地域における地場野菜等の生産技術の開発	R3	R7	会津地域研究所	県単

課題番号	試験課題（大課題・中課題・小課題）	始期	終期	担当部所	予算区分
E1-3-2	会津地域における野菜オタネニンジンとしての生産技術の開発	R3	R3	会津地域研究所	県単
E1-4	浜通り地方に適した作物、園芸品目等の生産技術の確立				
E1-4-1	浜通りにおける大規模水田利用支援技術の開発	R3	R7	浜地域研究所	県単
E1-4-2	浜通りの気候を活かした野菜・花き等の生産振興支援技術の確立	R3	R7	浜地域研究所	県単
E1-5	果樹の安定生産技術の確立				
E1-5-1	革新的栽培技術体系による果樹の栽培管理技術の確立	R3	R7	果樹研究所	受託 ^{※2} 県単
E1-5-2	モモ「あかつき」の核障害軽減対策技術の確立	R3	R7	果樹研究所	県単
E1-5-3	大規模経営に対応できるリンゴの省力・高品質生産技術体系の確立	R1	R7	果樹研究所	受託 ^{※1} 県単
E1-6	畜産の安定生産技術の確立				
E1-6-1	乳牛の安定生産技術の確立	R3	R5	畜産研究所	受託 ^{※1} 科研費
E1-6-2	肉用牛の安定生産技術の確立	R3	R7	畜産研究所	受託 ^{※2} 県単
E1-6-3	豚の安定生産・高付加価値化技術の確立	R3	R7	畜産研究所	繰入金 県単
E2	農産物の安定供給に寄与する鳥獣被害防止・病虫害防除等に係る研究開発				
E2-1	野生鳥獣害対策技術の確立				
E2-1-1	ICT 機器等を利用した野生鳥獣被害対策技術の確立	R3	R5	企画経営部	繰入金
E2-2	農作業事故防止技術体系の確立				
E2-2-1	農作業事故による怪我のデータ収集とその体系化	R3	R5	企画経営部	国庫
E2-3	新奇病虫害・難防除病虫害防除技術の確立				
E2-3-1	新奇・難防除病虫害に対する防除技術の開発	R3	R7	生産環境部	県単
E2-3-2	キュウリ産地で発生する主要病虫害の被害進行度に応じた電子画像データの取得および人工知能の実証	H29	R3	生産環境部	受託 ^{※1}
E2-4	果樹の病虫害に対する防除技術の確立				
E2-4-1	果樹の重要な課題である病虫害に対する防除技術の確立	R3	R7	果樹研究所	県単
E2-4-2	果樹等の幼木期における安定生産技術の確立	R2	R6	生産環境部 果樹研究所	受託 ^{※1}
E2-4-3	AI を活用した病虫害早期診断技術の開発	R2	R5	果樹研究所	受託 ^{※1}
E2-4-4	果樹における農薬耐性、抵抗性を管理する技術確立	R3	R7	果樹研究所	県単
E2-4-5	果樹病虫害の防除法改善に関する試験	R3	R7	果樹研究所	県単
E2-4-6	我が国の輸出に有利な国際的な検疫処理基準の確立、実証	R2	R3	果樹研究所	受託 ^{※1}
E2-5	新農薬・新資材等の効率的利用法				
E2-5-1	安全で効率的な新農薬・新資材等の実用化	R3	R7	生産環境部 作物園芸部 果樹研究所 会津地域研究所 浜地域研究所	受託 ^{※7}
F 技術移転、緊急課題					
F-1	モモ、ニホンナシにおける凍霜害の事後対策技術と効果的な未然防止対策技術の確立				
F-1-1	凍霜害によるモモの被害様相と対策技術	R3	R3	果樹研究所	県単
F-1-2	凍霜害によるニホンナシの被害様相と対策技術	R3	R3	果樹研究所	県単
F-1-3	灯油とロックウールを利用した燃焼法による未然防止対策技術	R3	R3	果樹研究所	県単

【委託元】 ※1 農林水産省 ※5 日本たばこ産業株式会社
 ※2 JA グループ福島 ※6 新稲作研究会
 ※3 公益社団法人農林水産・食品産業技術振興協会 ※7 公益社団法人福島県植物防疫協会
 ※4 国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 ※8 福島大学

2 共同研究、受託研究、研究協定一覧

(1) 福島県農林水産部共同研究

- ア 低カドミウム遺伝子を付与したイネ系統の作成(福島県)
(国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構農業環境変動研究センター)
- イ 福島県オリジナルの閉花受粉性を持つ水稻品種の育成と特性評価
(国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構作物研究部門・生物機能利用研究部門)
- ウ 水稻いもち病ほ場抵抗性検定の東北地域向け基準品種の追加策定
(国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構東北農業研究センター)
- エ 和牛における経済形質のゲノム選抜手法の確立 (独立行政法人家畜改良センター)

(2) 福島県農林水産部受託研究

- ア 稲民間育成品種・系統評価試験 (公益社団法人農林水産・食品産業技術振興協会)
- イ 発酵食品の製造に適した大豆品種と栽培技術の開発のための学術基盤の構築
(国立大学法人福島大学)

(3) 研究協定

- ア 地域資源を活用した水稻の品種育成に関する研究
(国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構*1ほか 30 公設試験研究機関)
*1 次世代作物開発研究センター
- イ 水稻新品種の育成 (富山県農林水産総合技術センター)
- ウ 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構の水稻有望系統を交配母本とした水稻品種・系統の共同育成(福島県)
(国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構中日本農業研究センター)
- エ マーカー開発による水稻育種の効率化技術の開発(国立大学法人福島大学)
- オ 福島県における「キクの計画生産・出荷管理システム」の現地実証(株式会社インテック)
- カ 倍加半数体リンゴ品種を利用した果実形質の遺伝解析に関する研究
(国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構果樹茶業研究部門)
- キ 避難地域等における営農再開のための支援研究 (株式会社南東北クボタ)

3 試験研究の概要

(文中に【普及成果○】【参考成果○】【放射線技術情報○】【営農再開技術情報○】の記載のある成果については、当センターのホームページに令和3年度に得られた研究成果として掲載されております。)

A 東日本大震災・原子力災害からの復興の加速化による農林水産業の再生を支援するための試験研究の推進

A1 農業における総合的な放射性物質対策の研究開発

A1-1 放射性物質の分布状況の把握

試験課題名: 土壌の経年調査	A1-1-1
予算区分: 受託(放射性物質測定調査委託事業) 開始年度: R3 終了年度: R7 担当科所: 環境・作物栄養科	
概要: 土壌中の放射性セシウム濃度を経年で比較すると全地目で減少傾向がみられた。また、空間線量率を経年で比較すると全地目で減少傾向がみられた。	
試験課題名: 農地における放射性セシウム濃度深度分布の把握	A1-1-2
予算区分: 繰入金(福島県民健康管理基金) 開始年度: R3 終了年度: R7 担当科所: 環境・作物栄養科	
概要: 深度分布は、前回調査よりも20mm下方移動していた。しかし、土壌の採取時期が異なることが影響したことも考えられるため、採取時期を統一し継続して経時変化を確認する必要がある。	
試験課題名: 郡山市における大気浮遊塵及び降下物中の放射性セシウム濃度調査	A1-1-3
予算区分: 繰入金(福島県民健康管理基金) 開始年度: R3 終了年度: R7 担当科所: 環境・作物栄養科	
概要: 大気降下物中の放射性セシウムは着実に減少しており、季節変動の要因は風速であることが示唆された。また、大気中濃度は2018年まで減少傾向であったが、以降は時折やや高い値を示すことがあった。	
試験課題名: 果樹における放射性物質濃度の経年変化の把握	A1-1-4
予算区分: 繰入金(福島県民健康管理基金) 開始年度: R3 終了年度: R7 担当科所: 果樹研究所栽培科	
概要: 所内及び現地ほ場において葉・果実中の放射性Cs濃度を測定した。放射性Cs濃度はほとんどの樹種で低く推移した。土性の異なる5か所の樹園地における深さ30cmまでの土壌中 ¹³⁷ Csの垂直分布を調査した結果、ほ場により下方移行のパターンが異なった。	

A1-2 放射性物質の吸収抑制技術等の確立

試験課題名: 水稲におけるカリ施用の適正量の検討	A1-2-1
予算区分: 繰入金(福島県民健康管理基金) 開始年度: R3 終了年度: R7 担当科所: 環境・作物栄養科	
概要: 精密ほ場試験において、2種類の異なる土壌で交換性カリの保持に関わる特性が異なり、放射性セシウム濃度の移行程度が異なる可能性が示唆された。	
試験課題名: 基準値超過等要因解析	A1-2-2
予算区分: 繰入金(福島県民健康管理基金) 開始年度: R3 終了年度: R7 担当科所: 環境・作物栄養科	
概要: カリ上乗せ施用を終了した市町村の試験ほ場のうち、カリ上乗せ施用を実施しなかったほ場について土壌実態等を調査した結果、土壌中交換性カリ含量の中央値は、会津が最も高く、次いで浜通り、中通りの順で低かった。福島県営農再開支援事業の効果の検証時と比較すると、浜通り及び中通りで減少傾向、会津では増加傾向にあった。	
試験課題名: 県内農地土壌の交換性塩基含量の実態解明	A1-2-3
予算区分: 繰入金(福島県民健康管理基金) 開始年度: R3 終了年度: R7 担当科所: 環境・作物栄養科	
概要: 2011年、2014年、2017年に土壌調査を行ったほ場での追跡調査を行い、今年度は44地点の土壌を採取、分析した。土壌中の交換性カリ含量が25mg/100gを超えた地点は中通りと会津で7割程度となり、交換性カリ含量の中央値は、浜通りと会津でやや減少した。	

試験課題名:非交換性カリ含量簡易測定法の開発		A1-2-4
予算区分:繰入金(福島県民健康管理基金) 開始年度:R3 終了年度:R5 担当科所:環境・作物栄養科		
概要	定法(熱硝酸抽出法)と簡易法(クエン酸抽出法)には高い相関がみられ、また、簡易法の原子吸光光度計とイオンメーター測定値の間にも相関がみられたため、それぞれの推定式の作成は可能と考えられた。	
試験課題名:除染後水田水口へのカリ資材等を活用した放射性セシウム吸収リスクの低減技術の実証		A1-2-5
予算区分:繰入金(福島県民健康管理基金) 開始年度:R3 終了年度:R5 担当科所:環境・作物栄養科		
概要	現地調査では、坪刈り収穫された玄米中の濃度は 25 Bq/kg 以下であった。ポット試験では、カリ資材(南アフリカ産バーミキュライト、フィンランド産金雲母)を一度施用した後に低カリ化で水稲 3 作のポット栽培を繰り返しても、玄米中の放射性セシウム濃度への移行低減効果が継続していた。	
試験課題名:除染後水田に対する中長期的な地力の実態解明と効果的な地力回復技術の開発		A1-2-6
予算区分:繰入金(福島県民健康管理基金) 開始年度:R3 終了年度:R5 担当科所:環境・作物栄養科		
概要	作付再開 4 年目までのほ場では慣行施肥と稲わら還元を継続では生産性の低下傾向がみられた。これに対し、牛ふん堆肥と乾燥鶏糞を 4 年連用することにより、生産性と地力窒素の維持に有効であることが確認された。	
試験課題名:ゼオライト施用時における玄米への放射性セシウム移行リスク評価		A1-2-7
予算区分:受託(放射性物質測定調査委託事業) 開始年度:R3 終了年度:R3 担当科所:環境・作物栄養科		
概要	現地ほ場において、ゼオライトの施用後に慣行施肥と稲わら還元を継続することで、水稲への ^{137}Cs 移行リスクが減少した。そのため、ゼオライト施用による移行リスク低減効果は施用してから 10 年目まで継続中と考えられる。また、カリ施肥なしのポット栽培試験 3 作目において、ゼオライト施用による玄米中の ^{137}Cs 濃度の移行抑制効果が確認できた。	
試験課題名:水稲の生産性と安全性の評価ならびに放射性物質移行抑制の実証		A1-2-8
予算区分:繰入金(福島県民健康管理基金) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:稲作科		
概要	現地試験ほ場においては、土壌中の交換性カリ含量 25mg/100g を維持するためには、2~3 年おきに、施肥前に土壌診断を実施し、土壌中の交換性カリ含量が 25mg/100g となるように上乗せ施肥が必要と考えられた。また、稲わら施用により土壌中の交換性カリ含量が高まった。	
試験課題名:畑作物の放射性セシウム吸収に対する土壌の影響解明		A1-2-9
予算区分:繰入金(福島県民健康管理基金) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:畑作科		
概要	大豆の基肥 80% + 追肥 20% のカリ施用で放射性セシウム吸収抑制効果が高かった。また、カリ無施用ほ場の交換性・非交換性カリ含量の推移を把握した。 ソバの移行係数変動の一因が湿害であることを明らかにした。ラッカセイの放射性セシウム吸収特性を把握し、放射性セシウムが移行しにくい要因を明らかにした【放射線技術情報1】。	
試験課題名:カキ・ユズにおける放射性物質の吸収抑制技術等の確立		A1-2-10
予算区分:繰入金(福島県民健康管理基金) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:果樹研究所栽培科		
概要	カキ新植後の葉及び果実中 ^{137}Cs 濃度は、いずれの処理区も低い値であったが、現地ほ場の表土戻区でやや高い傾向がみられた。カキせん定処理後の ^{137}Cs 濃度は、2014 年処理樹、2015 年処理樹ともに各処理区間で有意な差は認められなかった。 ユズ現地ほ場の土壌深度別 ^{137}Cs 濃度は、表層から 3~6cm で高い傾向があり、一部では、さらに下層への移行が認められた。また、ユズ果実中 ^{137}Cs 濃度は低下する傾向が続いている。	

試験課題名:避難指示区域等における農作物中放射性セシウム吸収抑制技術の開発		A1-2-11
予算区分:受託(農林水産分野の先端技術展開事業) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:浜地域農業再生研究センター		
概要	マメ科緑肥作物の栽培・すき込みが後作物である水稻への放射性セシウム移行リスクに与える影響は小さいと考えられた。 また、籾殻くん炭の塩化カリ代替利用によるカリ供給効果及び放射性セシウム吸収抑制効果が認められた。 クリムソクローバー、夏ソバ、韃靼ソバを作付したほ場に蜜蜂の巣箱を設置して採蜜した結果、蜂蜜の放射性セシウム濃度は食品中の基準値を下回った。前年度より巣箱数は減少したが採蜜量は増加し、箱当たりの蜜源面積を適正に保つことが重要と考えられた。	
試験課題名:放射性セシウム濃度低減のための野菜栽培と調理加工		A1-2-12
予算区分:繰入金(福島県民健康管理基金) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:浜地域農業再生研究センター、環境・作物栄養科		
概要	コマツナ、パレイショ、カボチャでは交換性カリ含量の減少に伴い放射性セシウムの移行係数が上昇し、同じ交換性カリ含量に対する移行係数はカボチャ、パレイショ、コマツナの順に高かった。一方で、カンショ、ニンジンでは交換性カリ含量と移行係数の間に相関関係はなかった。	

A1-3 特定復興再生拠点区域等の円滑な営農再開に向けた技術実証

試験課題名:計測ロボットを活用した放射性物質等分布実態の把握		A1-3-1
予算区分:受託(農林水産分野の先端技術展開事業) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:浜地域農業再生研究センター		
概要	特定復興再生拠点区域内の農地において、近接する農地におけるほ場間及びほ場内の水平分布ムラが明らかとなった。深度分布においては 15cm 以下の層に RCs 濃度のピークがある地点が確認された。また、土壌中 RCs 濃度が 10,000Bq/kg 以上の場合でも、KURAMA-m による RCs 濃度の推定が可能であることが示された。	
試験課題名:営農再開を阻害する加害動物の行動特性や動物種把握による獣害防止策の提案		A1-3-2
予算区分:受託(農林水産分野の先端技術展開事業) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:浜地域農業再生研究センター		
概要	特定復興再生拠点区域内ではネズミ類・タヌキが多かった。アライグマは計 5 地点で撮影され、生息が確認できたが、12 月 15 日現在でアライグマは捕獲できなかった。	
試験課題名:通い農業支援システム等を活用した栽培状況の可視化と評価		A1-3-3
予算区分:受託(農林水産分野の先端技術展開事業) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:浜地域農業再生研究センター		
概要	熟練者及び新規栽培者ほ場において通い農業支援システムを導入したところ、土壌水分値及びハウス内温度などを共有しながらストックの栽培を行うことができた。また、新規栽培者のストックは全て L 規格以上となったが、開花時期を物日(クリスマス)に合わせられなかった。	
試験課題名:緑肥作物等の利用による地力回復技術の開発と蜜源利用		A1-3-4
予算区分:受託(農林水産分野の先端技術展開事業) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:浜地域農業再生研究センター		
概要	ヘアリーベッチとクリムソクローバーをすき込んだほ場で会津のかおりとにじゆたかの 2 品種を栽培したが、品種間で生育・収量の差が認められなかったことから、両品種ともに緑肥すき込み後の栽培に適性があると考えられた。	
試験課題名:効率的雑草管理技術の開発と実証		A1-3-5
予算区分:受託(農林水産分野の先端技術展開事業) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:浜地域農業再生研究センター		
概要	グリホサートカリウム塩液剤+塩素酸塩粒剤散布区では、イヌスギナ、ヨシ及び多年生雑草に対して除草効果がみられた。イヌスギナに対しては、ほ場間で効果の変動があった。	

試験課題名:特定復興再生拠点等における農作物栽培の生産性と安全性の評価		A1-3-6
予算区分:受託(農林水産分野の先端技術展開事業) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:浜地域農業再生研究センター、畜産研究所飼料環境科		
概要	双葉町、大熊町、葛尾村の特定復興再生拠点区域に設置された試験水田における水稻の生産性と安全性を評価した。この結果、いずれのほ場においても玄米収量は基準収量並みか上回り、玄米中放射性セシウム濃度は基準値を大幅に下回った。再浮遊した ¹³⁷ Csが玄米中 ¹³⁷ Cs濃度に及ぼす影響は小さいことが示されたが、 ¹³⁷ Cs降下量との関係性は判然としなかった。また、不織布によりRCsの植物体への移行低減効果が認められた。 特定復興再生拠点区域の除染後農地において、飼料用トウモロコシを栽培したところ、放射性セシウム濃度は飼料の暫定許容値(100Bq/kg)を大幅に下回った。	
試験課題名:放射性物質移行抑制技術の実証・開発と畑作物の安全性の評価		A1-3-7
予算区分:受託(農林水産分野の先端技術展開事業) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:畑作科		
概要	作物が吸収する放射性セシウム量を予測するために開発されたセシウム吸着シートが、畑作物において適用可能であるか現地実証を行った。子実の移行係数は大豆>ラッカセイ>そばの順に高く、各作物の放射性セシウムとカリウムの吸収特性を把握した。また、交換性カリ含量・交換性放射性セシウム濃度は期間中減少傾向にあることを確認した。	
試験課題名:草地における放射性セシウム吸収抑制技術の開発・実証と未除染牧草地利用可否基準の策定		A1-3-8
予算区分:受託(農林水産分野の先端技術展開事業) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:畜産研究所飼料環境科、浜地域農業再生研究センター		
概要	堆肥投入による放射性セシウムの牧草への移行低減効果及び持続性を検証するための試験ほ場を設置した。 放射性セシウム低吸収草種であるトールフェスクについて、特定復興再生拠点区域等の営農再開地域に適した品種を選定するための試験ほ場を設置した。なお、トールフェスクの利用性を向上させるため、採草利用における生育及び栄養価を調査したところ、1番草は生育が進むほど収量は増えTDNは低下した。2番草は7月に生育が停滞し、枯死部の増加に伴いTDNは低下した。また、現地試験においてもトールフェスクはオーチャードグラスより放射性Csを吸収しにくいことを実証した。 未除染放牧地の利用可否判断のための評価法を策定するため、歩行型放射能測定システム「KURAMA-II」による汚染密度指数及び空間線量率、土壌・野草中 ¹³⁷ Csを測定したところ、汚染密度指数は斜面下部、上部(林縁部)、谷部が比較的高い傾向にあった。また、土壌中 ¹³⁷ Cs(0-5cm深)と空間線量率(0m高)には相関関係が示唆された。	
試験課題名:山羊乳及び山羊肉の放射性セシウムの移行調査		A1-3-9
予算区分:受託(農林水産分野の先端技術展開事業) 開始年度:R3 終了年度:R5 担当科所:畜産研究所酪農科		
概要	山羊における飼料から畜産物等への放射性物質の移行に関する調査のため、山羊飼養施設を整備し、供試山羊を導入した。	
試験課題名:生産現場における最適な放射性セシウム移行リスクの評価手法およびほ場特性に合わせた移行低減技術の提案		A1-3-10
予算区分:受託(農林水産分野の先端技術展開事業) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:環境・作物栄養科		
概要	無カリ区試験現地ほ場において、交換性カリ含量は無カリ区で低く、放射性セシウムの移行係数は高くなった。非交換性カリ含量は無カリ区で同等かやや低く推移した。交換性 ¹³⁷ Cs濃度は区による差は見られなかった。カリ無施用ポット栽培において、非交換性カリと交換性 ¹³⁷ Cs濃度比の間には負の相関がみられたことから、非交換性カリ含量と交換性 ¹³⁷ Cs濃度比は相互に関係し、移行係数に影響している可能性が示唆された。	

A2 避難地域等の営農再開を支える技術の実証

A2-1 避難地域の営農再開を支援する研究

試験課題名: 避難地域等における営農再開のための支援研究	A2-1-1
予算区分: 福島県営農再開支援事業	
開始年度: R3 終了年度: R7	
担当科所: 浜地域農業再生研究センター	
概要	<p> 籾殻くん炭の塩化カリ代替利用による放射性セシウム吸収抑制効果を検証したところ、塩化カリを施用した場合と同様に交換性カリ含量を高め、玄米中放射性セシウム濃度を基準値未満にできることが明らかとなった【営農再開技術情報1】。 </p> <p> 秋播きクリムソクローバーと緑肥用夏ソバの組合せを検討したところ、それぞれのすき込み適期が明らかとなった【営農再開技術情報2】。 </p> <p> 営農再開前の保安全管理期間中の冬期に土壌処理剤の塩素酸塩粒剤(クロレート S)を散布したところ、翌春のスギナの発生を抑えることができた【営農再開技術情報3】。 </p> <p> クロタラリア播種の前年秋期にグリホサートカリウム塩液剤(ラウンドアップマックスロード)や、播種前冬期に塩素酸塩粒剤(クロレート S)を散布することで夏生一年生イネ科雑草の抑制効果がさらに高まることが明らかになった【営農再開技術情報4】。 </p> <p> イノシシを対象とした場合、ワイヤーメッシュは、電気柵と比べて、資材費用と設置労力はかかるが、除草管理が省力化でき、耐用年数を考慮した年間費用は同程度である【営農再開技術情報5】。 </p> <p> 飼料用米「ふくひびき」の湛水直播栽培において、鳥害等の被害を受けても、m²当たり苗立数が18本以上であれば、その後の管理を徹底することで、一穂粒数の増加が補償作用となり、10a当たりの地域平均単収526kg以上の収量が確保できる【営農再開技術情報6】。 </p> <p> 浜通りにおける飼料用米の湛水直播栽培で、播種同時散布の初中期一発除草剤+中期除草剤の体系処理の雑草管理を実証した結果、省力的に雑草の発生を抑制し、水稻の収量を確保できた【営農再開技術情報7】。 </p> <p> 除染後農地(表土剥ぎ及び客土)において、酒造好適米「福乃香」を用いて、有機栽培を現地実証した結果、慣行栽培同等の収量と品質を確保できた【営農再開技術情報8】。 </p> <p> マメ科緑肥作物すき込み後に水稻高密度播種苗を移植し、水稻栽培を実証したところ、還元障害等による水稻生育への影響は見られなかった【営農再開技術情報9】。 </p> <p> 「山木屋在来ソバ」を栽培し「会津のかおり」と比較した結果、生態型が「会津のかおり」に近く、子実重が「会津のかおり」を下回るが千粒重と容積重が同程度であることが明らかとなった【営農再開技術情報10】。 </p> <p> 播種・収穫作業の分散のためにソバ品種「にじゆたか」の播種時期別の収量・品質を調査したところ、「会津のかおり」と比較すると播種晩限が早いことが明らかになった【営農再開技術情報11】。 </p> <p> 除草剤の効果的な使用及び適切な鳥獣被害対策により、林縁部営農再開ほ場でもカンショを栽培できることが明らかになった【営農再開技術情報12】。 </p> <p> 川内村において有機 JAS 適合肥料を用いたフェネルを栽培したところ、慣行栽培(化学肥料区)と比べて、初期生育が遅れるものの、収量は同等であることが示された【営農再開技術情報13】。 </p> <p> 葛尾村の夏秋ピーマン栽培において自動かん水システムを導入したところ、かん水作業及び追肥作業の負担が軽減でき、販売量が増加した【営農再開技術情報14】。 </p> <p> 阿武隈中山間地域において福島県オリジナルカラー品種である「はにかみ」を実証栽培した結果、普通栽培では7月下旬から8月中旬、抑制栽培では8月下旬から10月上旬の開花となり、どちらの作型も平均60cm以上の切り花を1球根当たり約2.5本収穫できた【営農再開技術情報15】。 </p> <p> 阿武隈中山間地域において新たな品目として期待されるキンギョソウの摘心栽培を実証した結果、春夏作型では開花盛期が6月下旬となり、切り花長が平均80cmを超える生産が可能であった【営農再開技術情報16】。 </p> <p> 浜通り平坦地域のユウカリ栽培において、被覆作物としてオオナギナタガヤによる除草作業の省力化を実証したところ、被覆作物を播種しないほ場と比較し、除草回数を半分に減らすことができた【営農再開技術情報17】。 </p> <p> 浜通り平坦地域におけるトルコギキョウの季咲き作型において、トルコギキョウ斑点病に登録がある5剤を使用し、4月から5月は2週間に1回、6月以降は7日~10日に1回散布したところ、発病株率は0%~12%となった【営農再開技術情報18】。 </p> <p> 除染後農地において早春施肥による窒素追肥量を増やしたところ、硝酸態窒素濃度の許容範囲内を維持したまま牧草収量を増加させることができた【営農再開技術情報19】。 </p> <p> 除染後農地における飼料用トウモロコシ栽培において、ヘアリーベッチを春に播種し、すきこんだところ、土壌への窒素供給量が確保され、TDN収量が増加した【営農再開技術情報20】。 </p>

A2-2 広域エリアを対象とした大規模水田営農における生産基盤技術の確立

試験課題名:広域エリアにおける水田輪作栽培管理技術の開発・実証		A2-2-1
予算区分:受託(農林水産分野の先端技術展開事業) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:稲作科、浜地域研究所		
概要	乾田直播栽培において、「ふくひびき」、「天のつぶ」、「コシヒカリ」の播種時期を3月下旬、4月上旬、4月下旬とした栽培試験や「天のつぶ」の播種量を変えた栽培試験を行い、各試験における生育状況を把握した。しかし、「ふくひびき」と「天のつぶ」は、いずれも目標収量を確保できず、生育指標値の作成には至らなかった。	
試験課題名:営農再開に対応した大規模水田輪作体系の実証		A2-2-2
予算区分:受託(農林水産分野の先端技術展開事業) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:畑作科、経営・農作業科		
概要	大豆栽培における排水改善技術として浅層暗渠を施工したほ場では降雨後の土壌水分が速やかに低下する傾向があった。「浅層暗渠+畝立て」で精子実重が最も多く、浅層暗渠や畝立てが、湿害対策に一定の効果があった。 現地では排水対策施工前大豆の生育収量調査を行い、湿害によると見られる生育状況を確認した。	
試験課題名:広域エリアにおける ICT を用いた省力的ほ場管理技術		A2-2-3
予算区分:受託(農林水産分野の先端技術展開事業) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:作物保護科		
概要	斑点米被害予測モデルの構築と精度検証を行った。調査地域における斑点米被害の主要加害種はクモヘリカメムシとカスミカメムシ類であり、クモヘリカメムシのトラップ誘殺数に影響する土地の利用情報要因として、トラップから1km以内の針葉樹林面積が抽出された。	
試験課題名:飼料用トウモロコシの安定多収、加工・調製技術の開発と実証		A2-2-4
予算区分:受託(農林水産分野の先端技術展開事業) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:畜産研究所飼料環境科		
概要	水田輪作体系に適した多収子実用トウモロコシ品種を選定するため、生育特性や収量性を調査したところ、RM108~123 品種を用いることで収量性が向上することが示唆され、収穫時期も分散した。なお、播種時期を1か月遅らせることにより、さらに収穫時期の分散が可能であったが子実収量が減少した。 トウモロコシ子実を主体としたマルチグレインサイレージ調製のため、繁殖雌牛を想定した濃厚飼料を設計し、パウチ法によりサイレージ化して発酵品質を調査したところ、トウモロコシ子実、大豆、飼料用米を混合して水分30%で調製したサイレージの発酵品質は良好であった。また、調製した飼料では、CP、TDN は市販配合飼料と同等であったが、EE は高く、繊維成分及びミネラル成分は低くなった。	
試験課題名:経営管理システムを活用した経営データ分析・活用手法		A2-2-5
予算区分:受託(農林水産分野の先端技術展開事業) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:経営・農作業科		
概要	経営管理システム活用で品目別労働時間を明らかにした。また、システム導入農業者が当データを有効活用できていないことが分かった。	

A2-3 先端技術を活用した施設野菜・畑作物の省力高収益栽培・出荷技術の確立

試験課題名:施設果菜類の雇用労力とロボットを作業主体とした大規模経営技術の開発・実証		A2-3-1
予算区分:受託(農林水産分野の先端技術展開事業) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:浜地域研究所、野菜科、経営・農作業科		
概要	施設夏秋キュウリにおいて、つる下ろし栽培と摘心栽培を比較し、生育や収量等を明らかにした。つる下ろし栽培の可販果収量は摘心栽培の約85%となったが、可販果率はつる下ろし栽培の方が高かった。 ミスト噴霧による高温抑制効果、生育及び収量への影響を調査した。高温時期のミスト噴霧により平均気温、30℃及び35℃以上の積算時間が抑制でき、湿度や飽差も改善された。ミスト噴霧が多かった時期に側枝数が増加したが収量差は判然としなかった。また、ミスト2種類を比較し、資材費や作業上の点から「クールネットプロ」を適資材として選定した。 経営評価では、生産管理支援システムの改良に向けた現地の施設キュウリ栽培における作業調査により、作業項目の分類方法や旬別作業時間の基礎データを収集し、現地慣行栽培における収支分析を行った。キュウリ栽培の場合、一度の作業の中で複数の動作を並行して行う傾向がみられた。	

試験課題名:加工適性の高いコムギの導入による省力高収益生産技術の開発・実証		A2-3-2
予算区分:受託(農林水産分野の先端技術展開事業) 開始年度:R3 終了年度:R5 担当科所:畑作科		
概要	小麦有望品種「夏黄金」の地域適応性と省力施肥体系開発のための実証ほを所内と県内 2 地点に設けた。	
試験課題名:露地野菜栽培における難防除雑草優占化機構の解明と難防除雑草対策技術の確立		A2-3-3
予算区分:受託(農林水産分野の先端技術展開事業) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:浜地域農業再生研究センター、野菜科		
概要	タマネギの春まき直播栽培では、生育期間が長く確保できる晩生品種が適し、播種時期は低温の影響を受けにくい4月上旬以降が適していると考えられた。	

A2-4 避難地域の営農再開を促進する先端プロ技術の社会実装

試験課題名:花きの計画的安定生産技術の実証研究		A2-4-1
予算区分:受託(農林水産分野の先端技術展開事業) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:花き科		
概要	【キク類】消灯後の日長条件を14~15hr内に変えたところ、到花日数が異なった。ピンク色LED、電球色LEDを用いて電照栽培を行った場合、いずれも赤色LEDよりやや劣るものの、開花抑制効果は高いことが明らかとなった。民間育成品種を45℃1分の温湯浸漬処理した結果品種によって葉焼け症状が出たが、その後の草丈伸長程度にはほとんど影響を及ぼさなかった。しかし、3週間の冷蔵保存後に温湯浸漬処理を実施した場合は、一部が立ち枯れた。 【トルコギキョウ】秋出荷作型において、15℃の作型適応処理は、20℃に比較して開花期が1週間程度遅くなるものの、同様な切り花を得ることができた。また、20℃で作型適応処理した結果、無電照で行うと生育が停止し定植後は枯れ上がったことから、電照は不可欠であることが明らかとなった。本葉2対葉苗を、作型適応処理し7月下旬に定植した結果、切り花品質が向上し、10月に揃って開花させることが可能となるが、品種によってその効果に差があった。	
試験課題名:早期成園化が可能な樹形によるナシ、ブドウ、モモの省力・高品質生産技術の実証		A2-4-2
予算区分:受託(農林水産分野の先端技術展開事業) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:果樹研究所栽培科、病害虫科		
概要	ナシジョイントV字樹形は定植3年目で成園並みの収量が得られ、前年比で約2.4~4倍に増加した。定植時の苗の樹齢によって新梢長や花芽着生率等の樹体生育に差がみられた。 モモのジョイントV字樹形において、簡易雨よけを組み合わせたところ、果実生産性に対する影響は認められなかった。 ブドウの花穂整形時間は支梗区で最も短かったが、果粒数が少なく、果房重が小さかった。房尻区、切り詰め区は作業時間が慣行区より2割ほど短く、果房重も慣行区並であった。 ナシのジョイントV字樹形の導入による早期成園化技術と水稻育苗ハウスと盛土式根圏制御栽培法を利用したブドウの早期成園化技術の実証研究に取り組み、成果集及び技術導入マニュアルを作成した【秋冬普及成果5】。 果樹研究所における「甘太」の収穫期は「新高」と同時期の10月6日(満開後171日)頃で、品質は大玉で糖度が高く食味良好であった。「王秋」の収穫期は11月3日(満開後201日)頃で、品質は大玉で糖度と酸味のバランスがよく食味良好であることを明らかにした【参考成果24】。	
試験課題名:肉用牛のAI超音波肉質診断技術の実証		A2-4-3
予算区分:受託(農林水産分野の先端技術展開事業) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:畜産研究所肉畜科		
概要	AI超音波肉質診断により、肥育中に肉質を判断した。肉質の向上が見込める牛は単価向上を目指して共励会へ出品する、実証農家の経営判断に繋がった。逆に、肉質の向上が見込めない牛は早期出荷に繋がりに、平均肥育日数が26.4日短縮された。	

B 農林水産業の生産力を強化するための、先端技術を活用した技術開発等の推進

B1 先端技術を活用した新たな農業生産技術の開発

B1-1 イノベーションによる避難地域等の新たな農業生産技術の開発

試験課題名: 稲作の大規模化・省力化に向けた農業用水利施設管理省力化ロボットの開発	B1-1-1
予算区分: 受託(農林水産分野の先端技術展開事業) 開始年度: R3 終了年度: R5 担当科所: 経営・農作業科	
概要	水路の堆積物の実態や、土砂上げ作業時の作業能率を明らかにし、多面的機能支払い活動での土砂上げ作業の労働負担が増大している傾向を確認した。
試験課題名: 「見える化」技術を活用した土壌肥沃度のバラツキ改善技術の開発	B1-1-2
予算区分: 受託(農林水産分野の先端技術展開事業) 開始年度: R3 終了年度: R5 担当科所: 浜地域農業再生研究センター	
概要	高機能堆肥の添加により、土壌中の炭素含量が増加することが確認されたが、その増加量は土壌条件により異なった。
試験課題名: ICT・放牧を活用した肉用繁殖雌牛管理技術の効率化	B1-1-3
予算区分: 受託(農林水産分野の先端技術展開事業) 開始年度: R3 終了年度: R7 担当科所: 畜産研究所沼尻分場	
概要	放射線測定機能搭載 GPS を作成中であり、携帯電話の電波が届かない場所においても通信が可能であった。

B1-2 スマート農業技術を活用した農業生産技術の確立

試験課題名: 中山間地における水稻スマート有機栽培体系の実証	B1-2-1
予算区分: 受託(農林水産省: スマート農業実証プロジェクト) 開始年度: R2 終了年度: R3 担当科所: 有機農業推進室、浜地域研究所、経営・農作業科	
概要	<p>広野町に実証ほ場を設置し、中山間地域の条件不利地及び震災・原発事故に起因する避難指示を解除した後の営農再開地域で水稻有機栽培地の再生に向け、スマート農業機器を活用した各種作業の省力化や生産性・品質の高位平準化のため以下の項目について実証した。</p> <p>冬期間の土壌乾燥技術として畦立て耕起(二山耕起)を実施し、その抑草効果を検証した結果、移植後 2 週間までは雑草発生は抑制されたが、その後の生育期間中は草種によって抑草効果が異なり、コナギでは十分な効果が認められなかった。</p> <p>直進アシスト田植機と高精度水田用除草機の組み合わせによる抑草効果及び労力負荷軽減効果を検証した。直進アシスト田植機は移植作業の労働負荷低減に有効で、熟練者、非熟練者ともに直進移植精度が向上した【参考成果43】。</p> <p>水田の水管理作業省力化のため、通信機能を持つ自動水管理システムの実用性を検証した。システムは水位センサーと給水ゲートから構成され、専用のアプリを使用して、スマートフォンから水位、水温及び給水ゲート開閉状況の確認が可能であった。また、水位センサーと給水ゲートを連動させることにより、水田の水位を一定に保つことが可能であった【参考成果1】。深水管理による抑草効果は、ノビエ、ホタルイ、広葉雑草類で確認されたが、コナギ対しては十分な効果がなかった。</p> <p>ドローン撮影画像から、(株)スカイマティクス葉色解析サービス「いろは」の解析機能を活用し、雑草発生エリアマップ作成と水稻葉色診断を行った。葉色診断は肥培管理計画に活用し、ほ場間の生育ムラの解消に効果があった。また、雑草発生エリアマップは、機械除草作業における除草作業掻き取り深度の判断目安等に活用可能であった。</p> <p>収量コンバインの作業データの採録を行い、収集データの精度を検証したが、コンバインの故障により検証できなかった。</p> <p>自走リモコン草刈機導入による畦畔管理労力低減効果と、斑点米カメムシ類被害抑制効果について検証した。その結果、自走リモコン草刈機は傾斜約 30~40 度の法面で安定して草刈りが可能であり、作業能率は 3.9~7.7a/h、既往の刈払機の約 1.1~1.6 倍となった。また、出穂前の畦畔除草の効果により、斑点米カメムシの発生は抑えられた【参考成果4】。</p> <p>スマート農業機器導入体系について、ほ場管理システム「アグリノート」を利用したデータ収集と経営評価を行った。導入機器のうち、水田除草機、自動水管理システム、リモコン草刈機は、作業時間の削減効果があり、導入区の作業時間は、水稻有機栽培全国平均の 2 割(6.5h/10a)まで削減した。また、労働費の削減により、中山間地域の水稻有機栽培においても、スマート農業技術を導入することで収益性の向上につながる可能性が示唆された【参考成果5】。</p>

試験課題名:データベースを活用したスマート農業経営の構築	B1-2-2
予算区分:県単(企業農業参入サポート強化事業) 開始年度:R3 終了年度:R5 担当科所:経営・農作業科	
概要 現状の農業経営指標の作成方法や内容を検討し、次期策定時の作成手法及び調査票様式を作成した。また、スマート農業技術導入経営体の品目別・時期別・作業別労働時間を明らかにした。	

B1-3 先端技術を活用した省力的栽培技術の確立

試験課題名:水稲無コーティング湛水直播による業務用米の低コスト生産技術の確立	B1-3-1
予算区分:受託(イノベーション創出強化研究推進事業) 開始年度:R2 終了年度:R4 担当科所:稲作科	
概要 ロボットトラクタによりほ場内で部分的に無コーティング湛水直播の無人播種作業が実施できた。苗立ちや穂数は確保出来たが、過剰生育及び雑草害のため、坪刈り収量は鉄コーティング湛水直播と同等であった。ほ場全体でヒエが多発し、雑草対策が課題となった。	
試験課題名:IoTによる遠隔監視システムを活用した育苗管理の省力化技術開発	B1-3-2
予算区分:県単 開始年度:R3 終了年度:R5 担当科所:経営・農作業科	
概要 市販されている IoT 機器を利用した遠隔監視システムを作製し、ハウス内環境データの取得が可能となった。	
試験課題名:「米処」会津地域における新たな稲作経営の展開のための栽培技術の確立	B1-3-3
予算区分:受託(イノベーション創出強化研究推進事業) 開始年度:R3 終了年度:R5 担当科所:会津地域研究所	
概要 大規模経営体等で過度に集中する春作業の分散化を目指し、降雪・積雪前の初冬に播種する初冬播き乾田直播栽培を会津平坦部で検証した結果、「ひとめぼれ」の収量は 51.0~60.0kg/a 確保でき、適応可能であると考えられた【秋冬参考成果3】。現地ほ場で、2019 年産種子を用いて「ひとめぼれ」及び「天のつぶ」を 11 月下旬~12 月上旬に播種した結果、45.6~46.9kg/a の収量が得られた。	
試験課題名:水田畦畔雑草の省力効率的管理法の確立	B1-3-4
予算区分:受託(農業機械技術クラスター事業) 開始年度:R1 終了年度:R3 担当科所:会津地域研究所	
概要 農研機構(農業機械研究部門、西日本農業研究センター)、IHI アグリテックとコンソーシアムを結成し、ハンマーナイフ式で最大適応傾斜角 45°のリモコン操作式草刈機を開発した【普及成果11】。	
試験課題名:ブロッコリー選別自動収穫機の機械化栽培体系の確立	B1-3-5
予算区分:県単 開始年度:R3 終了年度:R4 担当科所:経営・農作業科	
概要 選別自動収穫機の作業性能試験において、作業速度別収穫精度を確認した。	
試験課題名:ブロッコリー栽培における一斉収穫・出荷・販売体系の構築	B1-3-6
予算区分:受託(新稲作研究会:委託試験) 開始年度:R3 終了年度:R5 担当科所:経営・農作業科	
概要 手収穫 3 回分の収穫作業について、収穫機を導入することにより 1 回の収穫作業に軽減することができた。一方、青果用の出荷体系としては収穫期のカット精度が不十分で、規格に合わせた追加調製が必要であり、手収穫ほどの収穫能率が確保できず、労働費の削減にはつながらなかった。	

試験課題名: ICT・IoT 技術を活用した花きの新たな農業生産技術の確立		B1-3-7
予算区分: 県単 開始年度: R3 終了年度: R7 担当科所: 会津地域研究所		
概要	会津若松市現地のトルコギキョウ 6 月下旬定植抑制作型において、ICT 機器による栽培環境モニタリングデータと生育データを調査したところ、土壌水分と飽差が切り花品質に影響することが明らかとなり、ICT 機器は生育ステージに応じた栽培環境の改善に活用できると考えられた。	
試験課題名: 大規模酪農経営における飼養管理技術の確立		B1-3-8
予算区分: 県単 開始年度: R3 終了年度: R6 担当科所: 畜産研究所酪農科		
概要	大規模酪農家の実態調査を行った結果、搾乳能率は、搾乳ロボットを導入した農家と、パーラー搾乳施設を 1 つに集約した農家で高くなっていた。また、経営規模を問わず、長命連産性及び繁殖管理が重要視されていた。	

C 県産農林水産物の競争力を強化するための、「ふくしま」ならではの価値向上に資する品種開発等の推進

C1 市場ニーズに対応したオリジナル品種・系統と生産技術等の開発

C1-1 個性豊かな県オリジナル水稻、野菜・花き品種の育成

試験課題名: 個性豊かな県オリジナル水稻品種の育成		C1-1-1
予算区分: 国庫(福島県農産物競争力強化事業(研究))、県単、受託(JA グループ福島寄附金) 開始年度: R3 終了年度: R7 担当科所: 品種開発科		
概要	<p>出穂期が「あきたこまち」～「コシヒカリ」熟期の高温登熟性の優れる良質・極良食味品種、低温出芽性・伸長性、耐倒伏性の優れる直播向け品種、高度精白可能な酒造好適米品種の育成を目標とし、50 組合せの交配を行い 46 組合せ(粳米 32、酒米 13、餅米 1)から稔実種子を得た。</p> <p>系統選抜により一般粳 26 系統(郡系 1365～1390)、酒米 10 系統(郡系酒 1391～1400)の計 36 系統に新規郡系番号を付与した。</p> <p>郡系から有望な系統を選抜し、「郡系 1235」に「福島 68 号」、「郡系 1247」に「福島 69 号」、「郡系 1244」に「福島 70 号」、「郡系酒 1272」に「福島 71 号」を付与し、次年度生産力検定本調査、奨励品種決定基本調査に供試することとした。</p> <p>福島番号付与系統について、総合的な評価を行ったところ、「福島 62 号」、「福島 63 号」、「福島 65 号」、「福島 66 号」は比較品種よりもかなり多収だった。「福島 66 号」は食味も優れていた。福島系統のうち 47 号及び 54 号は特性を把握したため、試験終了とした。</p> <p>県育成系統の湛水直播適性(低温出芽性、低温伸長性)を検定した結果、発芽率“優”と判定した系統は「福島 47 号」の 1 系統であった。</p> <p>福島番号系統及び郡系系統の一部、計 25 系統について高温登熟性検定を実施したところ、「強」と「やや強」と判定した系統は 22 系統であった。特に、「福島 62 号」及び「福島 65 号」は、収量性と高温登熟性に優れていたため有望とした。</p> <p>特性検定試験(耐冷性、葉いもち、穂いもち、真性抵抗性)を実施した。耐冷性が「強」以上と判定された系統は 22 系統、葉いもちが「強」以上と判定された系統は 39 系統、穂いもちが「強」以上と判定された系統は 52 系統だった。真性抵抗性は 85 系統について、いもち病に対する真性抵抗性遺伝子型を明らかにした。</p>	
試験課題名: 個性豊かな県オリジナル野菜品種の育成		C1-1-2
予算区分: 国庫(福島県農産物競争力強化事業(研究))、県単、受託(JA グループ福島寄附金) 開始年度: R3 終了年度: R7 担当科所: 品種開発科		
概要	<p>【イチゴ】収量性、果実品質、病害抵抗性に優れた交配母本を選定し、8 組合せで交配を行った。個体選抜では、3 組合せ 42 個体を供試し、3 組合せ 5 個体を選抜した。系統選抜では 2 系統を供試し、1 系統を選抜し、「郡系 105」を付与した。「福島 14 号」について現地適応性試験を県内 3 カ所で実施し、有望との評価を得た【秋冬普及成果 1】。</p> <p>【アスパラガス】品質及び収量性が優れる全雄又は混性品種を育成するため、19 組合せの交配を行った。組合せ検定 1 年目は 16 系統を供試し、生育を確認した。組合せ検定 2 年目は 23 系統を供試したが郡交番号を付与できる系統を得られなかった。福島交 11 号について、センター内の生産力検定試験、現地 2 カ所での現地適応性試験を開始し、ウェルカムより生育量が優れることを確認した。</p>	

試験課題名:個性豊かな県オリジナル花き品種の育成		C1-1-3
予算区分:国庫(福島県農産物競争力強化事業(研究))、県単、受託(JA グループ福島寄附金) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:品種開発科		
概要	【リンドウ】頂花咲き性が優れ需要期に採花できる青紫系品種、変わった花色や花序等の特長を持つ新規性の高い品種を育成するため、自殖系統 14 組合せ、組合わせ能力検定 60 組合せの交配を行った。組合わせ能力検定において、2 組合わせを選抜し、「郡交 110」、「郡交 111」を付与した。また、生産力検定の開花期検定において、「郡交栄 103」を有望と判断し、「福島栄 24 号」を付与した。 【カラー】球根の再利用性が高く、花色が優れた良質・多収性の品種を育成するため、自殖交配 18 組合せ、組合せ交配 29 組合せの交配を行った。開花球養成検定において、培養苗由来の 15145(1)を有望と判断し、「郡系 6」を付与した。	
試験課題名:個性豊かな品種育成のための促進技術開発		C1-1-4
予算区分:国庫(福島県農産物競争力強化事業(研究))、県単 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:品種開発科		
概要	【イネ】DNA マーカーを用いて福島系統 3 系統、郡系系統 33 系統、単独系統 267 系統の多型解析を行い、葉いもち抵抗性、穂いもち抵抗性、耐冷性、閉花受粉、カドミウム低吸収性遺伝子の有無を明らかにした。 【リンドウ】2020 年度の未授精胚珠培養で得られた植物体のうち、13 個体が稔性を有した。2019 年度の未授精胚珠培養で得られた植物体のうち、純系と判明した 9 個体について系統名を付与し定植した。また、「ふくしま凜夏」とその両親系統及び「天の川」とその花粉親系統について、DNA マーカーによる品種識別を行った結果、品種同士及び品種とその交配親を識別することができた【普及成果3】。 【カラー】かずさ DNA 研究所と千葉県農林業総合研究センターが作成した「DNA マーカーを用いた湿地性カラーの品種識別マニュアル」の手法により、福島県オリジナル畑地性カラー品種「はにかみ」、「ミルクームーン」及び「キビタンイエロー」について、品種を特定することができた【秋冬普及成果2】。 【アスパラガス】両性花由来実生 77 個体について、DNA マーカーを用い超雄性を判別した結果、11 個体が超雄性であった。	

C1-2 作物、野菜、花きの有望品種・系統の評価

試験課題名:奨励品種決定調査		C1-2-1
予算区分:県単 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:稲作科、畑作科、会津地域研究所、浜地域研究所		
概要	水稻では、予備試験で福島 63 号をやや有望、本調査で福島 47 号を試験終了、福島 59 号を継続とした。小麦の夏黄金はやや有望、ダイズの東山 239 号は特性把握につき中止とした。	
試験課題名:大豆系統適応性検定試験		C1-2-2
予算区分:受託(大豆育成系統の地域適応性検定栽培試験) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:畑作科		
概要	育成地より配付された 20 系統のうち、3 系統をやや有望とした。	
試験課題名:麦類育成系統の地域適応性試験		C1-2-3
予算区分:受託(国産麦開発支援事業) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:畑作科		
概要	育成地より配付された小麦 26、大麦 21 系統のうち、小麦は 1、大麦は 5 系統をやや有望とした。	

C1-3 作物、野菜、花きの有望系統・新品種の栽培技術の確立

試験課題名: 県産米の高品質化・良食味米生産のための栽培管理技術の確立		C1-3-1
予算区分: 受託(新稲作研究会委託試験、稲民間育成品種評価委託試験) 開始年度: R3 終了年度: R3 担当科所: 稲作科		
概要	県オリジナル水稲品種「福笑い」の収量、品質の向上を図るため、収量 55~60kg/a を目標とした幼穂形成期の NDVI 値による生育指標値を作成した【普及成果4】。 供試した「全農 20-01」、「全農 20-02」、「ゆみあずさ」は対象の「あきたこまち」と比較し、収量が同等~優り、品質が劣る~同等、食味官能総合評価が同等であった。	
試験課題名: 県オリジナル酒造好適米の栽培方法の確立		C1-3-2
予算区分: 国庫(オリジナルふくしま水田農業推進事業) 開始年度: R3 終了年度: R7 担当科所: 品種開発科、会津地域研究所		
概要	気象条件による酒造適性への影響を評価するため、移植時期の違いによる出穂後の気温と玄米品質への影響を調査したところ、今年度の気象条件においては、「五百万石」の早植区と「夢の香」の早植区で登熟期間の日平均気温が 26℃を越えたが、高温障害による玄米品質への影響は確認されなかった。 移植時期や苗の違い(中苗と稚苗)による品質への影響を評価するため、出穂時期や生育量を調査したところ、福乃香は、移植時期を遅らせることで、中苗と稚苗の違いによらず心白発現率、玄米タンパク質含有率が低下した。	
試験課題名: 野菜の有望系統・新品種の栽培技術の確立		C1-3-3
予算区分: 国庫(福島県農産物競争力強化事業(研究)) 開始年度: R3 終了年度: R5 担当科所: 野菜科		
概要	イチゴ「福島 ST14 号」について、電照の効果に関する試験を実施している。	
試験課題名: 花きの有望系統・新品種の栽培技術の確立		C1-3-4
予算区分: 国庫(福島県農林水産事業再生総合事業費) 開始年度: R3 終了年度: R5 担当科所: 花き科、会津地域研究所		
概要	リンドウ「天の川」の挿し芽育苗による越冬芽の形成率は、128 穴のセルトレイを用いた場合、天挿しが管挿しを上回った。 県オリジナルカラー品種の培養苗について、1年間養成後定植した球根の定植時重と切り花本数、切り花長の間に相関は見られなかったが、腐敗による球根の消失が多く判然としなかった。また、5g~30g 球の球根肥大率は、4 月定植区が 8 月定植区を上回ったが、7 月中旬以降の高温の影響により、腐敗による球根消失率の割合も高くなった。 県オリジナルカラー品種では、組織培養で増殖した苗をセルトレイに移植し、球根養成栽培に適する小球を形成させる必要がある。小球の形成は、9 月移植の方が 11 月移植より充実したものとなり、球根養成後の球根も肥大することを明らかにした【参考成果40】。「はにかみ」、「ミルクームーン」、「キビタンイエロー」について、9 月に成型培養土セルトレイで形成した小球(セル成型苗)を球根養成栽培することで、切り花生産に適する球根が得られることを確認した【参考成果41】。	

C1-4 個性豊かな県オリジナル果樹品種の育成

試験課題名: 個性豊かな県オリジナル果樹品種の育成		C1-4-1
予算区分: 国庫(福島県農産物競争力強化事業(研究))、受託(JA グループ福島寄付金)、県単 開始年度: R3 終了年度: R7 担当科所: 果樹研究所栽培科		
概要	モモ「154-1(101-26×モモ福島 12 号)」は、食味良好で裂果が見られず高評価であったため、現地試作系統「モモ福島 18 号」として番号を付与し、現地試作試験に供することとした【参考成果23】。	

C1-5 果樹の有望系統の評価および新品種・有望系統の栽培技術の確立

試験課題名:果樹の有望系統の評価および新品種・有望系統の栽培技術の確立		C1-5
予算区分:県単 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:果樹研究所栽培科		
概要	リンゴ「べにこはく」は、果梗が10mm以下の果実で蜜入りが多い傾向にあることから、これを摘果の目安とすることにより、蜜入り良好な果実を安定して生産できることを実証した【参考成果27】。	

C1-6 個性豊かな県優良家畜等の改良

試験課題名:牧草・飼料作物の優良草種・品種の選定		C1-6-1
予算区分:県単 開始年度:H30 終了年度:R3 担当科所:畜産研究所飼料環境科		
概要	本県に適した耐暑性に優れるペレニアルライグラス品種を選定するため、3品種について生育特性及び収量性を3年間調査した結果、「夏ごしペレ」が越夏性において優れており、収量性が既存の奨励品種と同等～やや高かった【普及成果10】。 耐暑性・越夏性が高い極長期利用型イタリアンライグラス(イタリアンライグラス型フェストロリウム含む)品種を選定するため、4品種を播種し、発芽の良否及び定着時草勢を調査した結果、いずれの品種も既存の奨励品種より優れていた。	
試験課題名:「フクシマ L2」の開放型育種		C1-6-2
予算区分:県単 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:畜産研究所肉畜科		
概要	「フクシマ L2」の開放型育種を実施した。外部導入したランドレース精液を人工授精することにより、産子に雑種強勢効果がみられた。	
試験課題名:県ブランド鶏の改良と開発		C1-6-3
予算区分:県単 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:畜産研究所養鶏科		
概要	会津地鶏及びふくしま赤しゃも(川俣シャモ)の雌系種鶏であるロードアイランドレッド種 P13 系統、雄系種鶏である大型会津地鶏、大型シャモの推定育種価は、正の値を確保した。大型しゃも後継系統では、7・25週齢体重、短期産卵率、卵重及び卵殻強度で表現値が上回った。後継の大型しゃもから作出したふくしま赤しゃもの能力は、発育、産肉性に優れ、味や香り、歯ごたえ等や脂肪酸組成の維持が示唆された。【参考成果36】。	
試験課題名:胚移植技術を活用した高能力肉用牛の効率的生産技術の確立		C1-6-4
予算区分:県単 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:畜産研究所動物工学科		
概要	移植前に子宮に胚培養液を注入する SEET 法を用い、ホルスタイン種経産牛に体外受精胚を試験区と対照区両区で移植した結果、対照区で1頭の受胎を確認した。	
試験課題名:ゲノム情報を活用した家畜の育種改良技術の確立		C1-6-5
予算区分:県単、国庫 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:畜産研究所動物工学科		
概要	県有種雄牛 11 頭(枝肉重量の推定育種価正確度 0.95 以上)の推定育種価(2021 年 10 月)とゲノム育種価(2021 年 6 月)間において、バラの厚さで中程度の相関を、ほか 5 形質で高い相関を確認した。 また、県独自の評価体制構築のため、今年度は県内肥育牛 901 頭の SNP を解析し、過年度と合わせて 1,630 頭の SNP 解析が完了した。	
試験課題名:ゲノミック評価を利用した繁殖雌牛の評価		C1-6-6
予算区分:受託(JA グループ福島寄附金) 開始年度:R3 終了年度:R5 担当科所:畜産研究所動物工学科		
概要	簡便法で分注した毛根検体から DNA を抽出しても、従来法と遜色ない品質の DNA が得られた。	

C2 農産物を「ふくしま」ならではの産品にする技術の開発

C2-1 県産農産物の特性を活かした利用技術の開発

試験課題名：県産農産物の特性を活かした利用技術の開発		C2-1
予算区分：県単(試験研究費(行政))、国庫(福島県産農産物競争力強化事業(研究)) 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：流通加工科		
概要	県産農産物の加工技術や品質保持技術の開発・改良を進めるとともに、加工原料としての特性を解明することによって特色ある加工素材の利用技術を開発する。 あんぽ柿の原料果の果皮色を果実カラーチャートにより判定し、あんぽ柿の品質を調査したところ、収穫時 6.0 以上で高品質なあんぽ柿が製造できることを明らかにした。 発芽玄米麴の製麴条件を調査し、マイクロ波熱処理による蒸米の水分制御技術を利用することで、発芽玄米麴の製麴歩合及び酵素活性が高まることを明らかにした。 県産リンゴについて、原料果としての品質とジュース、ソリッドパック及びジャムへ加工した際の物性や含有成分、加工前後の成分量の変化等の特性を調査し、品種毎の特徴をまとめた【参考成果 11】。 イチゴ県オリジナル品種「福島 14 号」について、長距離輸送による振動が春期収穫の果実に与える影響を調査した。 アスパラガスに含まれるアミノ酸の種類を特定し、含有量と局在を可視化した。また、県内で広く栽培されているブロッコリーについてビタミン類の部位別含有量を測定し、局在を可視化した【普及成果 1】。 アスパラガスに含まれるルチン及びアミノ酸、紫アスパラガスのアントシアニンについて、加熱処理後の成分量の変化を明らかにした。	

C2-2 県産農産物の輸出拡大に向けた生産・保鮮技術等の開発

試験課題名：モモせん孔細菌病に対する多目的防災網を活用した防除効果の検証		C2-2-1
予算区分：国庫(園芸グローバル産地育成強化事業) 開始年度：R3 終了年度：R5 担当科所：果樹研究所病害虫科		
概要	秋季に多目的防災網をモモ樹に設置することにより、モモせん孔細菌病菌の越冬菌密度の低減が可能であることが示唆された。	
試験課題名：ダリアの鮮度保持御術の開発		C2-2-2
予算区分：繰入金(園芸グローバル産地育成強化事業) 開始年度：R3 終了年度：R4 担当科所：花き科		
概要	ダリア切り花を中国へ輸出するのに要した時間は、切り花から店舗到着まで 4 日間であった。店舗到着後の日持ち期間は、蕾切り、通常切りに差は見られなかった。また、ダリアの輸出を想定した横箱輸送において、直径 10cm の絞り込み包装は、直径 7cm の絞り込み包装より輸送中の花卉の汚損割合が少なく、日持ち期間、開花時の花の大きさに差が見られなかった。	
試験課題名：シュコンカスミソウの輸出に向けた鮮度保持技術の開発		C2-2-3
予算区分：繰入金(園芸グローバル産地育成強化事業) 開始年度：R3 終了年度：R7 担当科所：会津地域研究所		
概要	ボリュームのある草姿のシュコンカスミソウは、輸出時の輸送経費削減のため、新たな輸送や梱包技術の開発が求められている。そこで、新聞紙を用いた絞り込み法で包装、梱包し、欧州市場へ空輸した結果、切り花 1 本当たりの輸送経費を大幅に低減できることを明らかにした【参考成果 42】。シュコンカスミソウ産地において、オオタバコガの発消長を調査し、早春からの害虫防除の必要性を明らかにした。	
試験課題名：ナシ黒星病に対する秋期及び果実肥大後期の新防除体系の検証		C2-2-4
予算区分：国庫(園芸グローバル産地育成強化事業) 開始年度：R3 終了年度：R5 担当科所：果樹研究所病害虫科		
概要	秋期のりん片生組織の露出芽率は、10 月中旬頃から増加し始め、11 月中旬にピークとなったことから、10 月中旬頃から 11 月上旬頃がナシ黒星病秋期防除の重要な時期と考えられた。	

C2-3 「福島牛」ブランド競争力強化技術の確立

試験課題名:「福島牛」の高付加価値生産システムの確立		C2-3-1
予算区分:国庫(福島県農産物競争力強化事業(研究)、福島牛改良基盤再生事業、うまい!「福島県産牛」生産・販売力強化対策事業)、県単 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:畜産研究所肉畜科		
概要	福島牛ならではの「おいしさ」に関する要因解析として、50 検体の遊離アミノ酸やラクトン類を測定した。ゲノム育種価とおいしさの指標を活用した種雄牛造成では、「高忠平」の現場後代検定が終了した。地域資源を活用した肥育牛への給与試験では、酒粕飼料の成分分析及び嗜好性試験を実施した結果、CP 及び TDN が高いことが明らかとなり、嗜好性に問題は無かった。「勝忠安福」去勢産子の肥育特性試験の結果、3 か月早く出荷しても牛肉中オレイン酸含量が高く、生体では中軀の発育に特徴があることが明らかとなった【参考成果35】。 福島県販和牛総合指数試験では、「おいしさ」に関連するオレイン酸や和牛香、遺伝的評価を組み合わせ、和牛総合指数評価技術を確立し、種雄牛造成に活用するために、1,023 頭の枝肉調査を実施した。	

C2-4 「ふくしま」ならではの地域特産物を活かした栽培・流通技術の確立

試験課題名:エゴマの省力高品質生産技術の確立		C2-4-1
予算区分:県単、国庫(菜食健美ふくしま!地域特産物活用事業) 開始年度:R1 終了年度:R3 担当科所:畑作科、流通加工科、経営・農作業科		
概要	チェーンポットを用いたエゴマの簡易移植技術を開発した【普及成果5】。直は栽培における施肥体系、早期収穫可能時期、水分計を用いた簡易水分測定法を明らかにし、選別機導入に必要な下限面積を算定した【参考成果 6、13、14、15】。また、機械収穫したエゴマの保管条件の違いによる油の品質変化を調査した。	
試験課題名:オタネニンジンの省力・安定生産技術の確立		C2-4-2
予算区分:県単、国庫(菜食健美ふくしま!地域特産物活用事業) 開始年度:R1 終了年度:R3 担当科所:会津地域研究所、品種開発科		
概要	オタネニンジンの育苗(1年生)では、本ぼと同等の土づくり及び土壌消毒、遮光資材の設置が必要であり、省力化が求められている。市販園芸用土(種まき用)を充填した収穫コンテナに播種・栽培することで、1年生苗の生産に係る作業時間を大幅に削減できることを明らかにした【参考成果39】。 「かいしゅうさん」の組織培養について、培養材料として1年生の展開後の葉片が適していること、順化の際に水耕処理の予備順化を行うことで生存率が向上することを明らかにし、培養方法を確立した【普及成果2】。	
試験課題名:積雪を活かした野菜の栽培及び貯蔵技術の確立		C2-4-3
予算区分:県単、国庫(菜食健美ふくしま!地域特産物活用事業) 開始年度:R1 終了年度:R3 担当科所:会津地域研究所、流通加工科		
概要	簡易雪室貯蔵に適すると考えられるキャベツ品種の栽培適性と貯蔵適性を明らかにするため、収穫時重量、貯蔵中の障害発生程度等について調査した。また、機能性成分である GABA(γ-アミノ酪酸)等の雪室貯蔵による動向を調査した。	

D 地球温暖化等の気候変動に対応し、環境と共生する農林水産業を進めるための技術開発等の推進

D1 気候変動に対応し農業生産の安定化に寄与する技術の開発

D1-1 気候変動に対応した生産技術の開発

試験課題名:夏季高温条件下における良質・良食味米生産技術の確立		D1-1-1
予算区分:受託(JA グループ福島寄付金) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:稲作科		
概要	過去の作柄解析試験のデータでは、出穂後の平均気温が 26℃以上になると白未熟粒が増加する傾向がみられた。「福笑い」の栽培試験において、m ² 粒数と白未熟粒発生割合には正の相関関係がみられた。「ひとめぼれ」の水管理試験において、飽水管理により高温日の地温・地表面温度が常時湛水より低くなった。	

試験課題名: 主要野菜の安定生産技術の確立		D1-1-2
予算区分: 国庫(地方創生推進交付金)・県単 開始年度: R3 終了年度: R7 担当科所: 野菜科		
概要	アスパラガス「ふくきたる」を用いた1年生株における定植時期と収量の関係を調査している。 トマトにおける夏期のミスト噴霧による昇温抑制効果を調査し、平均気温で 1.3℃低下させることができたが、収量に差はみられなかった。	
試験課題名: 温暖化傾向に対応した花きの安定生産技術の確立		D1-1-3
予算区分: 県単 開始年度: R3 終了年度: R7 担当科所: 花き科		
概要	トルコギキョウの 10 月定植の作型において、土壌水分を制限することによるチップバーン発生の低減効果は判然としなかった。しかし、土壌水分量を pF2.7 まで抑えると、pF1.8 でかん水を行うよりも生育が劣った。	
試験課題名: 主要農作物生育作柄解析調査研究		D1-1-4
予算区分: 県単 開始年度: R3 終了年度: R7 担当科所: 稲作科、畑作科、会津地域研究所、浜地域研究所		
概要	水稻(コシヒカリ)は 7 月中旬～8 月上旬の高温により出穂期が平年より 2～5 日早まった。一方、8 月下旬から 9 月上旬の低温により登熟が緩慢となり、会津地域研における成熟期は平年より 3 日遅れた。倒伏は少なかった。玄米重は平年対比で本部が 103(m ² 収量の増)、会津地域研が 97(1穂収量の減)、浜地域研が 96(穂数の減)であった。品質は平年に比べて未熟粒がやや多く、整粒がやや少なかった。 大豆は、標播、晩播ともに出芽は齊一でその後の高温により生育が促進され、出芽期、5 葉期、開花期は平年より 2～5 日、成熟期は 2～4 日早まった。稔実莢数、1 莢内粒数、収量、百粒重は標播・晩播とも平年より優った。虫害粒・しわ粒は平年より多く、品質は平年より優った。「里のほほえみ」でべと病罹病粒を確認した。 麦類は、播種期の降雨の影響で苗立本数が平年並み～少なかったが、2 月の高温・多照の影響で 3 月以降の草丈・茎数は平年並み～多くなった。越冬後の生育は進み、出穂期の草丈・茎数は平年より多くなり、成熟期のかん長は平年より長く、穂長は平年並み～やや長くなった。収量は、平年並み～多くなった。	
試験課題名: 温暖化に対応した果樹の生育予測技術及び生育障害対策技術の確立		D1-1-5
予算区分: 県単 開始年度: R3 終了年度: R7 担当科所: 果樹研究所栽培科、会津地域研究所		
概要	現行の果樹生育予測システムについて、モモ、ナシ、リンゴの発芽日、開花日、満開日の予測値と実測値との誤差を検証したところ、誤差はやや大きくなっているものの実用的なレベルと考えられた【参考成果 22】。 主要果樹であるモモ、ニホンナシ、リンゴについて、発芽期～幼果期までの発育ステージ予測モデルを開発した。発育ステージ予測と気温予測に基づいて、防霜対策の重点時期を推定することにより、効果的な対策が実施できることを実証した【普及成果 6】。 主要果樹であるリンゴ、モモ、ニホンナシ、オウトウ、ブドウについて、凍霜害危険度推定シートを作成した。これを活用し、生育ステージごとに予想気温から凍霜害の危険度を推定することで、果樹の防霜対策を効率的に実施することができることを実証した【普及成果 7】。 「シャインマスカット」では、フラスター液剤を満開 10～20 日後(但し、収穫 60 日前まで)までに 500 倍液を 10a 当たり 150L 散布することで新梢伸長を抑制することができることを実証した【参考成果 29】。 会津研の作柄概況調査において、リンゴは着色期の高温により、着色不良が多く発生し収穫が遅れた品種が多かった。カキ「会津身不知」は 3 月が高温で推移したため生育が早まったが、その後、生育差は縮まった。また、モモのおはつ台木は、冬期間の低温遭遇日数が多い会津地域には適さないと考えられた。	

D2 環境負荷を低減する農業生産に資する研究開発

D2-1 中山間地における農地管理技術の開発

試験課題名: 受益者対応型中山間地域の暗渠排水技術の確立		D2-1-1
予算区分: 繰入金(中山間ふるさと水と土基金事業) 開始年度: H28 終了年度: R4 担当科所: 経営・農作業科		
概要	試作暗渠施工器で施工したソバほ場の生育は、未処理区に比べ良好であった。	

試験課題名:中山間地における農地保全管理の省力技術体系の確立		D2-1-2
予算区分:繰入金(中山間ふるさと水と土基金事業) 開始年度:R1 終了年度:R5 担当科所:経営・農作業科		
概要	獣害対策用電気柵設置ほ場での、自走リモコン草刈り機の作業能率は、刈払機の1.8倍以上であった。また、支柱等の破損も見られなかった【参考成果3】。	
試験課題名:遊休農地再生利用のための土地利用型作物栽培体系の確立		D2-1-3
予算区分:県単 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:会津地域研究所		
概要	ソバを中心に遊休農地再生利用を実施している生産法人を対象に調査を行った。ほ場の生産性が高く、連担性が高いことが経営上の大きな利点となっており、また、製粉施設を有しソバ粉の販売が可能なおも、収益性の向上につながっていることを明らかにした。	

D2-2 環境と共生する病害虫防除技術の開発

試験課題名:総合的病害虫管理(IPM)による環境と共生する農業技術の確立		D2-2-1
予算区分:県単 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:作物保護科		
概要	斑点米カメムシ類のクモヘリカメムシの効率的な防除体系構築ため、調査地域(南相馬市、浪江町)の発生主要種、被害状況、防除実績の情報収集を行った。 水稻のイネドロオイムシについて、チアメトキサム剤が効きにくい個体群に対してクロタントラニプロール剤の箱剤施用、クロチアニジン剤の散布剤は高い防除効果があることを明らかにした。 トマトかいよう病について、トマト台木「グランシールド」、「アシスト」、「キングバリア」を使用することで、トマトかいよう病の土壌からの伝染を抑えることができることを明らかにした【参考成果7】。 キク白さび病について、プロベナゾール粒剤を定植時に処理することで、初発時期を遅らせ、発病後の進展を抑える効果が確認できた。	
試験課題名:果樹における生物資源等を活用した環境と共生する病害虫防除技術の開発		D2-2-2
予算区分:県単、外部資金(農林水産研究推進事業) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:果樹研究所病害虫科		
概要	リンゴ園地から採集した土着天敵ツウカブリダニの薬剤感受性を調査した。また、リンゴ園内において、見取り調査及び粘着板トラップ調査を組み合わせることで、重要な訪花昆虫群を調査することが可能と考えられた。	

D2-3 有機農産物の低投入持続型栽培技術の確立

試験課題名:有機農産物の低投入持続型栽培技術の確立		D2-3-1
予算区分:国庫(環境にやさしい農業推進事業) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:有機農業推進室		
概要	生産副産物(稲わら等)のみを再投入して栽培を継続する「低投入持続型水稻有機栽培技術」と、省力的かつ効果的に秋冬期ほ場乾燥が可能な耕起作業方法である畦立て耕起(二山耕起)とを組み合わせた水稻有機栽培技術を実証栽培した結果、前年に比べて67~89%減収した。減収の主な要因はコナギ多発による生育後期の肥料不足と推測され、畦立て耕起と組み合わせ可能な効果的なコナギ防除法の導入が必要と考えられた。 また、有機野菜の周年出荷体制確立のため、品目、量とも減少する冬期間に出荷可能な野菜の選定と栽培方法について検討した結果、11/30 播種又は定植のパイプハウス利用無加温トンネル栽培では、コマツナの収穫時期は2月上旬以降、ホウレンソウは2月中旬以降、レタスは3月上旬以降であった。	

D2-4 環境負荷の低減に向けた技術の開発

試験課題名:温室効果ガス排出軽減技術の確立		D2-4-1
予算区分:受託(農地土壌炭素貯留量等基礎調査事業(農地管理技術検証)) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:環境・作物栄養科		
概要	中干しの前進延長により、メタンの発生を抑制することができるが、2週間以上の延長により水稻の収量が大きく低下するため、延長期間は1週間程度が適切であると考えられた。	
試験課題名:農地における土壌管理実態調査		D2-4-2
予算区分:国庫(農地土壌温室効果ガス排出量算定基礎調査事業(農地管理実態調査)) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:環境・作物栄養科		
概要	農地土壌炭素貯留に関する農地土壌調査事業において、県内12地点で土壌調査を行った。農研機構農業環境研究部門によりデータは取りまとめられ、農地土壌における炭素の貯留効果として、国連(気候変動枠組条約事務局)に報告される。	
試験課題名:果樹園における省力的環境負荷軽減のための肥培管理技術の確立		D2-4-3
予算区分:県単 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:環境・作物栄養科		
概要	モモについては、施肥量を減らしても、土壌の化学性、樹体生育や果実品質及び病害発生率に顕著な差は認められなかった。リンゴについては、肥効調節型肥料を時期別に施肥したが、果実品質は処理間に差はなく、着色等にも影響がなかった。	
試験課題名:緑肥作物の栽培すき込みが根圏および非根圏土壌の物理化学性に及ぼす影響		D2-4-4
予算区分:科学研究費助成事業 開始年度:R1 終了年度:R3 担当科所:浜地域農業再生研究センター		
概要	除染後農地においてセスバニアを栽培したところ、無栽培区と比べ、土壌中の物理性改善効果が認められた。	
試験課題名:効率的肥培管理技術の確立		D2-4-5
予算区分:県単 開始年度:R3 終了年度:R5 担当科所:環境・作物栄養科		
概要	中山間地域のソバほ場の土壌分析及び収量等の聞き取り調査を行った結果、多収ほ場では可給態リン酸が基準値以上であった一方、その他の要因で減収しているほ場が多くあった。	

E 安全・安心な県産農林水産物の安定供給と生産者の所得向上のための試験研究の推進

E1 産地や経営体において収益性を高める技術の研究開発

E1-1 水稻、畑作物の安定生産技術の確立

試験課題名:寒冷地における雑草イネ省力防除技術の開発		E1-1-1
予算区分:受託(イノベーション創出強化研究推進事業) 開始年度:R3 終了年度:R5 担当科所:稲作科		
概要	3月以降、雑草イネは休眠あけ条件(温度、水分)が揃えば発芽した。除草剤による防除効果が高い時期は、ハト胸より早い時期であった。丁寧な代かき(長辺、短辺、長辺方向の3行程実施)は、慣行代かき(長辺、短辺方向の2行程実施)に比べ雑草イネの発生を37%に減らすことができた【参考成果12】。	
試験課題名:省力的な稲作栽培に適応した雑草防除技術の確立		E1-1-2
予算区分:県単 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:稲作科		
概要	鉄コーティング直播栽培において、トリアファモン・ピラクロニル・ベンゾピシクロン粒剤はイネ1葉期からノビエ3葉期に散布すると、薬害の発生、雑草の発生がなく、1回使用による除草が可能であった。	

試験課題名:畑作物の高品質・安定栽培技術の確立		E1-1-3
予算区分:受託(福島大学委託)、県単 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:畑作科		
概要	伝統的発酵食品や新たな大豆加工食品開発に適した大豆品種選抜に向け、標播・晩播合わせて 337 品種・系統について栽培特性を調査した。うち 322 品種・系統の子実を収穫した。 県内の大豆栽培における難防除雑草アレチウリの発生は、中通り地方を中心に多かった。現場では県の防除指針記載のアレチウリの体系防除の活用は進んでおらず、フルミオ WDG の器具洗浄に手間がかかることが一因と考えられた。今年度新規には場へ侵入が確認された難防除雑草はなかった。	
試験課題名:マルチオミクス解析に基づく作物の安定多収に向けた栽培技術の開発		E1-1-4
予算区分:受託(ムーンショット型農林水産研究開発事業) 開始年度:H30 終了年度:R6 担当科所:畑作科		
概要	大豆を対象に、関係各所から送付された 12 資材を施用し栽培試験を行い、生育データ及び土壌を解析担当の研究機関に提供した。 施用資材と播種時期、栽植様式を変えて大豆を栽培し、生育収量データを解析担当の研究機関へ提供した。	
試験課題名:葉たばこ特別調査		E1-1-5
予算区分:受託(日本葉たばこ技術開発協会) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:畑作科		
概要	除草剤の薬害試験を実施し、官能試験の原料を提供した。	

E1-2 野菜・花きの安定生産技術の確立

試験課題名:地域特性を活かした施設花きの安定生産技術の確立		E1-2-1
予算区分:県単 開始年度:R3 終了年度:R5 担当科所:花き科		
概要	鉢花カーネーションを、鉢上げ初期(1/4~2/22)に赤色 LED で電照を行いながら、最低気温を慣行の 12℃から 9℃に下げ、その後慣行と同様の 12℃に戻す変温管理をすると、慣行より早く開花することを明らかにした。 トルコギキョウの作型適応苗を用いた秋出荷作型において、赤色 LED 電照を行うことで切り花長、茎長、節数を増加させることができた。また、照射時間が長くなると、切り花長、茎長は変わらないが、茎径が太くなり切り花重が増加した。しかし、側枝数の増加はみられなかった。また、電照の効果に品種間差があった。	
試験課題名:ふくしまの特色ある露地花きの安定生産技術の確立		E1-2-2
予算区分:県単、受託(JA グループ福島寄付金) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:花き科		
概要	リンドウ「ふくしまさやか」、「ふくしましおん」、「ふくしまほのか」、「天の川」の生育ステージ到達日を調査した。いずれの品種も萌芽期は早まり、開花日も平年並み~早まった。また、肥効調節型肥料を用い、リンドウ定植時に 2 年分の肥料を投入する試験を行った結果、県オリジナル品種の定植 1 年目の生育は、慣行の施肥法とほぼ同等であった。 小ギク「花の舞」など 3 品種で、花蕾径計測による開花予測技術を用いて算出した予測平均開花日と実際の開花日との差は、0~3 日以内となり、高い精度で予測が実証できた。 ユーカリは越冬株率の低下などが問題となっているが、過湿条件又は過乾燥条件が続くと生育が緩慢になることが明らかになった。また、は種時期を早め、定植苗の生育量を確保することで、ほ場における生育が良好となる傾向がみられた。	
試験課題名:特産野菜の安定生産技術の確立		E1-2-3
予算区分:受託(JA グループ福島寄付金) 開始年度:R3 終了年度:R5 担当科所:野菜科		
概要	高温条件化でも収量を確保できる矮性サイインゲン品種を検索したが、供試した 4 品種いずれも高温期の収量は少なかった。	

E1-3 会津地域に適した作物、園芸品目等の生産技術の確立

試験課題名:会津地域に適した作物、園芸品目等の生産技術の確立		E1-3
予算区分:県単 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:会津地域研究所		
概要	オタネニンジン栽培において、新規栽培者でも取り組みやすい新たな省力栽培技術としてシードテープ播種の可能性を検討した結果、バクテリア分解性の資材では発芽率は優ったが、地下部に褐変等がみられた。コンテナ育苗を行った結果、生育は地上部が3か月後、地下部が7か月後に最大となった。また、採種専用株の栽培技術確立のため、摘蕾方法や追肥の影響について試験を開始した。	

E1-4 浜通り地方に適した作物、園芸品目等の生産技術の確立

試験課題名:浜通り地方に適した作物、園芸品目等の生産技術の確立		E1-4
予算区分:県単 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:浜地域研究所		
概要	大豆の生育量確保による収量増加を目指し、早播における播種時期、播種量の検討を行った。その結果、極早播(5月上旬播)、早播(5月下旬播)ともに標播(6月上旬播)と比べ、収量は大きく優った。しかし、倒伏程度及び障害粒の発生が多くなった。	

E1-5 果樹の安定生産技術の確立

試験課題名:果樹の安定生産技術の確立		E1-5
予算区分:受託(イノベーション創出強化研究推進事業、JAグループ福島寄付金)、県単 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:果樹研究所栽培科		
概要	ナシのジョイント栽培と新一文字栽培は、慣行栽培に比較して早期に多収量が得られた。定植12年後の10a当たりの収量は、「幸水」が約4,200kg、「あきづき」が約7,200kgと多く、定植後10年を経過しても慣行樹形と比較して多収を維持できることを明らかにした【参考成果25、26】。 オウトウジョイントV字樹形における定植6年目の収量及び果実品質は慣行樹形と同等だった。 モモ「あかつき」の核の縫合面割裂は、硬核期間中の土壌の多湿条件が発生を助長していることが示唆された。 リンゴの手持ち式花蕾採取機を用いた花蕾採取では、作業時間の短縮効果が認められるが、樹体への障害程度が大きいことから、受粉専用樹での利用が可能と考えられた。なお、樹形は低樹高改良樹形が適していることを明らかにした【参考成果28】。	

E1-6 畜産の安定生産技術の確立

試験課題名:乳牛の安定生産技術の確立		E1-6-1
予算区分:外部資金(農林水産省:輸出促進のための新技術・新品種開発事業、科学研究費助成事業・基盤研究(C)) 開始年度:R3 終了年度:R5 担当科所:畜産研究所酪農科		
概要	黄色ブドウ球菌(SA)乳房炎ワクチンを鼻腔内及び皮下へ投与した結果、乳汁と血清中のSA特異的IgA、IgG抗体価の上昇がみられた。酪農場周辺地域に生息する野生動物の病原体保有状況調査を行った結果、サルモネラ分離率が2.5%、リステリア分離率が7.5%であった。	
試験課題名:肉用牛の安定生産技術の確立		E1-6-2
予算区分:受託(JAグループ福島寄付金)、県単 開始年度:R3 終了年度:R5 担当科所:畜産研究所沼尻分場		
概要	セリで導入した肥育素牛で行った短期肥育での枝肉成績は、通常出荷(全国平均)と同等であった。また、肥育前期に濃厚飼料を多給した短期肥育での枝肉成績は、通常出荷(全国平均)と同等であった【参考成果37、38】。 発酵飼料区の供試牛について、離乳を終え3か月齢に到達したことから、原材料が醸造副産物、とうもろこし等である発酵飼料を給与し、試験を開始した。発酵飼料区の供試牛の体重、体高、胸囲は、黒毛和種正常発育曲線((公社)全国和牛登録協会)における正常程度での開始となった。	

試験課題名:豚の安定生産・高付加価値化技術の確立		E1-6-3
予算区分:県単、繰入金(産業廃棄物充当税事業) 開始年度:R3 終了年度:R5 担当科所:畜産研究所肉畜科		
概要	酒粕・白酒ヌカ・醬油粕を 5:4:1 の割合で混合し、酒粕ペレットを調整した。肥育豚に、酒粕ペレットを 10～30%給与した結果、肥育豚飼料として利用可能であり、飼料費削減及び脂肪の質に影響を与え、豚肉の官能特性に影響を及ぼすことを明らかにした。	

E2 農産物の安定供給に寄与する鳥獣被害防止・病虫害防除等に係る研究開発

E2-1 野生鳥獣害対策技術の確立

試験課題名:ICT 機器等を利用した野生鳥獣被害対策技術の確立		E2-1-1
予算区分:繰入金(中山間ふるさと水と土保全基金事業) 開始年度:R3 終了年度:R5 担当科所:企画技術科		
概要	通信型センサーカメラと野生鳥獣自動判別システムを利用し出没傾向調査の省力化を実証した【参考成果2】。また、無料の GIS アプリを利用し、地域の鳥獣関連情報を低コストで見える化及び共有化するための手法を確立した。	

E2-2 農作業事故防止技術体系の確立

試験課題名:農作業事故による怪我のデータ収集とその体系化		E2-2-1
予算区分:国庫(地域農業担い手活性化支援事業) 開始年度:R3 終了年度:R5 担当科所:経営・農作業科		
概要	県内の負傷事故について、時期別、年代別、受傷程度別の発生状況を整理し、うち 6 件の聞き取り調査を行い発生要因を明らかにした。	

E2-3 新奇病虫害・難防除病虫害防除技術の確立

試験課題名:新奇・難防除病虫害に対する防除技術の開発		E2-3-1
予算区分:県単 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:作物保護科		
概要	<p>令和 3 年度の依頼件数は、85 件で前年比 103.7%であった。内訳は、作物 9 件(10.6%)、野菜 40 件(47.1%)、花きおよび樹木類 36 件(42.3%)であった。ウイルス・ウイロイド病が 12 件(14.1%)、細菌病が 3 件(3.5%)、糸状菌病が 38 件(44.7%)、虫害が 1 件(1.2%)、生理障害・薬害が 15 件(17.7%)、不明・正常が 16 件(18.8%)であった。</p> <p>クモヘリカメムシについて、R2 に初めて発生が確認された県北地方と阿武隈高地の水田で、昨年同様クモヘリカメムシの発生が確認された。</p> <p>水稻で紋枯れ症状を示す病害は、紋枯病、疑似紋枯病がある。県内で発生している紋枯れ症状の多くは、イネ紋枯病であることが明らかになった。</p> <p>イネばか苗病について、プロクロラズ剤が効きにくいイネばか苗病菌を県内で初めて確認した。しかし、銅・フルジオキシニル・ペフラゾエート剤及びイブコナゾール・銅剤は、同菌株に対し高い防除効果が認められた【参考成果8】。</p> <p>コナジラミ類について、県南地方トマト栽培における発生種とその防除効果の高い薬剤を明らかにした。</p> <p>トマトかいよう病について、カーバムナトリウム塩液剤を使用することで、菌密度の低減効果及び発病低減効果が期待できることを明らかにした。</p> <p>トルコギキョウ斑点病について、窒素施肥量の違いによる初発時期、発病程度の違いは認められなかった。</p>	
試験課題名:福島県内のキュウリ産地で発生する主要病虫害の被害進行度に応じた電子画像データの取得および人工知能の実証		E2-3-2
予算区分:受託(人工知能未来農業創造プロジェクト AI を活用した病虫害早期診断技術の開発事業) 開始年度:H29 終了年度:R3 担当科所:作物保護科		
概要	AI 診断の学習用教師画像として、夏秋露地キュウリで問題となる病虫害 10(類)選定し、それらを対象に病害で 15,718 枚(R3 は 963 枚)、虫害で 29,676 枚(R3 は 1427 枚)撮影した。撮影した画像は、オープンデータソースで公開した。併せて、AI 診断の精度を検証した結果、褐斑病やアザミウマ類を除き、概ね 80%以上の再現率だった。生産者等へのアプリの操作性の聞き取りを行った結果、概ね評価が高かった。	

E2-4 果樹の病害虫に対する防除技術の確立

試験課題名:果樹の病害虫に対する防除技術の確立		E2-4
予算区分:県単、受託(農林水産研究推進事業、農林水産省委託事業) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:果樹研究所病害虫科		
概要	秋期の発生状況と気象条件から、翌年のモモせん孔細菌病春型枝病斑の発生を予測するモデルを開発した【普及成果8】。 乗用草刈機による落葉の粉碎処理が翌年のナシ黒星病の発病を抑制すること【普及成果9】、及び梅雨期以降の「幸水」果実に対するナシ黒星病の感受性について明らかにした【参考成果30】。 伊達地方におけるモモ急性枯死症は品種間差がなく、9~10月頃に2~5年生の若木での発生が多い傾向があることを明らかにした【参考成果10】。 ナシヒメシクイは、9月下旬頃までナシ果実に食入し中晩生種に被害を発生させることがあるため、防除対策を検討する必要がある【参考成果31】。	

E2-5 新農薬・新資材等の効率的利用法

試験課題名:安全で効率的な新農薬・新資材等の実用化		E2-5-1
予算区分:受託(新農薬等に関する試験研究事業) 開始年度:R3 終了年度:R7 担当科所:作物保護科、畑作科、環境・作物栄養科、野菜科、果樹研究所栽培科、病害虫科、会津地域研究所、浜地域研究所		
概要	新農薬の実用化試験として、水稻、野菜及び果樹の殺菌剤及び殺虫剤 93 剤、水稻、畑作物及び果樹の除草剤及び植物成長調整剤等 18 剤の実用化試験を受託した。このほか、肥料・農薬等の効率的利用法として、水稻、畑作物、野菜及び果樹の 15 試験を受託した。 キュウリの隔離床養液栽培にはヤシガラポット、ヤシガラマット、ロックウールマットが使用可能であり、土耕栽培と同等の収量を確保できた【参考成果19】。 ナシ栽培では天敵保護防除体系を導入することで殺ダニ剤の使用回数が削減できること、気門封鎖剤は土着カブリダニ類が存在する条件において効果的にリンゴハダニの発生を抑制することを明らかにした【参考成果32、34】。 ナシジョイント栽培において、肥効調節型肥料を用い、基肥施用時期の9月に1回のみとしても、収穫量や品質等に影響はなかった【参考成果9】。	

F 技術移転、緊急課題

F1 モモ、ニホンナシにおける凍霜害の事後対策技術と効果的な未然防止対策技術の確立

試験課題名:凍霜害によるモモの被害様相と対策技術		F1-1-1
予算区分:県単 開始年度:R3 終了年度:R3 担当科所:果樹研究所栽培科		
概要	令和3年4月中下旬に凍霜害が発生し、モモでは結実不良により初期着果数が少ない園地がみられた。凍霜害の被害程度が大きい園地では着果数はかなり少なくなるが、果実肥大が良好となり、減収の程度は着果数の減少程度より小さくなった。一方で、障害果の発生が多く、果実品質の低下による収益性への影響が懸念されることを明らかにした【参考成果20】。	
試験課題名:凍霜害によるニホンナシの被害様相と対策技術		F1-1-2
予算区分:県単 開始年度:R3 終了年度:R3 担当科所:果樹研究所栽培科		
概要	凍霜害が発生した園地において、人工受粉の徹底や着果管理により減収を最小限に抑えることができた。結実が不足する場合は、被害程度の軽い果実や高位番果を摘果せず残して着果数を確保することが有効であることを明らかにした【参考成果21】。	
試験課題名:灯油とロックウールを利用した燃焼法による未然防止対策技術		F1-1-3
予算区分:県単 開始年度:R3 終了年度:R3 担当科所:果樹研究所栽培科		
概要	ミルク缶に灯油 2 ㍓を給油し、芯材として 75mm×80mm×200mm のロックウールを用いて燃焼を行った場合、燃焼時間は3時間~4時間であった。燃焼により1~3℃の園地内の昇温効果がみられた。	

4 試験設計・試験成績検討会の開催状況

(1) 一般課題

開催日	検討会名	会場
令和3年 7月 2日	第1回生産環境・作物園芸専門別検討会	本部
7月 9日	全体検討会	本部*
8月27日	第2回生産環境・作物園芸専門別検討会	本部*
12月10日	第3回生産環境・作物園芸専門別検討会	本部*
令和4年 1月 5日 ～ 6日	畜産専門別検討会	ふくしま自治研修センター
1月12日	第1回果樹専門別検討会	果樹研究所
1月13日 ～14日	第4回生産環境・作物園芸専門別検討会	本部*
2月15日 ～16日	第2回果樹専門別検討会	果樹研究所*
2月25日	第5回生産環境・作物園芸専門別検討会	本部*

* オンライン併用開催

(2) 放射性物質対策

開催日	検討会名	会場
令和4年1月19日	令和3年度放射性物質試験研究課題に関する検討会	本部、オンライン

5 試験研究成果の公表

(1) 試験研究成果一覧

ア 普及に移しうる成果(生産者に活用され農業振興に寄与する研究成果、研究に利用できる新たな手法等の研究成果、行政施策の推進に活用できる研究成果)

(ア) 令和2年度秋冬作

No.	成果名	担当部所
1	イチゴ「福島14号」の育成	作物園芸部
2	県オリジナルカラー3品種のDNAマーカーによる識別	
3	福島県における省力的なタマネギセット栽培技術の確立	
4	「営農再開地域のためのタマネギ栽培マニュアル」を作成しました	
5	福島県浜通り地域における果樹農家の再構築に向けて成果集及び導入マニュアルを作成しました	果樹研究所

(イ) 令和3年度

No.	成果名	担当部所
1	アスパラガスに含まれるアミノ酸と局在	生産環境部
2	県オリジナルオタネニンジン「かいしゅうさん」の組織培養方法の開発	作物園芸部
3	県オリジナルリンドウ品種「天の川」のDNAマーカーによる識別	
4	中通りにおける県オリジナル水稲品種「福笑い」のドローンリモートセンシングによる生育指標値	
5	チェーンポットを用いたエゴマの簡易省力移植技術	果樹研究所
6	防霜対策のための果樹の発育ステージ予測モデルの開発	
7	果樹の凍霜害危険度推定シートを活用することで防霜対策を効果的に実施できる	
8	モモせん孔細菌病春型枝病斑の発生予測モデルの開発	
9	乗用草刈機による落葉処理はナシ黒星病の発病を抑制する	畜産研究所
10	ペレニアルライグラスの新たな奨励品種「夏ごしペレ」	
11	リモコン操作式高能率法面草刈機の開発	

イ 参考となる成果(有用な技術情報として、知っていただきたい成果)

(ア) 令和2年度秋冬作

No.	成果名	担当部所
1	ニホンジカ防除が必要な地域で、積雪深が1~1.5mの場合1.5m高のワイヤーメッシュ柵も有効です	企画経営部
2	鉢花カーネーションの赤色LEDを用いた開花促進	作物園芸部
3	会津平坦部において初冬播き乾田直播栽培は可能である	会津地域研究所

(イ) 令和3年度

No.	成果名	担当部所
1	通信機能を持った自動水管理システムは水田の水位の安定化と水管理作業の省力化に有効である	有機農業推進室
2	通信型センサーカメラの野生鳥獣自動判別機能の利用により出没傾向調査の省力化が可能	企画経営部
3	自走りモコン草刈機による獣害対策用電気柵下の草刈り法	
4	市販リモコン草刈機を利用した畦畔や法面の草刈り	
5	中山間地域の水稲有機栽培におけるスマート農業機器等の導入効果	
6	エゴマ選別機の経済性評価	
7	トマトかいよう病耐病性の品種比較及び接ぎ木の効果	
8	プロクロラズ剤に対する感受性が低下したイネばか苗病菌を確認しました	
9	肥効調節型肥料によりナシジョイント栽培「あきづき」の幼木期(5年生~7年生)の施肥量を削減できる	
10	伊達地方におけるモモ急性枯死症の発生傾向	
11	リンゴの初期褐変速度は品種によって異なり、クロロゲン酸含有量の影響が大きい	作物園芸部
12	「丁寧な代かき」による雑草イネの防除増進効果	
13	エゴマ直播栽培における基肥無施用は雑草の生育抑制に効果がある	
14	エゴマの手刈りは花穂褐変始期から、コンバイン収穫は落葉盛期から可能	
15	エゴマの簡易な水分測定法	
16	秋まきタマネギ収量確保のための効果的なかん水時期	作物園芸部
17	タマネギ秋まき直播栽培に適する品種と播種時期	
18	タマネギ秋まき直播栽培における雑草の体系防除	
19	施設夏秋キュウリの隔離床養液栽培に適した培地	果樹研究所
20	令和3年4月の凍霜害によるモモの果実生産への影響	
21	ニホンナシにおける令和3年4月の凍霜害の果実生産への影響	
22	気候変動に伴う果樹の発育速度(DVR)モデルの適応性検証	
23	「あかつき」とリレー出荷できる食味良好な中生種「モモ福島18号」の育成	
24	ニホンナシ晩生品種「甘太」「王秋」の栽培特性	
25	ニホンナシのジョイント型樹形は定植10年目を経過しても多収を維持できる	
26	ニホンナシの新一文字型樹形は定植10年目を経過しても多収を維持できる	
27	リンゴ「べにこはく」の蜜入りを揃える摘果の目安	
28	手持ち式花蕾採取機を利用したリンゴ受粉専用樹の採花	
29	ブドウ「シャインマスカット」では満開後のフラスター液剤散布でも新梢伸長が抑制できる	
30	梅雨期以降の「幸水」果実に対するナシ黒星病の感受性	

No.	成 果 名	担当部所
31	ナシヒメシンクイは9月下旬頃までナシ果実に食入する	果樹研究所
32	ナシにおいて天敵保護防除体系を導入することで殺ダニ剤の使用回数が削減できる	
33	リンゴ黒星病菌に対するジフェノコナゾール水和剤及びクレソキシムメチル水和剤の感受性は低下していない	
34	土着カブリダニ類が存在すると気門封鎖剤は効果的にリンゴハダニの発生を抑制する	
35	「勝忠安福」去勢産子は3ヶ月早く出荷しても牛肉中オレイン酸含量が高い	畜産研究所
36	令和3年産ふくしま赤しゃもの基本能力は維持されている	
37	セリ導入肥育素牛での短期肥育における枝肉成績は通常出荷(全国平均)と同等である	
38	肥育前期に濃厚飼料を多給した短期肥育における枝肉成績は通常出荷(全国平均)と同等である	会津地域研究所
39	市販園芸用土を利用したオタネニンジンのコンテナ育苗	
40	県オリジナルカラー品種の組織培養苗の移植を9月に行えば充実した小球を形成できる	
41	県オリジナルカラー品種のセル成型苗による球根養成栽培	浜地域研究所
42	シュッコンカスミソウ切り花を絞り込み法で梱包すると海外への輸送経費を削減できる	
43	直進アシスト田植機による移植作業の直進精度と負荷低減効果	

ウ 放射線関連支援技術情報(農業における放射性物質対策の推進となる情報)

No.	成 果 名	担当部所
1	ラッカセイの放射性セシウム吸収特性	作物園芸部

エ 営農再開実証技術情報(避難地域等の営農再開の推進に活用できる情報)

No.	成 果 名	担当部所
1	粃殻くん炭は水稻の放射性セシウム吸収抑制対策と塩化カリの代用となる(浪江町)	浜地域農業再生 研究センター
2	クリムソクローバーと緑肥用夏ソバの組合せによる輪作体系の実証(大熊町)	
3	保全管理期間中の冬期にクロレートSを散布すると翌春のスギナの発生を抑えられる(南相馬市)	
4	クロタラリアによる被覆と播種前年の除草剤処理の組み合わせは、より効果的な抑草効果が期待できる(南相馬市)	
5	ワイヤーメッシュ柵は電気柵と比べて管理作業が省力化でき、年間費用は同程度である(川内村)	
6	「ふくひびき」の湛水直播栽培における苗立数が収量へ及ぼす影響を明らかにした(富岡町)	
7	除染後水田での水稻湛水直播栽培では初中期一発除草剤播種同時散布により省力的に雑草発生を抑制できる(富岡町)	
8	除染後農地において有機栽培でも酒造好適米「福乃香」の収量と品質を確保できる(富岡町)	
9	ヘアリーベッチすき込みは水稻高密度播種苗の生育に影響しない(南相馬市)	
10	「山木屋在来ソバ」の栽培特性(川俣町、飯館村)	
11	阿武隈中山間地域における普通ソバ品種「にじゆたか」の播種晩限は「会津のかおり」より早い(飯館村)	
12	除草剤の効果的な使用及び適切な鳥獣被害対策により林縁部営農再開ほ場でもカンショを栽培できる(田村市)	
13	有機 JAS 適合肥料を用いたフェネル栽培の実証(川内村)	
14	夏秋ピーマン栽培では自動かん水システムの導入により、省力化および増収が図られる(葛尾村)	
15	阿武隈中山間地域におけるカラーの福島県オリジナル品種「はにかみ」の栽培実証(飯館村)	
16	阿武隈中山間地域においてキンギョソウの春夏作型では摘心栽培が可能である(飯館村)	
17	ユーカリほ場にオオナギナタガヤを播種することで除草作業を省力化できる(檜葉町)	
18	季咲き作型におけるトルコギキョウ斑点病の薬剤散布による防除の実証(浪江町)	
19	除染後農地で早春施肥の窒素追肥量を増やすことで牧草の硝酸態窒素濃度を高めずに増収できる(川俣町)	
20	緑肥作物のヘアリーベッチを春に播種しすき込んでも飼料用トウモロコシの収量は増加した(浪江町)	

(2) 東北農業研究成果情報

No.	成 果 情 報 名	区分	担当部所
1	晩生の福島県リンドウ品種「天の川」の育成	研究	作物園芸部
2	福島県畑地性カラー品種「はにかみ」、「ミルクームーン」、「キビタンイエロー」の育成	研究	作物園芸部
3	モモせん孔細菌病の被害抑制に効果のある総合的な防除対策	普及	果樹研究所
4	令和元年10月中旬の阿武隈川沿いの浸水害がモモの生育に及ぼした被害	研究	果樹研究所

6 品種登録・職務発明

(1) 品種登録

品目名	登録品種の名称	登録年月日	育成担当者
アスパラガス	ふくきたる	令和3年6月4日	大竹祐一・園田高広・金山貴明・林有子・佐久間秀明・仁井智己

(2) 品種登録出願

品目名	出願品種の名称	出願年月日	育成担当者
イチゴ	福島 ST14 号	令和4年2月2日	秋葉未歩・宮下聡美

(3) 特許取得 なし

(4) 特許出願(令和2年度分)

発明の名称	特許出願	出願番号	出願人
画像取得装置、ランク推定装置、枝肉横断画像出力装置、画像取得方法、ランク推定方法、枝肉横断画像出力方法、およびプログラム	令和3年1月20日	特願 2021-006874	福島県、帯広畜産大学、株式会社 MIJ labo

(5) 勤務発明届

発明の名称	届出月日	認定月日	発明者
イチゴ「福島14号」	令和3年10月29日	令和3年12月3日	秋葉未歩・宮下聡美

7 技術開発に伴う表彰・学位取得

(1) 表彰

ア 農業食料工学会東北支部大会研究発表会ベスト発表賞 [主催 農業食料工学会]
星太介 (企画経営部経営・農作業科)
「ブロッコリー選別自動収穫機の開発と課題」

イ 日本養豚学会奨励賞表彰

青山勝也 (畜産研究所) 小林 準、佐藤 尚史、真船 優美、石川 雄治
※斜体字は当機関外所属

「酒粕・飼料用米及び醤油粕を用いて製造したペレットの給与が豚の発育及び肉質へ与える影響」日本養豚学会誌、第58巻第1号(2021)

ウ 第70回東北畜産学会大会福島大会優秀発表賞 [主催 東北畜産学会]

齋藤大士 (畜産研究所肉畜科)

「人工知能活用による超音波肉質推定技術の開発」

エ 「東北農業研究74号」論文賞 (水田作部会) [主催 東北農業試験研究協議会]

梅津 輝 (生産環境部環境・作物栄養科)、鈴木 芳成 (安全農業推進部指導・有機認証課)
「土砂が流入した台風被害水田における簡易・迅速評価法により推定した可給態窒素のに基づく被害対応の判定手法」

オ 「東北農業研究74号」論文賞 (畑作部会) [主催 東北農業試験研究協議会]

平 敏伸 (作物園芸部畑作科)、安田 裕基子、丹治 克男

※斜体字は当機関外所属

「福島県内の大豆ほ場におけるアレチウリの発生状況とフルチアセットメチル乳剤の効果」

(2) 学位取得 該当なし

8 有識者懇談会の開催

技術開発、地域農業支援、先進的農業者の育成、食の安全の確保、県民との交流等その役割を果たしていく上で、これらに関する全国的な動向や、県内の農業者及び消費者のニーズを把握し、よりの確かつ効果的に業務推進を図るため、外部の有識者で構成する「福島県農業総合センター有識者懇談会」を設置し、御意見をいただく「農業総合センター有識者懇談会」を開催した。

(1) 有識者懇談会の開催

開催日	開催場所	テーマ
令和3年 7月14日	農業総合センター 果樹研究所	1 農業総合センターの概要と令和2年度事業実績について 2 令和3年度からの試験研究課題について 3 農業総合センターの情報発信について

(2) 有識者委員(敬称略)

氏名	所属・役職名等
荒井 聡	福島大学農学群食農学類 教授
渡辺 満	国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構 東北農業研究センター 農業放射線研究センター センター長
橋本 正典	福島県農業協同組合中央会 常務理事
木目澤 久實子	福島県指導農業士会 副会長
森下 幸代	みやぎ生協コープふくしま 地域代表理事

9 技術・研究に関する職員研修

No	研修名	所属・職名	氏名	研修主催機関	研修テーマ	研修期間
1	令和3年度環境放射能分析研修	安全農業推進部 主査	渡辺 信和	公益財団法人 日本分析センター	ゲルマニウム半導体検出器による測定法	12/6~9
2	牛ゲノミック評価個別研修	畜産研究所 主任研究員	矢内 伸佳	(独)家畜改良センター	ゲノム育種の理論、ゲノム育種価算出	5/10~11
3	令和3年度中央畜産技術研修会(肉用牛指導者育成(1))	畜産研究所 研究員	堀切 眞太郎	農林水産省	肉用牛の改良や登録、登録審査実習等	6/22~25
4	牛ゲノム選抜手法研修会	畜産研究所 研究員	篠田 肇	(公社)畜産技術協会	ゲノム解析、SNP情報抽出に必要な知識・技術の習得	7/8
5	牛ゲノム選抜手法研修会	畜産研究所 研究員	石田 真菜	(公社)畜産技術協会	ゲノム解析、SNP情報抽出に必要な知識・技術の習得	9/14~17 9/21~22 11/18~19
6	令和3年度食肉・鶏卵・乳製品の官能評価ワークショップ	畜産研究所 副主任研究員 研究員 研究員	青山 勝也 橋本 武 真船 優美	(国研)農研機構 畜産研究部門	官能評価のコントロール、官能評価データの解析	10/7~8
7	令和3年度研究職員派遣研修	企画経営部 研究員	宮川 貴光	大阪府立大学	生産管理支援システムの導入による生産性向上と雇用の最適化手法に関する調査	10/31~ 11/25
8	令和3年度研究職員派遣研修	畜産研究所 主任研究員	片倉 真沙美	(国研)農研機構 東北農業研究センター	子実用トウモロコシの栽培・調製技術及び経営的評価手法の習得	11/8~ 11/12
9	令和3年度中央畜産技術研修会(肉用牛)	畜産研究所 研究員	松田 祐輝	農林水産省	肉用牛を取り巻く諸状況の認識	11/16~19
10	牛繁殖性等向上対策の技術力向上研修会	畜産研究所 研究員	篠田 肇	(公社)畜産技術協会	牛生体内卵子吸引技術及び体外受精技術の習得	11/25
11	中央畜産技術研修(畜産統計)	畜産研究所 研究員	石田 真菜	農林水産省	畜産分野における統計解析手法と原理	1/17~21

No	研修名	所属・職名	氏名	研修主催機関	研修テーマ	研修期間
12	令和3年度農林水産関係中堅研究者研修	沼尻分場主任研究員	妹尾 毅 片倉 真沙美	農林水産省	研究公正と研究倫理他に係る知識の習得	1/18～19
13	令和3年度相互派遣研修	生産環境部副主任研究員	石川 万里那	農業総合センター	発芽玄米麴における一般細菌数測定手法の習得	2/7、2/9
14	牛ゲノム選抜手法研修会	畜産研究所研究員	篠田 肇	(公社)畜産技術協会	ゲノム解析、SNP情報抽出に必要な知識・技術の習得	3/23

10 試験研究推進会議の開催

「農林試験研究機関検討委員会」(いわゆる「あり方検討会」)及び「福島県農林試験研究に関する有識者懇談会」の検討結果を踏まえ、現場と密着した実用性の高い技術開発と迅速な技術移転を図る目的で、センター本部、会津地域研究所、浜地域研究所、果樹研究所及び畜産研究所ごとに農業者(指導農業者等)、団体、市町村を構成員とした「試験研究推進会議」を設置しており、下記のとおり会議を開催した。

開催日	部門・開催場所	出席者					内容
		農業者	市町村	JA	県関係	関係機関	
令和3年 11月11日～30日	本部(書面開催)	3	16	7	6	1	1 試験研究の取組について 2 試験研究成果の周知・普及方法について
11月17日～30日	畜産(書面開催)	0	20	5	15	13	1 試験研究課題及び成果について
12月3日 13:30～15:30	果樹 (果樹研究所 大会議室)	3	5	2	13	0	1 試験研究課題について 2 主な研究成果について 3 農業試験研究に要望する課題に対する対応について 4 果樹試験研究に対する要望について
12月20日 13:30～15:30	会津地域 (会津地域研究所 研修室)	1	11	4	17	0	1 実施中の試験研究について 2 みどりの食料システム戦略について 3 農業総合センターで取り組むべき課題について 4 研究成果の周知・利用状況について
令和4年 2月3日～19日	浜地域(書面開催)	3	7	1	-	-	1 浜地域研究所における試験研究の取組について 2 地域の現状と研究に関する意見・要望について

※ 浜地域農業再生研究センター業務連携会議 令和3年2月(書面開催)

11 所内ゼミ

回	開催日	場所	内容	講師	出席者
1	令和3年 6月16日	ゼミ室*	普及指導員資格試験対策(第1回) 審査課題ウの演習ほか	企画技術科主任研究員	萩原 瞳 14名
2	7月5日	大会議室*	統計研修(統計解析入門、統計解析ソフトを用いた分析手法)	畜産研究所主任研究員	矢内 伸佳 56名
3	7月6日	大会議室*	農業に役立つ気象の利用と手引き	仙台管区気象台気象防災部	金濱 晋 47名
4	7月16日	ゼミ室*	普及指導員資格試験対策(第2回) 審査課題イの演習ほか	企画技術科主任研究員	萩原 瞳 12名
5	8月4日	ゼミ室*	普及指導員資格試験対策(第3回) 審査課題アの演習ほか	企画技術科主任研究員	萩原 瞳 11名
6	8月12日	ゼミ室 ほ場	農業総合センターのハウス管理システム及び地下水取水ポンプ操作方法	野菜科長	大竹 祐一 19名
7	9月8日	多目的ホール*	環境計測について	福島大学食農学類准教授	深山 陽子 38名
8	10月29日	大会議室*	事例に学ぶ農業技術の経営評価	経営・農作業科主任研究員	芳賀 三千代 30名
9	11月8日	大会議室*	外部資金の獲得に向けて	東北地域農林水産・食品ハイテク研究会	小巻 克巳 33名
10	11月24日	多目的ホール*	殺菌剤の使い方の基礎	作物保護科副主任研究員	大竹 裕規 32名
11	12月22日	大会議室*	ルーラル電子図書館の利用法	農山漁村文化協会東北支部長	橋本 康範 12名
12	令和4年 2月2日	大会議室	令和3年度派遣研修報告会 新たな農林水産業振興計画について	畜産研究所 経営・農作業科	片倉 真沙美 宮川 貴光 37名

回	開催日	場 所	内 容	講 師	出席者
				農林企画課主任主査 三森 裕	
13	3月22日	多目的ホール*	退職者講演 (県職員、又は研究員としての経験から得た教訓等)	所長 武田 信敏 農業短期大学校長 松浦 幹一郎 事務部長 高島 光二 生産環境部長 三浦 吉則 発生予察課長 高倉 慎 果樹研究所栽培科長 佐久間 宣昭 会津地域研究所専門研究員 大竹 真紀	114名

*はオンライン同時開催

1 2 初任者研修・新規採用職員研修

回	開催日	開催場所	内 容	講 師
1	令和3年 6月 4日	ゼミ室*	センター職員としての心構え、農産物の安全管理、試験研究の進め方、研究活動に関する諸規程	センター職員
2	6月 4日	ゼミ室*	自己紹介及びOJT実施計画の報告、助言	—
3	10月 4日	大会議室*	OJTの中間報告及び担当業務説明を題材としたプレゼンテーション実践、意見交換	—
4	3月17日	大会議室*	OJTの実績報告及び自己評価を題材としたプレゼンテーション実践	—

*はオンライン同時開催

1 3 その他研修

回	開催日	開催場所	内 容	講 師
1	令和3年 6月28日	大会議室*	研究制度について 外部資金管理の事務について	農業振興課 主任主査 吉田 直史 主査 一条 晶恵
2	9月30日	大会議室*	プレゼンテーション資料の作成について 普及に移しうる成果等の作成について	農業振興課 主査 長谷川 健二 主査 一条 晶恵
3	11月17日	大会議室*	統計基礎研修	東北大学未来科学技術共同研究センター 教授 池田 郁男

*はオンライン同時開催

Ⅲ 地域農業支援

1 技術移転・技術支援

(1) 農業総合センター技術移転セミナー

地域農業支援のため地域ごとにセミナーを開催し、普及に移しうる成果、参考となる成果、営農再開実証技術情報等の農業総合センターの試験研究成果の現地への技術移転を図るとともに、意見交換の場とする。

回	月日	場所	テーマ等	内 容、講 師	出席者数
1	6/15	川内村 (現地ほ場)	ソバの排水対策の実演会	<ul style="list-style-type: none"> ○エゴマ栽培における排水対策の実証研究の成果及びソバの排水対策の実証研究について 浜地域農業再生研究センター 研究員 三本菅猛 ○施工内容及び機械について スガノ農機株式会社東北支店仙台営業所長 石原大輔 ○施工実証 	28名
2	9/27	葛尾村 (現地ほ場)	葛尾村における省力的なピーマンかん水技術の現地検討会	<ul style="list-style-type: none"> ○葛尾村におけるピーマン露地栽培と省力的かん水技術の実証研究について 浜地域農業再生研究センター 研究員 小椋智文 株式会社安西商会 齋藤大輔 ○ピーマンの出荷・販売実績について JA福島さくらふたば地区本部営農経済部営農課 係長 松崎利一 ○補助事業等について 葛尾村地域振興課地域づくり推進係 佐藤幸寿 JA福島さくらふたば地区本部営農経済部営農課 係長 松崎利一 	21名
3	9/29	田村市 (現地ほ場)	カンショ栽培における除草体系と鳥獣被害対策	<ul style="list-style-type: none"> ○カンショ栽培における除草体系について 浜地域農業再生研究センター 研究員 三本菅猛 ○カンショ栽培における鳥獣被害対策について 浜地域農業再生研究センター 副主任研究員 吉田雅貴 	19名
4	10/5	南相馬市 (現地ほ場)	浜通りナシ産地の早期復旧に向けて～ナシのジョイントV字樹形による早期成園化技術と晩生種に対する効率的な防除法～	<ul style="list-style-type: none"> ○ナシのジョイントV字樹形の導入による早期成園化技術 果樹研究所栽培科 副主任研究員 南春菜 ○浜通り地域でのナシ晩生種に対する効率的な病虫害防除法 果樹研究所病虫害科 主任研究員 藤田剛輝 	38名
5	11/16	郡山市 (農業総合センター)	県産米の安定生産に向けて	<ul style="list-style-type: none"> ○需要に応じた米づくりについて(水田畑作課) ○福島県のトップブランド米「福、笑い」の栽培法 作物園芸部稲作科 研究員 鈴木寛人 ○食味を維持した業務用向け「天のつぶ」「里山のつぶ」の窒素施肥量 作物園芸部稲作科 科長 鈴木幸雄 ○福島県オリジナル水稻品種のドローンリモートセンシングによる生育指標値 作物園芸部稲作科 研究員 鈴木寛人 ○斑点米カメムシ類「クモヘリカメムシ」の分布域拡大と対策 生産環境部作物保護科 主任研究員 松木伸浩 ○県内水田施肥設計と肥培データの見える化を支援するExcelファイルの利用方法 生産環境部環境・作物栄養科 科長 菊地幹之 	77名*
6	11/25	会津坂下町 (農業総合センター 会津地域研究所)	トルコギキョウとシュッコンカスミソウの新技術	<ul style="list-style-type: none"> ○トルコギキョウ作型適応苗導入による安定生産技術 作物園芸部花き科 科長 山口繁雄 ○シュッコンカスミソウの機械移植体系と品質向上技術 会津地域研究所 専門研究員 大竹真紀 	14名
7	12/1	郡山市 (農業総合センター)	タマネギ栽培新技術と施肥設計支援システムの活用	<ul style="list-style-type: none"> ○タマネギの直播栽培について 作物園芸部野菜科 副主任研究員 八木田靖司 ○タマネギのセット栽培について 作物園芸部野菜科 研究員 柳内柚香 ○施肥設計と肥培データの見える化を支援するExcelファイルの利用方法 生産環境部環境・作物栄養科 科長 菊地幹之 	55名*

回	月日	場所	テーマ等	内 容、講 師	出席者数
8	12/6	川内村 (現地ほ場)	浜通り地域でのブドウ栽培の拡大を目指して ～水稲育苗ハウスと盛土式根圏制御栽培法を利用した早期成園化技術と効率的な防除法～	○水稲育苗ハウスを利用したブドウの盛土式根圏制御栽培法 果樹研究所栽培科 主任研究員 遠藤敦史 ○水稲育苗ハウスと防虫ネットを利用した効率的な病虫害防除法 果樹研究所病虫害科 副主任研究員 中村傑 ○双葉地域におけるハウスブドウ生産の広がり 相双農林事務所双葉農業普及所 技師 菅野孝盛	49名
9	3/1	福島市 (JA福島ビル)	令和3年度研究成果発表 (果樹)	○果樹に関する成果発表 ・気象変動に対応するための成果 ・難防除病虫害等に対する新たな成果 (病害・虫害) ・競争力強化に向けた新品種・新技術に関する成果	32名 (26)
10	3/1	いわき市 (いわき合同庁舎)	スマート農業ワークショップ	○通い農業支援システムについての講演 ○事例紹介 (いわき市の事例、浪江町の事例) ○体験ワークショップ通い農業支援システムの導入体験 ○いわき農林事務所管内における通い農業支援システムの運用について	21名
11	3/2	郡山市 (農業総合センター)	令和3年度研究成果発表 (本部)	○稲作・畑作・野菜・花きに関する成果発表	49名 (38)
12	3/3	大熊町 (Linkる大熊)	令和3年度研究成果発表 (浜通り)	○浜地域の農業、営農再開に関する成果発表 ○農林水産分野の先端技術展開事業の取組	12名 (30)
13	3/7	会津坂下町 (会津地域研究所)	令和3年度研究成果発表 (会津)	○会津地域の農業に関する成果発表 ・会津米生産支援に関する成果 ・会津果樹生産支援に関する成果 ・中山間地で活用が期待される成果	25名 (24)
14	3/9	郡山市 (農業総合センター)	令和3年度研究成果発表 (畜産)	○畜産に関する成果発表 ○話題提供	19名 (19)

注)*はオンライン参加者含む。

注)3月1日～9日の成果発表は、Zoomによるオンライン開催併用であり、出席者数の()はオンライン参加者数

(2) 技術支援(鳥獣害防止対策)

内 容	支援地方、実施月日	担当者
県段階活動支援 (県段階連携活動、各種研修支援等)	県全域 17回 令和3年 4/20、5/27、6/8、7/8、8/24、9/2、10/15 10/27、11/25、11/30、12/22 令和4年 1/21、2/1、2/2(オンライン)、2/22(オンライン) 書面開催 2回	企画技術科 副主任研究員 成田元樹
地方会議活動支援 (地方会議、モデル集落・重点支援集落活動等)	全3回 県北 6/24 モデル集落関係 5/28 書面開催 1回	
その他	農業法人、企業、個人等 4回 鳥獣被害防止総合対策交付金第三者評価 5件	

(4) 有機農業技術実証の取組

応用的技術の実証・確立や、各地方の実態を踏まえた有機農業の推進活動を展開するため、県内6か所に有機農業実証ほを設置した。

No	作物	実証地区	担当	実証内容	結果
1	ダイコン、カブ	二本松市	農業総合センター 有機農業推進室	太陽熱土壌消毒と防虫ネット等を利用した、アブラナ科野菜の有機栽培における害虫防除技術の実証	太陽熱消毒による処理期間中、地温 40℃以上を確保することができなかったが、雑草の発生を抑制することができた。また、併せて防虫ネットを利用することによる害虫防除により品質、収量が向上した。
2	水稻	郡山市	農業総合センター 有機農業推進室	二山耕起と機械除草を組み合わせた雑草防除効果と低投入型水稻栽培の生育特性の把握	二山耕起、2 回代かき、機械除草を組み合わせることにより、水稻の生育に影響を与えない程度の雑草発生に抑えることができた。玄米タンパク質含有率は 6.3%以下で、収量は 30kg/a 以上であった。
3	水稻	泉崎村	農業総合センター 有機農業推進室	冬期間の水田乾燥化ほ場における栽植密度と機械除草を組み合わせた雑草抑制技術の実証	冬期間の水田の乾燥化、2 回代かき、栽植密度、機械除草を組み合わせることにより、水稻の生育に影響を与えない程度の雑草発生に抑えることができた。栽植密度を高めることにより、初期の雑草発生が抑制された。また、栽植密度を高めることにより、茎数、穂数が増加したが、一穂粒数が減り、㎡当たり粒数の増加は少なく、収量の増加はわずかであった。
4	水稻	喜多方市	会津農林事務所 農業振興普及部	水田除草機と乳酸菌資材を組み合わせた除草、抑草効果の検証・実証	乳酸菌資材の散布と乗用型水田除草機を組み合わせることにより、除草効果が高まることが確認された。乳酸菌資材は、除草機による機械除草の補助的効果が期待できるが、作用機構、土質による効果等確認する必要があると考えられる。
5	水稻	会津美里町、会津坂下町	会津農林事務所 農業振興普及部	水稻新品種「福、笑い」の有機栽培における生育特性の把握	有機紙マルチ栽培で生産された玄米のタンパク質含有率は、6.0%以下と「福、笑い」の出荷基準を満たした。紙マルチ栽培は、初期生育が緩慢であること、堆肥等を基肥で施用した場合、有機物の肥効が緩慢であることから、追肥は慎重に対応する必要があると考えられた。
6	水稻	檜葉町	相双農林事務所 双葉農業普及所	双葉郡における水稻有機栽培の実証	営農再開初年目において、高性能水田除草機を導入した除草体系での栽培実証を行った。出穂期までの生育量は確保され、雑草による生育阻害は確認されなかったことから、計画的な 3 回の機械除草により雑草対策が可能と考えられた。

(5) 営農再開に向けた作付実証の取組

東京電力福島第一原子力発電所の事故により避難指示を受けた区域の営農再開・農業再生を進めるため、平成 25 年 4 月から農業総合センター福島市駐在を設置し、避難地域等の市町村及び農業者等の協力のもとに、現地ほ場において既存研究成果等を活用した実証栽培を行ってきた。

平成 28 年度からは、南相馬市に開所した浜地域農業再生研究センターが、営農再開に向けた作付実証栽培に取り組んでいる。令和 2 年度の取組は下記のとおりである。

ア 営農再開に向けた実証栽培(20 課題) その1

No	実証地区	品目	面積(a)	課題名	令和 2 年度の成果
1	浪江町	水稲	5	籾殻くん炭は水稲の放射性セシウム吸収抑制対策として塩化カリの代用となる(浪江町)	籾殻くん炭の塩化カリ代替資材としての放射性セシウム吸収抑制効果を検証したところ、塩化カリを施用した場合と同様に土壤中交換性カリ含量を高め、玄米中放射性セシウム濃度を基準値未満にできることが明らかとなった。
2	大熊町	地力増進作物	56	クリムソクローバーと緑肥用夏ソバの組合せによる輪作体系の実証(大熊町)	秋播きのマメ科緑肥を基軸にして緑肥作物の組合せによる栽培体系を検討したところ、クリムソクローバーと夏ソバのすき込み適期が明らかとなった。
3	南相馬市	保全管理	2	保全管理期間中の冬期にクロレート S を散布すると翌春のスギナの発生を抑えられる(南相馬市)	営農再開前の保全管理期間中の冬期に土壤処理剤の塩素酸塩粒剤(クロレート S)を散布することで、翌春のスギナの発生を抑えることができる。
4	南相馬市	地力増進作物	12	クロタラリアによる被覆と播種前年の除草剤処理の組み合わせにより効果的な抑草効果が期待できる(南相馬市)	クロタラリア播種の前年秋期に、グリホサートカリウム塩液剤(ラウンドアップマックスロード)や播種前冬期に塩素酸塩粒剤(クロレート S)を散布することで、夏生一年生イネ科雑草の抑制効果がさらに高まる。
5	川内村	鳥獣害	260	ワイヤーメッシュ柵は、電気柵と比べて管理作業が省力化でき、年間費用は同程度である(川内村)	ワイヤーメッシュは、電気柵と比べて、資材費用と設置労力はかかるが、除草管理が省力化でき、耐用年数を考慮した年間費用は同程度である。
6	富岡町	鳥獣害水稲	260	「ふくひびき」の湛水直播栽培における苗立数の収量への影響(富岡町)	飼料用米のふくひびきの湛水直播栽培において、鳥害等の被害を受けても、m ² 当たり苗立数 18 本以上であれば、その後の管理を徹底することで一穂粒数が確保され、10a 当たりの地域平均単収 526kg 以上の収量が確保できる。
7	富岡町	水稲	120	除染後水田での水稲湛水直播栽培では播種同時散布により省力的に雑草発生を抑制できる(富岡町)	播種同時散布の初中期一発除草剤+中期除草剤の体系処理での雑草管理を実証した結果、省力的に雑草の発生を抑制し、水稲の収量を確保できた。
8	富岡町	水稲	45	除染後農地において有機栽培でも酒造好適米「福乃香」の収量と品質を確保できる(富岡町)	除染後農地(表土剥ぎ及び客土)において、有機栽培条件での酒造好適品種「福乃香」の品質向上を図るため、肥培管理を実証した結果、有機栽培でも慣行栽培同等の収量と品質を確保できた。
9	南相馬市	地力増進作物、水稲	30	ヘアリーベッチすき込みは水稲高密度播種苗の生育に影響しない(南相馬市)	マメ科緑肥作物と水稲高密度播種苗を組み合わせた水稲の栽培実証の結果、還元障害等による水稲生育への影響は見られなかった。
10	川俣町飯館村	畑作物(ソバ)	38	「山木屋在来ソバ」の栽培特性(川俣町、飯館村)	「山木屋在来ソバ」の栽培を実証し、「会津のかおり」と比較した結果、生態型が「会津のかおり」に近く、子実重が「会津のかおり」を下回るが、千粒重と容積重は同程度であることが明らかとなった。
11	飯館村	畑作物(ソバ)	16	阿武隈中山間地域における普通ソバ品種「にじゆたか」の播種晩限は「会津のかおり」より早い(飯館村)	播種・収穫作業の分散のため、ソバの播種時期別の収量・品質を調査したところ、「にじゆたか」は「会津のかおり」と比較して播種晩限が早いことが明らかになった。

No	実証地区	品目	面積(a)	課題名	令和2年度の成果
12	田村市	畑作物 (カンショ) 鳥獣害	7.5	除草剤の効果的な使用及び適切な鳥獣被害対策の実施により、林縁部営農再開ほ場でもカンショを栽培できる(田村市)	除草剤の効果的な使用及び適切な鳥獣被害対策の実施により、林縁部営農再開ほ場においても、カンショが栽培できることを実証した。
13	川内村	野菜(フェンネル)	1	有機質肥料を用いたフェンネル栽培の実証(川内村)	有機 JAS 適合資材を用いて栽培したフェンネルは、慣行栽培(化学肥料区)と比べ、初期生育が遅れるものの、収量は同等であった。
14	葛尾村	野菜(ピーマン)	0.1	夏秋ピーマン栽培では自動かん水システム導入により、かん水、追肥作業の省力化および増収が図れる(葛尾村)	ピーマン栽培の定着・規模拡大のために自動かん水システムを導入することで、かん水作業及び追肥作業の負担を軽減しつつ、可販果収穫量が増加する。
15	飯舘村	花き(カラー)	0.5	阿武隈中山間地域におけるカラーの福島県オリジナル品種「はにかみ」の栽培実証(飯舘村)	カラーの福島県オリジナル品種である「はにかみ」を普通栽培(5月定植)及び抑制栽培(7月定植)で実証したところ、普通栽培では7月下旬から8月中旬、抑制栽培では8月下旬から10月上旬の開花となり、どちらの作型も平均60cm以上の切り花を1球根当たり約2.5本得られた。
16	飯舘村	花き(キンギョソウ)	0.5	阿武隈中山間地域においてキンギョソウの春夏作型では摘心栽培が可能である(飯舘村)	新たな品目として期待できるキンギョソウについて、種苗コストを抑制できる摘心栽培を実証した結果、春夏作型では開花盛期が6月下旬となり、切り花長が平均80cmを超える、品質の良い切り花を生産することが可能であった。
17	檜葉町	花き(ユーカリ)	1.5	ユーカリほ場にオオナギナタガヤを播種することで除草回数を少なくできる(檜葉町)	ユーカリ栽培において、被覆作物であるオオナギナタガヤによる除草作業の省力化を実証したところ、被覆作物を播いていないほ場と比較して、除草回数を半分に減らすことが可能であった。
18	浪江町	花き(トルコギキョウ)	1	季咲き作型におけるトルコギキョウ斑点病の薬剤散布による防除の実証(浪江町)	トルコギキョウの季咲き作型において斑点病に登録がある5剤を使用し、4月から5月は2週間に1回、6月以降は1週間に1回と散布間隔を短くしたところ、斑点病の被害を抑えることができた。
19	川俣町	牧草	1	除染後農地で早春施肥の窒素追肥量を増やすことで牧草中硝酸態窒素濃度を高めずに収量を増加できる(川俣町)	イタリアンライグラスの早春施肥において窒素追肥量を増やしたところ、硝酸態窒素濃度の許容範囲を維持したまま牧草収量を増加させることができた。
20	浪江町	飼料作物 地力増進 作物	5	ヘアリーベッチを春に播種しすき込んでも飼料用トウモロコシの収量は増加した(浪江町)	ヘアリーベッチを春に播種した結果、土壌への窒素供給量が確保でき、さらに、すき込み後に飼料用トウモロコシを栽培したところ、TDN収量が増加した。

2 指導・啓発活動

(1) 研修会 その1

No	所属	担当者	内 容	月日	主 催 者	
1	有機農業推進室	岡崎 徹哉	IoTを活用した水田の自動水管理システム 現地見学会	6/22	広野スマート有機栽培 実証コンソーシアム	
2		岡崎 徹哉	自動操舵トラクタ実演見学会	11/19	広野スマート有機栽培 実証コンソーシアム	
3	企画経営部	星 太介	第14期第2回営農講座(暑熱対策)	4/24	JA 夢みなみ	
4		宮川 貴光	専門技術向上研修(スマート農業研修)	6/11	農業振興課	
5		成田 元樹	令和3年度農作物技術講習会	6/30	福島県農業共済組合	
6		芳賀 三千代	農業経営管理研修Ⅱ	7/14	農業振興課	
7		宮川 貴光	令和2年度就農研修(中級) (新規就農者向けスマート農業講義)	7/16	農業短期大学校	
8		池田 健一	令和3年度農林土木技術研修(実習演習2 土質)	10/29	農林技術課	
9		星 太介	認証GAP研修・相談会	12/8	会津農林事務所	
10		宮川 貴光	令和3年度田村市認定農業者連絡協議会 研修会(スマート農業講演会)	12/16	田村市認定農業者連絡 協議会	
11		企画経営部 有機農業推進室	宮川 貴光 岡崎 徹哉	令和3年スマート農業実践研修 (農短1年向けスマート農業講義)	12/10	農業短期大学校
12		生産環境部	大竹 裕規	JA東西しらかわトマト専門部会現地指導	6/10	JA 東西しらかわ
13	梶 和彦		営農指導員養成技術研修講座	7/15	JA 全農福島	
14	古川 鞠子		技術で支える加工技術研修「素材を活か す!!新型調理器と野菜の機能性成分」	8/24	県産品加工支援センター	
15	堀越 紀夫		令和3年度方部別専門研修(会津方部・花き)	11/16	会津農林事務所	
16	堀越 紀夫		トルコギキョウ土壌病害対策講習会	12/3	JA 会津よつば	
17	大竹 裕規 菊地 幹之		南会津地方新規就農者冬期研修会	12/3	南会津農林事務所	
18	堀越 紀夫		相馬地方コギクセミナー	2/21	相双農林事務所	
19	大竹 裕規		令和3年度第2回南郷トマト講座	3/7	JA 夢みなみ	
20	作物園芸部	八木田 靖司	JA福島さくらたむら地区園芸部会さやい んげん専門部会「サヤインゲンの安定生 産技術の確立」試験結果	4/14	JA福島さくらたむら地 区本部	
21		鈴木 宏和 鈴木 詩帆里	専門別技術向上研修(花き) リンドウ、キク類の栽培について	4/28	農業振興課	
22		鈴木 幸雄	専門技術向上研修(作物)	7/12	農業振興課	
23		鈴木 幸雄	水稻生育管理等講習会	7/12	全国肥料商連合会	
24		大竹 祐一	令和3年度「営農指導員養成技術研修講座」	7/15	全農福島県本部	
25		山口 繁雄	カーネーションの効率的生産技術の確立	7/30	福島県鉢花生産者協議会	
26		山口 繁雄	スマート農業社会実装推進事業実証ほ現地検討会 トルコギキョウ作型適応苗紹介	9/10	相双農林事務所 双葉農業普及所	
27		山口 繁雄	令和3年度花き技術情報会議(第3回) トルコギキョウ作型適応苗紹介	9/13	農業振興課	
28		山口 繁雄	トルコギキョウの栽培技術 短大1年生視察	9/14	農業短期大学校	
29		鈴木 幸雄	「福乃香」講習会	9/16	本宮市	
30		山口 繁雄	専門別技術向上研修(花き) トルコギキョウの栽培管理について	9/17	農業振興課	
31		鈴木 寛人	専門別技術向上研修(作物)	10/8	農業振興課	
32		山口 繁雄	高品質なトルコギキョウ生産実証ほ現地検討会 トルコギキョウ作型適応苗紹介	10/20	福島県花き振興協議会	
33		仁井 智己	新品種育成の現状	11/25	郡山市あさかの学園大学	

(1) 研修会 その2

No	所属	担当者	内 容	月日	主 催 者
34	作物園芸部	鈴木 幸雄	塩害除去の技術について	11/26	沖縄県加護市
35		石井 詩歩	県南地方施設園芸セミナー	11/30	県南農林事務所
36		笠井 友美	令和3年度 田んぼと畑の勉強会 キュウリ隔離床養液栽培試験について	12/11	JAふくしま未来安達地区本部
37		山口 繁雄	令和3年度花き技術情報会議(第4回) トルコギキョウ作型適応苗試験結果	12/17	農業振興課
38		鈴木 寛人	令和2年度研究成果(稲作)について	12/20	農事組合法人須賀川産直センター
39		鈴木 寛人	「福、笑い」生産者説明会	2/22	水田畑作課
40	果樹研究所	吉田 昂樹	JA全農営農指導員養成技術研修	5/19	JA全農
41		南 春菜	日本なしジョイントV字トリス栽培視察研修会	7/12	県北農林事務所
42		佐久間 宣昭 中村 淳	果樹共済損害評価技術研修会	7/15	福島県農業共済組合
43		南 春菜	第2回園芸重点品目専門部会(なし)	8/5	園芸課
44		七海 隆之	モモの病害防除の現地技術研修会	11/11	(株)エス・ディー・エス パイオテック
45		藤田 剛輝	須賀川地域日本なし落葉処理実演会	11/16	JA夢みなみ
46		藤田 剛輝	なし黒星病防除対策セミナー	11/30	いわき農林事務所
47		中村 淳	農薬管理指導士・農薬適正使用アドバイザー 認定及び更新研修	12/1 12/6	環境保全農業課
48		中村 淳	農薬講習会	12/16	福島県農薬商業組合
49		尾形 亜希子 南 春菜 穴澤 拓哉	園友会冬期研修会	1/14	福島県園友会
50		七海 隆之	令和3年度東北地区病虫害防除所職員等 研修会	1/26	東北農政局
51	畜産研究所	堀切 眞太郎	「福島牛」AI肥育確立事業に係る超音波技術 研修会	4/27 5/14 5/25 6/4 6/29 7/16 8/18 8/26 9/28 10/8 10/22 11/12 11/26 12/20	畜産課
52		真船 優美	令和3年度会津地方人工授精技術向上研修会	11/16	会津農林事務所
53	会津地域研究所	大竹 真紀	令和3年度カスミ草研修会	4/8	JA会津よつば田島花卉 部会
54		大竹 真紀	カスミノウ機械移植実演会	5/28	JA会津よつば田島花卉 部会
55		笹川 正樹	令和3年度稲作情報会議(第3回) (水稲移植後の栽培管理対策の説明)	6/7	会津坂下農業普及所
56		笹川 正樹	令和3年度稲作情報会議(第4回) (穂肥施用時期及び病虫害対策の説明)	7/2	会津坂下農業普及所
57		笹川 正樹	水稲栽培講習会	7/8	全国肥料商連合会福島 県部会会津支部
58		笹川 正樹	会津地域における水稲乾田直播現地研修会	7/21	会津地域研究所
59		濱名 健雄	水稲穂肥施用及び病虫害防除現地講習会	7/26	JA会津よつば
60		笹川 正樹	土地利用型作物技術情報会議(第2回) (初冬播き直播試験に関する説明)	7/29	農業振興課

(1) 研修会 その3

No	所属	担当者	内 容	月日	主 催 者
61	会津地域研究所	笹川 正樹	令和3年度稲作情報会議(第5回) (適期収穫の徹底及び土づくりの説明)	8/3	会津坂下農業普及所
62		長浜 友佳	オタネニンジン種子保存勉強会	8/4	会津農林事務所
63		渡邊 善仁	遠隔操作(リモコン)式高能率法面草刈機 現地実演会(第一回)	10/19	会津地域研究所
64		渡邊 善仁	遠隔操作(リモコン)式高能率法面草刈機 現地実演会(第二回)	10/22	会津地域研究所
65	浜地域研究所	渡邊 滉士	田植え教室	6/6	NPO 法人南相馬サイエンスラボ
66	浜地域農業再生 研究センター	吉田 雅貴	野生鳥獣の生態について説明	6/11	農業振興課
67		吉田 雅貴	電気柵及びワイヤーメッシュ柵の説明・実 演の講師補助	8/6	環境保全農業課

(2) 技術指導資料

No	所 属	掲 載 資 料 名	発 行 年	発 行
1	有機農業推進室	中山間地域における水稻スマート有機栽培体 系の実証成果集 リーフレット	4.3	広野スマート有機栽培実証 コンソーシアム
2	生産環境部	福島県産リンゴの品種と加工品の特徴	4.3	ハイテクプラザ会津若松技 術支援センター 農業総合センター
3	園芸課 果樹研究所	モモせん孔細菌病対策マニュアル(改訂版)	4.6	園芸課

(3) 技術相談対応件数

部 所	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
安全農業推進部	指導・有機認証課	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	2
	発生子察課	4	6	10	4	2	1	2	1	0	0	0	30
	分析課	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	部合計	4	6	11	4	2	1	3	1	0	0	0	32
有機農業推進室	1	0	1	1	1	1	4	3	0	0	5	0	17
企画経営部	企画技術科	3	1	2	1	1	0	2	0	0	1	0	11
	経営・農作業科	2	2	4	3	0	2	1	2	7	2	3	28
	部合計	5	3	6	4	1	2	3	2	7	2	4	39
生産環境部	作物保護科	6	10	19	17	6	12	4	3	1	1	4	85
	環境・作物栄養科	1	1	0	1	0	2	2	1	3	1	1	16
	流通加工科	2	3	3	2	1	2	3	2	1	0	2	22
	部合計	9	14	22	20	7	16	9	6	5	2	7	123
作物園芸部	品種開発科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	稲作科	4	6	3	2	2	3	1	1	1	1	1	26
	畑作科	2	0	1	0	0	1	0	1	0	1	0	8
	野菜科	0	6	3	0	0	1	1	2	0	3	3	19
	花き科	1	1	0	1	0	3	3	2	1	0	2	15
	部合計	7	13	7	3	2	8	5	6	2	5	6	68
本部合計	26	36	47	32	13	28	24	18	14	9	22	10	279
果樹研究所	25	12	35	20	22	25	12	14	10	5	7	10	197
畜産研究所	8	5	4	15	2	6	9	9	3	10	6	0	77
会津地域研究所	7	2	3	5	1	1	0	1	0	1	0	2	23
浜地域研究所	2	4	0	1	2	1	2	0	0	0	0	0	12
浜地域農業再生研究センター	31	47	25	28	27	20	9	8	5	2	17	3	222
農業総合センター合計	99	106	114	101	67	81	56	50	32	27	52	25	810

3 主要農作物種子生産実績

福島県主要農作物種子生産取扱要項に基づき、原原種・原種ほを設置し、優良種子を生産することにより本県主要農作物の生産性と品質向上を図った。

(1) 担当者

所 属	職	氏 名	担当作物
事務局農場管理課	課 長	新妻 和敏	—
作物園芸部	部 長	五十嵐 裕二	—
稲作科	科 長	鈴木 幸雄	水稻
	主任研究員	渡邊 和弘	水稻
畑作科	科 長	平山 孝	小麦、大豆
	副主任研究員	遠藤 央士	小麦、大豆
会津地域研究所	主任専門研究員兼所長	江川 孝二	—
	専門研究員	島宗 知行	水稻、小麦
	主任研究員	濱名 健雄	水稻
	主任研究員	真部 武	小麦
浜地域研究所	専門研究員	大野 光	水稻

(2) 原原種・原種ほ設置面積

項目	水稻(a)	小麦(a)	大麦(a)	大豆(a)
原原種 直営	20	0	0	12
原 種 直営	425	23	0	80
委 託	0	0	0	0
合 計	445	23	0	92

(3) 生産状況

ア 水稻

区分	品 種	生産地	面積(a)	生産量(kg)
原原種 直営	天のつぶ	会津地域研究所	15	320
	里山のつぶ	本 部	3	120
	福笑い	本 部	1.5	45
	まいひめ	本 部	0.5	12
	小 計		20	497
原 種 直営	コシヒカリ	会津地域研究所	205	6,755
	ひとめぼれ	会津地域研究所	75	3,300
	天のつぶ	会津地域研究所	105	4,328
	里山のつぶ	本 部	20	1,440
	ふくひびき	本 部	6	300
	ふくひびき	浜地域研究所	14	730
	小 計		425	16,853
合 計		445	17,350	

イ 小麦

区分	品 種	生産地	面積(a)	生産量(kg)
原 種 直営	きぬあずま	本 部	8	320
	ゆきちから	会津地域研究所	15	245
合 計			23	565

ウ 大豆

区分	品 種	生産地	面積(a)	生産量(kg)
原原種 直営	あやこがね	本 部	4	20
	里のほほえみ	本 部	8	40
	小 計		12	60
原 種 直営	ふくいぶき	本 部	4	40
	あやこがね	本 部	34	340
	里のほほえみ	本 部	42	420
	小 計		80	800
合 計		92	860	

4 オリジナル品種の親株等の供給実績

育成オリジナル品種について、種苗増殖するための親株等を育成し、許諾先に供給した。

作物	品種名	規格	供給数量	供給先	生産地
イチゴ	ふくはる香	原種苗	30 株	福島さくら農業協同組合	本部
	ふくあや香		15 株		
リンドウ	天の川	培養苗	500個体	株式会社ベルディ	本部
カラー	はにかみ	培養苗	75個体		
	ミルクームーン	培養苗	50個体		
	キビタンイエロー	培養苗	50個体		
モモ	はつひめ	穂木	5 kg	株式会社福島天香園	果樹研究所
	ふくあかり	穂木	3 kg		
ブドウ	あづましずく	穂木	6 kg		
	ふくしずく	穂木	1 kg		
ソバ	会津のかおり	原原種	200 kg	会津のかおり種子協議会	会津地域研究所

5 家畜管理及び生産実績

(1) 畜産研究所本所

ア 家畜繋養実績

(ア) 種雄畜

(頭)

畜種及び品種	年度初頭数	受 入		払 出		年度末頭数
		購 入	組 替	廃用	その他	
牛 黒 毛 和 種	16	-	2	1		17
豚 ランドレース種	5	-	-	-		5
デュロック種	12	-	4	3		13
大ヨークシャー種	2	-	-	1		1

(イ) 基幹種雄牛（黒毛和種）

名 号	生年月日		血 統		推定育種価(R3.8評価)		
	登録番号	産 地	父	母の父	枝肉重量 (kg)	ロース芯面積 (cm ²)	脂肪交雑 (基準値)
かつただやすふく 勝忠安福	H24. 6. 28 黒原5825	石川郡 古殿町	勝忠平	安福久	81.468	17.234	2.621
ふくひらはる 福平晴	H23. 6. 3 黒原5637	耶麻郡 猪苗代町	平茂晴	平茂勝	55.058	8.647	2.759
たくみ 多久実	H22.10. 1 黒原5638	石川郡 玉川村	安福久	安平	15.985	17.575	2.832
かつひらやす 勝平安	H20.12.25 黒原5373	田村市	北平安	平茂勝	56.877	17.185	2.473
さくらさくひかり 桜 咲光	H20. 8. 7 黒原5302	耶麻郡 猪苗代町	第1勝光	福桜(宮崎)	49.121	11.317	2.010
たかゆり 高百合	H20. 8. 21 黒原5303	双葉郡 川内村	百合茂	安福栄	77.865	10.980	1.717
ふくかげさくら 福景 桜	H17.11.22 黒原4949	耶麻郡 猪苗代町	景 東	福桜(宮崎)	40.342	15.186	2.087
かつはやしげ 勝隼茂	H17.10.11 黒原4850	石川郡 石川町	平茂勝	第5隼福	71.413	8.366	2.385
きたひらしげ 喜多平茂	H16.10.25 黒14188	喜多方市	平茂勝	北国7の8	63.980	9.408	2.455
だい かつひかり 第1勝光	H15. 3. 27 黒原4570	本宮市	平茂勝	東平茂	93.857	16.907	2.199

注 現在、繋養していない基幹種雄牛も含む。

(ウ) 種雄豚

品 種	名 号 (登録番号)	生年月日	血 統	
			父	母
ランドレース種 (フクシマL2)	フクシマ エル フクチ 4 0071 証明番号LL07-A000075	H27. 5. 3	フクシマ フクチ 6 0197 証明番号LL07-A000035	フクシマ エル フクチ 4 0314 証明番号LL07-A000012
	フクシマ エル フクチ 1 0019 証明番号LL07-A000168	H30. 1. 13	フクシマ エル フクチ 2 0203 証明番号LL07-A000154	フクシマ エル フクチ 1 0150 証明番号LL07-A000155
	フクシマ エル フクチ 4 0061 証明番号LL07-A000182	H31. 3. 28	フクシマ エル フクチ 7 0007 証明番号LL07-A000070	フクシマ エル フクチ 4 0189 証明番号LL07-A000160
	フクシマ エル フクチ 2 0181 証明番号LL07-A000186	R1. 8. 31	フクシマ エル フクチ 8 0074 証明番号LL07-A000042	フクシマ エル フクチ 3 0163 証明番号LL07-A000162
	フクシマ エル フクチ 3 0013 証明番号LL07-A000190	R2. 3. 30	フクシマ エル フクチ 8 0167 証明番号LL07-A000063	フクシマ エル フクチ 2 0023 証明番号LL07-A000176
	フクシマ フクシマデ-モータ フクチ 2 0158 証明番号 DD07-A000088	H28. 7. 7	フクシマ デ-モータロウ11 フクチ 1 0073 証明番号DD07-A000021	フクシマデ-モータ フクシマ フクチ 5 0185 証明番号DD07-A000054
フクシマデ-モータ フクシマ フクチ 7 0297 証明番号 DD07-A000303	H28.11.19	フクシマデ-モータ フクシマ フクチ 5 0088 証明番号DD07-A000043	フクシマ デ-モータロウ11 フクチ 5 0090 証明番号DD07-A000007	
フクシマ フクシマデ-モータ フクチ 8 0023 証明番号DD07-A000309	H29. 2. 24	フクシマ デ-モータロウ11 フクチ 1 0073 証明番号DD07-A000021	フクシマデ-モータ 09 フクチ 5 0028 証明番号DD07-A000003	
ナガラD 1154 ナガラ フクチ 2 0048 証明番号 DD07-A000310	H29. 3. 27	ナガラD 1154 7 2601 証明番号DD21-A000188	ナガラ フクシマ フクチ 6 00109 証明番号DD07-A000071	
フクシマ ナガラ フクチ 03 0191 証明番号 DD07-A000314	H29. 8. 21	フクシマデ-モータロウ12 フクチ1 0063 証明番号DD07-A000020	ナガラ フクシマ フクチ 6 00109 証明番号DD07-A000071	
ナガラD フクシマ フクチ 2 0174 証明番号DD07-A000329	H29. 8. 21	ナガラD フクシマデ-モータ フクチ 6 0059 証明番号DD07-A000079	ナガラD フクシマ フクチ 7 0029 証明番号DD07-A000075	
ナガラD ナガラ フクチ 2 0058 証明番号DD07-A000349	H30. 1. 17	ナガラD フクシマデ-モータ フクチ 4 0058 証明番号DD07-A000063	ナガラ フクシマ フクチ 2 0110 証明番号DD07-A000081	
ナガラ ナガラD フクチ 2 0076 証明番号DD07-A000345	H30. 1. 22	ナガラ フクシマデ-モータ フクチ 1 0062 証明番号DD07-A000025	ナガラD フクシマデ-モータ 7 0191 証明番号DD07-A000092	
ナガラ ナガラD フクチ 2 0078 証明番号DD07-A000346	H30. 1. 22	ナガラD フクシマデ-モータ フクチ 1 0062 証明番号DD07-A000025	ナガラD フクシマデ-モータ フクチ 7 0191 証明番号DD07-A000092	
ナガラD フクシマデ-モータ フクチ 8 0152 証明番号DD07-A000350	H30. 4. 23	ナガラD フクシマ フクチ 2 0018 証明番号DD07-A000040	フクシマデ-モータ 09 フクチ 8 0003 証明番号DD07-A000039	
ナガラD ナガラ フクチ 5 0190 証明番号DD07-A000336	H30. 6. 1	ナガラD フクシマデ-モータ フクチ 4 0058 証明番号DD07-A000063	ナガラ フクシマ フクチ 6 0109 証明番号DD07-A000071	
ナガラD 1154 ナガラD フクチ 2 0141 証明番号DD07-A000358	R1. 6. 29	ナガラD 1154 ナガラ フクチ 2 0048 証明番号DD07-A000310	ナガラD フクシマ フクチ 3 0036 証明番号DD07-A000322	
ナガラD 1154 ナガラD フクチ 2 0168 証明番号DD07-A000357	R1. 7. 1	ナガラD 1154 ナガラ フクチ 2 0048 証明番号DD07-A000310	ナガラD フクシマデ-モータ フクチ 1 0001 証明番号DD07-A000315	
大ヨークシャー種	シントク ダブル 2018-3 1367 証明番号WW01-A001742	H30.11.25	シントク ダブル 2015-3 1404 証明番号WW01-A000828	シントク ダブル 2016-7 0217 証明番号WW01-A001342
	シントク ダブル 2018-3 1373 証明番号WW01-A001746	H30.11.26	シントク ダブル 2015-6 1254 証明番号WW01-A000808	シントク ダブル 2016-7 0244 証明番号WW01-A001349

イ 各家畜繋養状況

(ア) 乳用牛移動表

区 分	年度初 頭 数	増 加				減 少				年度末 頭 数
		生産	組替	購入	小計	出荷	組替	その他	小計	
成雌牛	34	-	8	-	8	3	-	6	9	33
育成牛	10	-	13	-	13	-	8	1	9	14
子牛	15	22	-	-	22	12	13	1	26	11
合 計	59	22	21	-	43	15	21	8	44	58

(イ) 肉用牛移動表

区 分	年度初 頭 数	受 入				払 出				年度末 頭 数
		購入	組替	その他	小計	出荷	組替	その他	小計	
基幹種雄牛	9	-	-	-	0	-	-	2	2	7
直接検定牛	4	2	-	1	3	-	4	-	4	3
待機牛	8	-	4	-	4	-	-	-	-	12
肥育試験牛	37	-	-	21	21	20	-	2	22	36
供卵牛	8	3	6	-	17	5	3	-	8	9
合 計	66	5	10	22	37	25	7	4	36	67

(ウ) 豚移動表

(頭)

区分	年度初 頭数	受入				払出				年度末 頭数	
		生産	導入	組替	小計	出荷	組替	その他	小計		
成豚 (雄)	デュロック	12	-	-	4	4	1	-	2	3	13
	大ヨークシャー	2	-	-	-	-	1	-	-	1	1
	ランドレース	5	-	-	-	-	-	-	-	-	5
成豚 (雌)	デュロック	13	-	-	15	15	8	-	3	11	17
	ランドレース	10	-	-	10	10	-	-	1	1	19
	その他	17	-	-	9	9	8	-	-	8	18
試験豚	-	-	-	16	16	16	-	-	-	16	-
調査豚	デュロック	-	-	-	10	10	10	-	-	10	-
	ランドレース	-	-	-	10	10	10	-	-	10	-
	LWD	-	-	-	10	10	10	-	-	10	-
子豚	デュロック	58	225	-	-	225	-	171	68	239	44
	ランドレース	45	183	-	-	183	-	153	32	185	43
	雑種	122	445	-	-	445	-	393	58	451	116
肥育豚	74	-	-	633	633	600	-	6	606	101	
合計	358	853	-	717	1570	664	717	170	1551	377	

※ 成豚(雄)及び(雌)の出荷には払下を含む。

ウ 各種生産実績

(ア) 乳生産販売状況 (kg)

年度	販売量	年月	販売量
平成24年度	197,742.0	令和3年度 4月	17,761.0
25年度	194,079.0	5月	19,192.0
26年度	209,508.0	6月	20,087.0
27年度	212,350.0	7月	17,954.0
28年度	204,974.0	8月	18,004.0
29年度	228,930.0	9月	17,746.0
30年度	214,889.0	10月	17,723.0
31年度	211,623.0	11月	17,293.0
令和2年度	215,047.0	12月	15,764.0
		1月	15,663.0
		2月	15,572.0
3年度	207,329.0	3月	14,570.0
		合計	207,329.0

(イ) 肉用牛精液生産実績

(本)

	生産		払出		廃棄
	生産	その他	売払	その他	
前年度繰越	169,015	-	-	-	-
今年度					
令和3年度 4月	909	-	216	5	-
5月	923	-	168	-	-
6月	1,352	-	101	10	-
7月	732	-	88	50	-
8月	893	-	151	102	-
9月	860	-	118	-	-
10月	560	-	88	30	-
11月	937	-	125	133	-
12月	101	-	90	70	-
令和4年度 1月	524	-	101	-	62,296
2月	1,307	-	96	92	-
3月	1,132	-	100	-	-
次年度繰越	115,015	-	-	-	-

(ウ) 肉用牛検定実績

a 直接検定実績 (頭)	
保留	検定中
1	2

b 現場後代検定実績 (頭)

終了	実施中
1	5

(エ) 牛受精卵生産実績

a 牛受精卵の生産及び受精卵払い下げ (頭、個)

採卵頭数	総回収卵数	譲渡可能卵数	払い下げ卵数
0	0	0	0

b 供卵牛

名号	個体識別番号	生年月日	父	母の父	母の母の父
さなえ3	14730 3003 7	H28. 6. 1	高百合	百合茂	平茂勝
さなえ7	13689 3012 1	H28. 8. 7	高百合	福寿幸	茂勝
さなえ11	13689 3016 9	H28. 8. 23	高百合	福栄	第5隼福
なると15	11234 4884 7	H26.11.14	高百合	茂勝	北国7の8
はくひさがき	16370 0601 4	R2.10. 9	白鵬85の3	安福久	福之国
ぴいち16	15909 3118 7	H30.11. 2	多久実	平茂晴	平茂勝
ふくひさぼう	15484 0681 1	R3. 5. 29	白鵬85の3	安福久	福之国
みどりのこ2の1	16494 0960 5	R3. 2. 7	元花江	白鵬85の3	安福久
やえ21	15274 4511 4	H29.11.30	福増	高百合	平茂晴

(オ) フクシマ L2 生産実績 (維持頭数及び更新、配布状況)

	実績	内訳	
		雄	雌
種雄豚数 (頭)	5	5	-
種雌豚数 (頭)	19	-	19
分娩腹数 (腹)	20	-	20
生産子豚数 (頭)	183	92	91
離乳頭数 (頭)	158	-	-
育成率 (%)	86.3	-	-
子豚登記数 (頭)	3	1	2
自場更新数 (頭)	11	-	11
配布場所数 (戸)	1	1	-
配布頭数 (頭)	1	1	-

(カ) デュロック種「フクシマ D 桃太郎」生産実績

a 維持頭数及び更新、配布状況

	実績	内訳	
		雄	雌
種雄豚数 (頭)	13	13	-
種雌豚数 (頭)	17	-	17
分娩腹数 (腹)	21	-	21
生産子豚数 (頭)	225	112	113
離乳頭数 (頭)	169	-	-
育成率 (%)	75.1	-	-
子豚登記数 (頭)	12	7	5
自場更新数 (頭)	17	4	13
配布場所数 (戸)	1	-	1
配布頭数 (頭)	1	-	1

b と体形質

性別 及び 頭数	生体重 と殺前 (kg)	と体重 冷 (kg)	と体長 (cm)	背腰長		と体幅 (cm)	ロース		背脂肪の厚さ		
				I (cm)	II (cm)		長さ (cm)	断面積 (cm ²)	カタ (cm)	セ (cm)	コシ (cm)
去勢 5	112.0	73.2	89.9	71.9	64.2	35.9	53.2	28.6	4.9	3.2	3.8
(標準偏差)	1.8	0.7	2.4	2.3	2.5	1.1	2.2	6.2	0.6	0.5	0.2
雌 5	115.6	74.0	93.9	79.1	69.2	34.4	58.4	38.8	4.7	3.3	3.6
(標準偏差)	2.9	1.7	2.1	9.1	5.9	0.8	7.4	4.9	0.8	0.7	0.5

(キ) 飼料作物生産実績

a 牧乾草生産量(本所)

区分	収穫期間	面積(a)	生産量(現物 kg)		乾物生産量(kg)	
			総量	10a当り	総量	10a当り
1番草	5/ 9 ~ 5/31	2,610	142,907	548	105,359	404
2番草	6/ 7 ~ 8/ 5	2,610	59,205	227	46,975	180
3番草	7/19 ~ 10/22	2,100	52,046	248	33,705	161
合計	-	-	254,158	-	186,039	-

b トウモロコシサイレーズ(本所)

ほ場No.	収穫期間	面積(a)	生産量(現物 kg)		乾物生産量(kg)	
			総量	10a当り	総量	10a当り
8	9/ 9 ~ 9/14	240	101,592	4,233	26,903	1,121
9	9/13 ~ 9/14	180	71,874	3,993	24,086	1,338
合計	-	420	173,466	4,130	50,989	1,214

注 収穫面積は、ほ場内枕地を除く実栽培面積

(ク) 鶏移動表(成鶏羽数)

区分	年度初 羽数	受 入				払 出				年度末 羽数	
		生産	導入	組替	小計	出荷	組替	その他	小計		
保存鶏	育成	-	762	-	-	762	-	604	158	762	-
	成鶏	477	-	-	604	604	-	-	499	499	582
育種鶏	育成	-	2,953	-	-	2,953	-	2,005	948	2,953	-
	成鶏	1,958	-	-	2,005	2,005	1,836	-	189	2,025	1,938
種 鶏	育成	844	1,417	-	-	1,417	583	-	834	1,417	703
	成鶏	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
実用鶏	育成	-	286	-	-	286	-	-	286	286	-
	成鶏	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
合計	3,279	5,418	-	2,609	8,027	2,419	2,609	2,914	7,942	3,223	

(ケ) ふ化実績

区分	入卵個数 (個)	ふ化羽数(羽)			
		育雛	出荷	その他	
保存鶏	2,873	1,294	762	-	532
育種鶏	9,127	3,877	2,953	-	924
種 鶏	14,195	10,134	1,417	1,350	7,367
実用鶏	2,417	1,163	286	275	602
計	28,612	16,468	5,418	1,625	9,425

(コ) 卵の生産状況

月	産卵数	(個)			
		正常卵	廃棄卵	種 卵	破損卵
4月	34,930	24,898	1,101	7,883	1,048
5月	33,903	23,311	1,147	8,311	1,134
6月	27,468	18,741	1,228	6,386	1,113
7月	6,170	4,816	298	813	243
8月	215	159	40	0	16
9月	7,795	6,572	779	0	444
10月	23,397	20,747	1,736	0	914
11月	37,534	29,023	988	6,677	846
12月	39,507	32,579	807	5,444	677
1月	37,927	36,299	881	109	638
2月	34,303	32,394	748	546	615
3月	39,700	29,168	959	8,699	874
合計	322,849	258,707	10,712	44,868	8,562

(2) 沼尻分場

ア 肉用牛移動表

品種	区分	年度初 頭数	受入				払出				年度末 頭数	
			生産	組替	その他	小計	出荷	組換	その他	死亡		小計
黒毛和種	成牛(雌)	80	—	8	3	11	8	—	6	2	16	75
	子牛	58	45	—	—	45	10	31	23	2	66	37
	肥育試験牛	22	—	23	—	23	22	—	—	—	22	23
合計		160	45	31	3	79	30	31	29	4	104	135

※その他は所内移動

イ 産子成績

(頭)

品種	分娩頭数	(死産)	(流産)	生産頭数	ハイ死
黒毛和種	49	(4)	(0)	45	2

注 死産及び流産は分娩頭数の内数

ウ 繁殖成績

人工授精 (受胎頭数/受胎牛授精回数)	受精卵移植 (受胎頭数/全移植回数)
53.7% (44頭/82回)	40.0% (4頭/10回)

エ 牧草生産量(沼尻分場)

区分	収穫期間	面積 (a)	生産量(現物 kg)		乾物生産量(kg)	
			総量	10a当り	総量	10a当り
1番草	6/8 ~ 6/21	1,660	144,694	872	84,082	507
2番草	9/9 ~ 9/15	1,660	113,265	682	89,143	537
3番草	—	—	—	—	—	—
合計	—	—	257,958	—	173,225	—

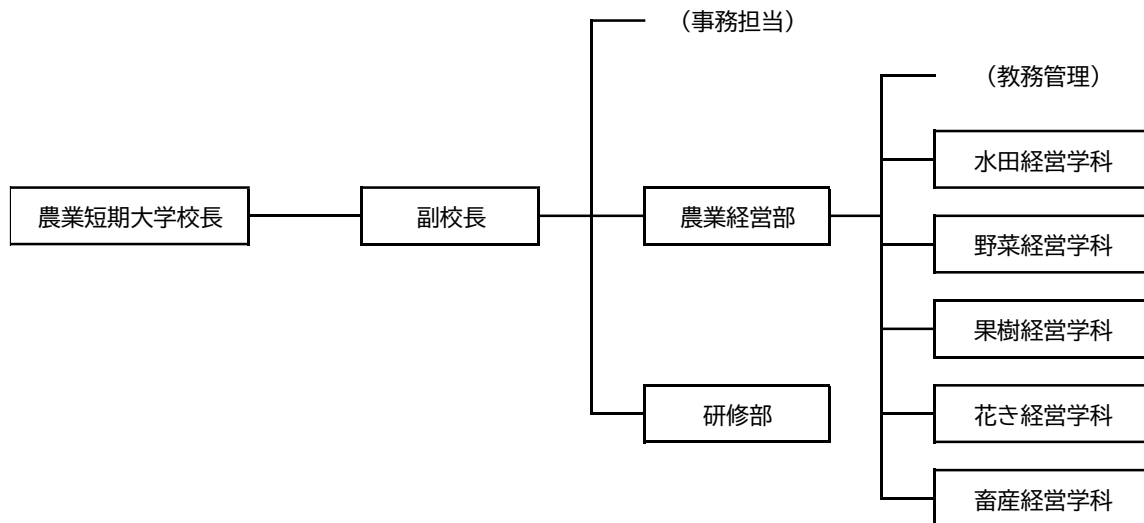
注 沼尻分場のある猪苗代町は、国の通知に基づく永年生牧草の流通・利用自粛地域であるため、除染を実施し、モニタリング検査で利用可能となった草地においてのみ収穫した。
なお、利用ができない草地については維持管理のみを実施した。

IV 先進的農業者育成・支援

1 農業短期大学の業務実績

(1) 概要

ア 組織



イ 施設

区分	主な施設内容
教育施設	本館(教室、教養ホール、視聴覚教室、職員室、事務室、会議室、講師控室) 研究実験棟(各学科、学科教室(ゼミ室)、実験演習室、研究室、無菌室、培養室) 多目的学習棟(図書室、情報処理演習室、学生ホール) 男子寮(けやき寮)、女子寮(せんだん寮)、食堂、体育館、運動場、テニスコート
実習教育施設	実習教育棟、作業棟(園芸、農産)、機械格納庫、果実選果場、鉄骨ハウス等栽培施設、 乳牛舎、肉牛舎、肥育牛舎、畜産加工演習棟、堆肥舎、パドック、農産物直売所(アグリハウス 万菜)
研修施設	研修棟、屋外トイレ 農業機械実習棟(整備実習室)、トラクタ運転練習コース 農産加工技術センター(開発室、発酵加工室、高温加工室、粉体加工室)

(2) 農業経営部の取組

実践的な農業の技術力と優れた経営力を備えた地域のリーダーとなる農業者を育成するため、農業に関する講義や実験・演習、実習、研修などの教育を行った。

ア 学生の状況(学年毎の定員、農業経営部 60名)

(ア) 農業経営部の学生数は、1学年 52名(うち女子 14名)、2学年 59名(うち女子 19名)、計 111名(うち女子 33名)であり、定員を 9名下回った。学生数は震災後減少しその後は回復傾向にあるが、今後、人口減少、少子高齢化などにより定員確保は大きな課題である。

学科別では、1学年は、水田経営学科 15名、野菜経営学科 13名、果樹経営学科 7名、花き経営学科 6名、畜産経営学科 11名、2学年は水田経営学科 15名、野菜経営学科 15名、果樹経営学科 12名、花き経営学科 11名、畜産経営学科 6名であった。

出身高校別では農業課程が 67名、普通課程 24名、その他が 20名であり、農業高校出身の学生が約 6割となっている。

農家・非農家別では専業農家 24名、兼業農家 29名、非農家 58名であり、非農家出身の学生は近年 4~5割程度を占めている。

出身地域別では県北が 26名、県中が 36名、県南 13名、会津 18名、南会津 1名、相双 5名、いわき 9名、県外 3名であり、県中出身者が多い状況にある。

(イ) 本年度の専門士(農業専門課程)の称号が付与される者(卒業生)は、58名であった。

(ウ) 独立行政法人日本学生支援機構の奨学金貸与者は、1学年 13名、2学年 20名であった。

(エ) 学生寮の令和 3年度の入寮は、2学年は男子 21名、女子 9名、1学年は男子 26名、女子 12名であった。

イ 専修教育の状況

(ア) 水田経営学科

「米(玄米)」の JGAP 更新審査に向け、学生への講義や実習をとおして新たなリスク評価を加え、施設及び帳簿の点検作業を行い、学生主体による受審体制を整えた。

スマート農業については農業機械メーカーと連携し、学生がスマート農業機械(5機種)を操作演習する実践的な研修を実施した。また、学生は、福島大学食農学類の准教授によるスマート農業の取組等についての講義を受講し、最近のスマート農業の動向についての知見

を得た。

近年の米価下落を鑑み、従来の一袋 30 kgでの玄米販売に加え、消費者ニーズを考慮した一袋 3 kg及び 10 kgの荷姿での精米販売を実施した。また、6次化の取組として、本校産の小麦粉を使用した乾麺「アグリカレッジ福島のうどんだばい」を委託生産し、直売実習等で販売した。

1学年では実習における多くの食用作物の栽培や加工をとおして、基礎的な技術、観察力などを身につけた。また、先進地研修や先進農家等留学研修等の実施により、実践的な経営感覚を養った。

卒業論文については稲作、畑作の選択制とし、栽培や調査研究をとおして、高度な技術と経営感覚を醸成し、就農後に生かせる課題に取り組んだ。

学生の進路は、2学年 15名のうち 5名が卒業後に就農した（親元就農 1名、法人就農 4名）。

(イ) 野菜経営学科

1学年は、県内での栽培が盛んなきゅうりやトマト・アスパラガス等の栽培の基礎を学び、スマート農業や環境制御技術等の視察研修により、最新の農業技術も身につけた。2学年は、産地の課題解決や高収益生産などの卒業論文調査研究に取り組み、生産物は学生が消費者に直接販売し、レシピ開発を実践するなど、高度な栽培技術の習得や経営実践力を養った。

JGAP及びFGAPの認証を取得しているトマト、きゅうりにおいて、リスク評価や管理作業及び収穫の記録作成等の実践が学生に定着した。特に、更新審査の準備、事前の模擬審査については1学年主体で実施したほか、GAP教育の集大成として2学年 7名がJGAP指導員資格を取得した。

学生の進路は、2学年 14名のうち 2名が自家就農、6名が法人に就農した。

(ウ) 果樹経営学科

既にJGAP、FGAPの認証品目である「ぶどう」「かき」部門において、学生主体の実践活動が定着した。特に、経験の浅い1学年生に対し、2学年生がわかりやすく指導、助言する等、学生間での技術の伝承が進み、GAPに対する意識は大きく向上した。

また、開花期前後の降霜被害を受けた中、学生総動員による結実確保対策を行い、以後の適期管理の徹底により、高品質果実の生産が実現できたとともに、卒業論文調査研究も内容の濃いとりまとめができた。

さらに、生産物のほとんどの販売を学生が担い、積極的に新たな顧客の開拓を行うとともに、学生自らが販売活動を行うことを通じ、経営感覚の向上が図られた。

昨年度は、2学年生 12名のうち 1名が自家就農、3名が法人等に就農した。

(エ) 花き経営学科

花き経営の基礎である栽培管理については、各栽培品目共に順調に生育し、計画どおりの生産・販売を行うことができた。特に夏秋ギクでは早朝からの収穫実習、シクラメンでは校外の事業所等への直接販売の実習など、学生自ら生産から販売までより実践的な学習を行うことにより技術力や販売力の強化につながった。

また、高度な栽培技術や先進的な経営感覚を肌で体験するため、県内の先進農家に視察研修を行い、花き経営への理解を深めることができた。

GAP取組の一環としては、東日本の農業大学校では初めてとなる「花き日持ち品質管理認証」を12月1日に取得した。学生は花きの日持ち性向上の意義を認識し、今まで以上に切り花栽培マニュアルを遵守して実習に取り組んだ。

学生の進路は、2学年 11名のうち 1名が自家就農、3名が法人に就農した。

(オ) 畜産経営学科

授業や実習をとおして乳用牛や肉用牛に関する知識や飼養管理技術の習得に努めた。特に飼養衛生管理基準遵守状況の自己点検や飼養衛生管理マニュアル作成をとおして衛生管理に対する意識づけやと理解を深めることができた。また、責任分担制の下、学生当番による牛の観察や休日の飼養管理を実施させることにより責任を持って管理するという意識醸成を図った。

校外活動では、JAグループ和牛育成管理共進会への出品や子牛セリ市場への参加等を研修として実施した。

さらに、学生自ら畜産加工品の製造・販売を行うことで経営感覚の向上につながった。

学生の進路は、2年生 6名のうち 3名が法人等へ就農した。

(カ) その他特徴的な取組

a 福島大学食農学類との連携の具現化 {本校教育への支援、福大生実習受け入れ、学生の交流活動、他} 高橋秀和 准教授 校内プロジェクト発表会指導・講評

b スマート農業スマートに係る人材育成 {教職員の技術習得、研修講座開設}

○白河市農業法人が実施しているスマート農業実証を視察研修

○ドローン安全講習会（一般社団法人まちづくり矢吹）1.2学年、一般

○福島大学 窪田陽介准教授及び渡邊芳倫准教授によるスマート農業の講義（令和3年8月23日、9月17日）

○スマート農業実践研修（株式会社キセキ東北の協力）1学年（令和3年12月10日）

- c 地域との連携
 - 農業体験の受入（認定こども園ポプラの木、中島幼稚園）
 - 矢吹町と本校との連携協定による取組
 - ドローン安全講習会
 - 物産販売施設の経営強化研修会
- d GAP等の推進
 - GAP更新審査に向けた学生指導の強化及びマニュアルの作成
 - 三重県農業大学校とのGAP交流
 - JGAP認証品目（令和3年11月17日更新認証）
 - 水田経営学科 米（玄米）、そば
 - 野菜経営学科 トマト、きゅうり
 - 果樹経営学科 ぶどう、かき
 - 花き日持ち品質管理認証品目（令和3年12月1日取得）宿根カスミソウ
 - FGAP認証の維持
- e 直売実習
 - 6回開催（6月30日、7月21日、8月6日、9月17日、11月5日、11月26日）
- f 主要行事
- g 統合事業関係
- h 東西しらかわ農業協同組合連携協定締結（令和3年12月22日）
 - 協定内容については、「地域農業振興」「人材育成・教育」「地域交流の促進」他学生募集及びイベント等における相互PRについて連携を図ることとした。
- i オンライン海外農業研修（令和3年12月1日）1,2学年
 - 学生の海外農業への関心を高めるとともに、国際的な視野や経営感覚を身につけるために開催した。（研修先：ニュージーランド）

ウ 進路指導の取組

(ア) 就農への誘導

進路状況 57名（98%）が決定し、1名（2%）が未定であった。内訳は就農25名（43%）、農協3名（5%）、農業関連産業16名（28%）、他産業5名（9%）、公務員6名（10%）、進学2名（3%）であり、就農率は前年と並び過去最高となった。

- a 本年度から就農支援サポート支援員を配置し新規就農を支援するため、サポート体制を充実させた。県内の農業法人や各市町村、各農林事務所との連携を図り、親元就農及び雇用就農などのモデルプランの作成支援を10件行い、雇用就農者数を増やすため農業法人に対して求人票の作成支援を17件行い、各就農相談会や学生との個別相談などの就農相談を31件行った。
- b 2学年を対象に、農業法人等についての理解を深め、将来の就農先としての位置づけを図るため、県内の法人等に関する説明会及び講座を3回開催した。
 - 農業担い手課と連携し、県内農業法人と学生が直接相談できる就農相談会を1回開催した。
- c 県内研修を活用し、現地において農業の復興に取り組む農業法人や技術革新に取り組む意欲的な農業経営を研修した。
- d 農林事務所との連携を強化し、相双農林事務所の本校1学年を対象とする就農相談会に参加した。

(イ) 進路に対する意識付けと支援

- a 1学年（4月、12月）と2学年（4月）に進路希望調査を実施した。
- b 学生に進路に対する目的意識を強く持たせるとともに、就職を希望する学生に対しては就職活動における心構えを、また、自家就農を希望する学生には雇用する立場となる経営者としての資質向上が図られるよう、定期的に進路指導会を開催した。
- c ハローワーク白河の学卒ジョブサポーターとの連携の下、1学年の就職講座Ⅰを受講する学生に対し、就職相談会を2回開催した。また、2学年においては、個別面談を4回開催し、14名が進路について相談を行った。

(ウ) 資格取得支援

- a 大型特殊免許（農耕車に限る）
 - 2学年39名が免許を取得した。
- b けん引運転免許（農耕車に限る）
 - 2学年34名が免許を取得した。
- c 毒物劇物取扱者
 - 1学年は1名が資格を取得した。
- d 刈払機取扱作業安全衛生教育 1学年48名受講
- e アーク溶接業務特別教育 1学年23名受講
- f 家畜人工授精師
 - 畜産経営学科2学年6名が資格を取得した。
- g 土壌医検定
 - 3級受験を1学年1名、2年生3名、2級受験を2年生が2名した。（結果は3月下旬）

- h 福島県農薬適正使用アドバイザー認定試験
2年生 24名が取得した。
- i 日本農業技術検定試験
3級を1学年5名、2学年1名が受験し5名合格し、2級を1学年2名、2学年2名が受験し1名が合格した。
- j JGAP指導員資格
2学年13名が取得した。

(エ) 令和3年度卒業者の主な進路

卒業生の進路は、親元就農5名（経営分野は、水稲1名、野菜2名、果樹1名、花き1名）、雇用就農19名、農業協同組合3名、農業関連産業（農畜産物流通業等）16名、公務員6名であった。

(オ) 農業次世代人材投資資金の活用

- a 農業次世代人材投資資金（準備型）は、就農を希望する青年が農業技術及び経営ノウハウの習得のための長期の研修実施を支援する制度で、交付金が年額150万円で最長2年間交付される。本校農業経営部の学生と研修部長期研修の研修生が交付要件を満たす研修として位置づけられている。2学年6名、1学年4名、長期就農研修生4名が受給した。
- b 本制度を活用した2学年の就農分野は、親元就農2名、雇用就農4名であった。

エ 学生募集の取組

(ア) 募集要項等の送付

募集要項等を高等学校107校、県の43機関、59市町村、19団体に送付し、募集への協力を依頼した。

(イ) 高校訪問

県内の高校75校を訪問し、進路担当教員に対して、本校の概要及び募集について説明するとともに生徒の進路希望状況について調査した。

(ウ) 進路説明会への参加

高等学校主催の説明会に参加し、延べ31校127名の生徒に本校の概要等について説明した。学年主任及び進路担当教員に本校の概要及び募集について説明した。

(エ) オープンキャンパスの開催

7月27日（火）、7月31日（金）、8月1日（日）にオープンキャンパスを開催し、本校の施設及び講義内容等について説明した。23校57名の高校生等及び44名の保護者が参加した。案内は高等学校107校、59市町村、農林水産部の16機関、2団体に送付し、協力を依頼した。

(オ) 県広報の活用

広報課30秒スポット放送5回、キビタンGO!（福島テレビ）1回、農家の皆さんへ（ラジオ福島）1回、農業総合センターだよりに学生募集の案内を掲載した。

(カ) 学校見学の受け入れ

県立高校1校の生徒30名、教員3名、保護者4名が来校し、農業の現状に関する施設・設備の見学及び教育内容の説明を行った。

(キ) 募集結果は、推薦入校試験受験者36名、一般入校試験（前期）受験者8名、一般入校試験（後期）受験者1名の計45名が受験をし、45名が合格者となった。

オ 学生数

(ア) 学科別

学科	※入校時								
	1年			2年			計		
	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計
水田経営学科	13	2	15	14	1	15	27	3	30
野菜経営学科	10	3	13	11	4	15	21	7	28
果樹経営学科	5	2	7	9	3	12	14	5	19
花き経営学科	3	3	6	5	6	11	8	9	17
畜産経営学科	7	4	11	1	5	6	8	9	17
計	38	14	52	40	19	59	78	33	111

(イ) 農家、非農家別

	※入校時					
	1学年		2学年		合計	
	学生数(名)	割合(%)	学生数(名)	割合(%)	学生数(名)	割合(%)
専業	12	23	12	20	24	20
農家兼業	16	31	13	22	29	26
計	28	54	25	42	53	48
非農家	24	46	34	58	58	52
合計	52	—	59	—	111	—

(ウ) 出身高校課程別

※入校時

	1学年		2学年		合計	
	学生数(名)	割合(%)	学生数(名)	割合(%)	学生数(名)	割合(%)
農業高校	33	64	35	59	68	61
普通高校	12	23	11	19	23	21
その他	7	13	13	22	20	18
合計	52	—	59	—	111	—

カ 教育科目 その1

区分	科目名	単位数	授業時間数			1学年 ※1		2学年 ※1			
			講義・演習	実験	実習	前期	後期	前期	後期		
共通 教育科目	全学科 共通	生物基礎	1	15			7				
		化学基礎	1	15			7				
		数学基礎	1	15			7				
		国語表現Ⅰ	1	15			7				
		国語表現Ⅱ	1	15				7			
		国語表現Ⅲ	1	15					7		
		人間と社会※2	1	15					7		
		体育	4	60			16	9	2	3	
		教養講座	1	15			3	4			
		(択一選択) 就農講座Ⅰ	2	30				14			
		(択一選択) 農業法人等就職講座Ⅰ									
		(択一選択) 就農講座Ⅱ	1	15					7		
		(択一選択) 農業法人等就職講座Ⅱ									
		必修小計			180			54	20	9	3
		選択小計(3単位必須)			45				14	7	0
		一般教養合計	15		225			54	34	16	3
共通 専門科目	全学科 共通	農業経営※2	2	30					14		
		農業経営演習	2	30						14	
		農業法規	2	30						14	
		農業関連産業論	1	15			5	2			
		簿記概論	3	45			22				
		農業情報処理基礎	2	30				14			
		農業情報処理応用	1	15						7	
		農業情勢Ⅰ※2	1	15					7		
		農業情勢Ⅱ	1	15						7	
		土壌肥料概論	2	30			14				
		農業機械	2	30			14				
		農業機械基礎実習	1				45	16			
		農業機械操作実習Ⅰ	1				45		22		
		マーケティング論	1	15					7		
		マーケティング演習	2	30						14	
		食品製造	1	15				7			
		卒業論文	10	150				15	30	30	
		(自由選択) 簿記検定講座	2	30				14			
		(自由選択) 毒物・劇物取扱解説	1	15			7				
		(自由選択) 毒物劇物取扱者資格講座	1	15			7				
		(自由選択) 農業機械操作実習Ⅱ	1				45		22		
		必修小計			495		90	63	73	59	86
		選択小計(自由選択)			60		45	14	14	22	0
専門共通合計(Max)	40		555		135	77	87	81	86		

カ 教育科目 その2

区分	科目名	単位数	授業時間数			1 学年 ※1		2 学年 ※1		
			講義・演習	実験	実習	前期	後期	前期	後期	
専 門 科 目	水田野菜果樹花き学科共通	農業概論	2	30		14				
		作物保護	2	30			14			
		植物生理	1	15		7				
		環境保全と農業	2	30					14	
		有機農業	1	15				7		
		農産物流通	1	15				7		
		農学実験	1		30		6	8		
		小計	10	135	30		27	22	14	14
	水田経営学科	先進農家等留学研修	5			225	44			
		水田経営研修	2			90	10	12	19	4
		作物経営実習	25			1,125	140	130	195	97
		水田経営基礎	2	30			14			
		水田経営応用	2	30				14		
		水田経営実践	2	30					7	7
		食品製造演習	2	30				14		
		小計	40	120		1,440	208	170	221	108
	水田経営学科合計	50	255	30	1,440	235	192	235	122	
	野菜経営学科	先進農家等留学研修	5			225	44			
		野菜経営研修	2			90	10	12	19	4
		野菜経営実習	25			1,125	140	130	195	97
		野菜生産概論	2	30			14			
		野菜栽培各論	2	30				14		
		野菜経営各論	2	30					7	7
		食品製造演習	2	30				14		
		小計	40	120		1,440	208	170	221	108
	野菜経営学科合計	50	255	30	1,440	235	192	235	122	
	果樹経営学科	先進農家等留学研修	5			225	44			
		果樹経営研修	2			90	10	12	19	4
		果樹経営実習	25			1,125	140	130	195	97
		果樹生産概論	2	30			14			
		果樹栽培各論	2	30				14		
		果樹経営各論	2	30					7	7
		食品製造演習	2	30				14		
小計		40	120		1,440	208	170	221	108	
果樹経営学科合計	50	255	30	1,440	235	192	235	122		
花き経営学科	先進農家等留学研修	5			225	44				
	花き経営研修	2			90	10	12	19	4	
	花き経営実習	25			1,125	140	130	195	97	
	花き生産概論	2	30			14				
	花き栽培各論	2	30				14			
	花き経営各論	2	30					7	7	
	フラワー装飾演習	2	30				14			
	小計	40	120		1,440	208	170	221	108	
花き経営学科合計	50	255	30	1,440	235	192	235	122		

カ 教育科目 その3

区分	科目名	単位数	授業時間数			1 学年 ※1		2 学年 ※1		
			講義・演習	実験	実習	前期	後期	前期	後期	
専 門 科 目	畜 産 経 営 学 科	畜産概論	1	15		7				
		家畜育種学	1	15			7			
		家畜繁殖学Ⅰ	1	15			7			
		家畜繁殖学Ⅱ	2	30					14	
		家畜栄養学	1	15			7			
		家畜衛生学	1	15					7	
		畜産環境保全	1	15					7	
		家畜解剖生理学	1	15			7			
		家畜解剖実験	1		30		14			
		先進農家等留学研修	5			225	44			
		畜産経営研修	2			90	10	12	19	4
		畜産経営実習	25			1,125	132	138	188	104
		乳用牛・肉用牛概論	2	30			14			
		飼料作物	1	15					7	
		食品製造演習	2	30				14		
		(択一選択) 乳用牛飼養管理技術応用	2	30				14		
		(択一選択) 肉用牛飼養管理技術応用								
		(択一選択) 乳用牛経営	1	15						7
(択一選択) 肉用牛経営										
畜産経営学科合計	50	255	30	1,440	235	192	235	122		
共通・専門合計	105	1,035	30	1,575	371	303	337	211		
学校行事					15	12	14	11		
合計					386	315	351	222		

※1 1 学年（前期・後期）、2 学年（前期・後期）は授業回数で表記している。

※2 1 学年から 2 学年への履修学年の変更により本年度の開講なし。

キ 非常勤講師一覧

		科目	講師名	所属・職・機関
共通 教養 科目	全 学 科 共 通	化学基礎	柳沼力夫	元日本大学非常勤講師
		国語表現Ⅰ	國分進	ケイセンビジネス公務員カレッジ講師
		国語表現Ⅱ	國分進	ケイセンビジネス公務員カレッジ講師
		国語表現Ⅲ	國分進	ケイセンビジネス公務員カレッジ講師
		体育	高萩孝平	元高等学校教員
		農業経営演習	三部吉久	税理士法人三部会計事務所
		農業法規	本庁職員	福島県庁
共通 専 門 科 目	全 学 科 共 通	農業関連産業論	担当職員	福島県林業研究センター 福島県農業協同組合中央会 福島県農業共済組合
		簿記概論	磯貝卓美	磯貝卓美税理士事務所
		農業情報処理基礎	志間幸恵	シップスパソコンスクール
		農業情報処理応用	志間幸恵	シップスパソコンスクール
		農業情勢Ⅱ	本庁職員	福島県庁
		土壌肥料概論	佐藤紀男	元県職員
		マーケティング論	西元良行	福島大学名誉教授
		マーケティング演習	西元良行	福島大学名誉教授
		食品製造	郡司尚子	郡山女子大学准教授
		(自由選択) 簿記検定講座	磯貝卓美	磯貝卓美税理士事務所
		(自由選択) 毒物・劇物取扱解説	柳沼力夫	元日本大学非常勤講師
		作物保護	佐々木正剛	福島県植物防疫協会
		環境保全と農業	佐藤紀男	元県職員
		農産物流通	津谷好人	宇都宮大学名誉教授
専 門 科 目		フラワー装飾演習	中村良美	フラワースタジオ POCO A POCO 主宰
		家畜育種学	永山文夫	元県職員
		家畜栄養学	土屋友充	元県職員
		家畜衛生学	担当職員	中央家畜保健衛生所
		家畜解剖生理学	二瓶由佳	元県職員
		家畜解剖実験	担当職員	中央家畜保健衛生所
		飼料作物	土屋友充	元県職員

ク 教育行事 その1

月 日	行 事 名
令和 3年 4月 7日	始業式
9日	入校式
12日	学生健康診断・オリエンテーション
22日	防災避難訓練
7日	スポーツ大会(学生自治会主催) 中止
28日～ 27日	卒業論文設計発表会
27日～ 28日	東日本農業大学校等親善球技大会(宮城県)中止
27日	校内球技大会 中止
6月10日	植付け祭
6月23日～ 7月 7日	先進農家等留学研修(前期)
30日	直売実習(1回目)
7月16日	学校記念日
21日	直売実習(2回目)
27日	オープンキャンパス(1回目)
30日	オープンキャンパス(2回目)
8月 1日	オープンキャンパス(3回目)
6日	直売実習(3回目)
7日～ 22日	夏期休業
24日～ 9月 7日	先進農家等留学研修(後期)(中止)
9月 1日	毒物劇物取扱者資格試験
17日	直売実習(4回目)
27日～ 30日	前期試験(1・2学年)

ク 教育行事 その2

月 日	行 事 名
10月 1日	後期授業開始
17日～ 18日	櫛隆祭
11月 5日	直売実習（5回目）
13日	防災避難訓練
14日	日商簿記検定試験
16日	校内意見発表（1学年）
17日	防災避難訓練
18日～ 19日	収穫祭（18日のみ）、球技大会（学生寮自治会主催）
26日	直売実習（6回目）
12月 1日	オンライン海外農業研修（1学年・2学年）
8日	卒業論文発表会
11日	日本農業技術検定
18日～ 1月10日	冬季休業
令和 4年 1月18日～ 19日	東日本農業大学校等プロジェクト発表・交換大会（記録動画）
24日～ 25日	後期試験（2学年）
24日～ 2月25日	家畜人工授精に関する講習会
13日	土壌医検定試験
2月14日～ 15日	後期試験（1学年）
26日	日商簿記検定試験
3月 2日	卒業記念講演会 （講師：田村 俊和氏「夢に向かって羽ばたこう！」）
3月 9日	卒業式
17日	終業式
18日～ 4月 6日	春期休業 海外農業研修（1学年・2学年）の開催は中止

ケ 各種表彰者

月 日	行事名	結 果
令和3年11月16日	校内意見発表会	最優秀 野菜経営学科1年 渡部 竜生 「農業に対する思いとこれから」
		優 秀 野菜経営学科1年 竹島 和輝 「震災の記憶と農業を営む覚悟」
		優 秀 野菜経営学科1年 佐野 新太 「魅力的な農業と秘めた可能性」
令和3年12月8日	校内卒業論文発表会	最優秀 花き経営学科2年 渡邊 文太 「シクラメンの摘葉処理が品質に及ぼす影響」
		優 秀 水田経営学科2年 石井 源土 「屋外プール育苗は「即戦力」となれるか」
		優 秀 野菜経営学科2年 高橋 岳史 「土壌と亜リン酸施用の有無がアスパラガス栽培の初期生育に及ぼす影響について」

コ 卒業生の進路状況(令和4年3月31日現在)

	進 路	農業経営部
就 農	自家	5
	法人	19
	研修	1
	小計	25
非就農	農協	3
	農業団体	0
	農業関連産業	16
	他産業	5
	公務員	6
	進学	2
	小計	32
未定		1
	合 計	58

(3) 研修部の取組

ア 研修実施状況

就農研修は就農希望者や新規就農者の技術習得を目的として初級・中級コースを設け、受講希望者のレベルに応じた体系により実施した。

長期就農研修は就農希望者が就農後の農業経営を早期に安定できるよう、1年を単位とした実習主体の研修として実施した。

農産加工研修は、加工初心者を対象とした「基礎コース（全4回継続参加）」を年2回開催し農産加工に必要な講義を実施した。実際に農産加工品開発を行っている方を対象に「応用コース」を開催し、より高いレベルの商品開発につなげるために実施した。

農業機械研修は、農作業安全の推進、トラクタ点検・整備及び運転技術向上を目的とした安全運転技術総合コース、機械の基本操作・整備点検やロボット技術・情報通信技術（ICT）を活用したスマート農業を学ぶ技術向上コース、農作業安全対策を学ぶ農作業安全推進コースを実施した。令和3年度は、ロボット技術・情報通信技術（ICT）を活用したスマート農業の中から近年注目されている「農業用ドローン」に特化した「スマート農業（ドローン）」研修を初めて4回開催した。

なお、安全運転技術総合コースでは特別研修を実施し、大型特殊免許取得に向けた支援を行った。

施設利用研修として、就農、農産加工、農業機械の各研修体系の中にも組み入れ実施するとともに、農作業安全に関する研修は現地の要請に応じ実施した。

イ 研修実績

(ア) 就農研修

a 初級

名称	主な内容	対象者及び定員	受講者数	期間(日数)
(a)春コース	[講義]・栽培のための基礎知識 ・営農に係る基礎知識 [実習]・栽培管理実習 ・農業機械体験実習	就農予定(希望)者 15名	15名	6~8月(6日) (日曜日開催)
(b)秋コース	[講義]・栽培のための基礎知識 ・営農に係る基礎知識 [実習]・栽培管理実習 ・農業機械体験実習		15名	8~11月(6日) (日曜日開催)

b 中級

名称	主な内容	対象者及び定員	受講者数	期間(日数)
(a)中級	[講義、演習、見学] 必修科目：土壌肥料 農業経営、 農業機械、鳥獣害対策 選択科目：水稻、野菜、果樹、 花き、畜産、有機農業	就農予定者 及び就農者 15名	15名	6~12月 (必修科目10日) (選択科目各4日) (平日開催)

c 長期就農研修

名称	主な内容	対象者及び定員	受講者数	期間
(a)長期就農研修	[実習、講義] 栽培管理実習を柱にした1年間の研修 研修科目 施設野菜、露地野菜、果樹、 花き、水稻・畑作物、畜産、 有機栽培 研修場所 農業短期大学校研修部、 農業総合センター本部、 果樹研究所、畜産研究所、 会津地域研究所、浜地域研究所	福島県内で農業 により生計を立て ることを目標 とし、就農前に農 業の知識及び技 術の習得を目指 す者 農業短大枠5名 他若干名	13名 内訳 農業短大 4名 果樹研 9名	令和2年4月 ~ 令和3年3月

d 施設利用研修

名称	主な内容	対象者及び定員	受講者数	期間(日数)
(a) 令和3年度 地場産物 活用のた めの作物 栽培研修	講義 農作物の基礎、農産物の安全対策・GAPの基礎 実習 竹プランター作り、土作り、施肥、畝立て、マルチ張り、作付け作業、播種(直蒔)、連結ポットを使った苗作り	県北・相双・いわき地区の市町村立小・中学校教諭・栄養教諭	9名	7/29~7/30(2日)

e 研修用ハウス増設

事業名	主な内容	事業量	事業費
農業業短期大学校研修用ハウス整備事業	研修希望者の多い施設栽培の強化を図るため、環境制御装置等を実装した栽培施設を整備する。	5.4×18m一式(3棟)	29,199,500

(イ) 農産加工研修

a 基礎(春コース)

名称	主な内容	対象者及び定員	受講者数	期間(日数)
(a) 営業許可と食品表示	・衛生管理、食品営業許可について ・栄養表示について	農産物加工を始める予定の農業者各15名	15名	5/12(1日)
(b) 殺菌と包装	・食品の殺菌方法 ・6次化に関する補助事業等の紹介について			5/26(1日)
(c) 瓶詰め・袋詰め食品	・瓶詰め・袋詰めの加工方法			6/9(1日)
(d) 事例紹介	・優良農産加工者による事例紹介 ・加工所運営について			6/23(1日)

b 基礎(秋コース)

名称	主な内容	対象者及び定員	受講者数	期間(日数)
(a) 営業許可と食品表示	・衛生管理、食品営業許可について ・栄養表示について	農産物加工を始める予定の農業者各15名	15名	10/13(1日)
(b) 殺菌と包装	・食品の殺菌方法 ・6次化に関する補助事業等の紹介について			10/27(1日)
(c) 瓶詰め・袋詰め食品	・瓶詰め・袋詰めの加工方法			11/10(1日)
(d) 事例紹介	・優良農産加工者による事例紹介 ・加工所運営について			11/24(1日)

c 応用

名称	主な内容	対象者及び定員	受講者数	期間(日数)
(a) 講演	・既存商品を活用した新たな商品づくりについて	農産物加工・販売者若しくは予定者各15名	16名	10/8(1日) ※9/1から延期
(b) 講義	・食品の殺菌について			

d 施設利用研修

名称	主な内容	対象者	受講者数	期間(日数)
(a) 農産加工	令和3年度地場産物活用のための作物栽培研修	県北・相双・いわき地区の市町村立小・中学校教諭・栄養教諭	9名	7/29(1日)
	落花生加工	ゆめねっと福	1名	9/15(1日)
	香酸柑橘類加工	ゆめねっと福	1名	9/29(1日)
	ぶどう加工	福島県立岩瀬農業高等学校	15名	10/20(1日)
	ブルーベリー加工	福島県立岩瀬農業高等学校	13名	11/15(1日)
	ブルーベリー葉加工	三春インターブルーベリー園	1名	11/24(1日)
	いちじく加工	福島県農産物加工者連絡協議会	2名	11/25～26(2日)
	りんご加工	福島県立岩瀬農業高等学校	13名	12/23(1日)

(ウ) 農業機械研修

a 安全運転技術総合コース

名称		主な内容	対象者及び定員	受講者数	期間(日数)
(a) 大型特殊操作 (農耕車限定)	第1回	大型特殊自動車(農耕車)の免許取得に必要なトラクタ操作の基本技術及び安全運転技術の習得	農業者各10名	10名	10/19～10/21(3日)
	第2回			10名	10/26～10/28(3日)
	第3回			10名	11/ 9～11/11(3日)
	第4回			10名	11/15～11/17(3日)
	第5回			9名	11/24～11/26(3日)
	第6回			10名	11/30～12/ 2(3日)
	第7回			10名	12/ 7～12/ 9(3日)
(b) けん引操作 (農耕車限定)	第1回	けん引(農耕車)の免許取得に必要なトラクタ操作の基本技術及び安全運転技術の習得	農業者各10名	11名	5/25～ 5/27(3日)
	第2回			10名	6/ 1～ 6/ 3(3日)
	第3回			10名	6/ 8～ 6/10(3日)
	第4回			10名	6/15～ 6/17(3日)
	第5回			10名	6/22～ 6/24(3日)
	第6回			10名	6/29～ 7/ 1(3日)
	第7回			11名	7/13～ 7/15(3日)

b 技術向上コース

名称		主な内容	対象者及び定員	受講者数	期間(日数)
(a) 初めての農機整備	第1回	工具の使い方	農業者	9名	7/29(1日)
	第2回	整備点検の基礎	各8名	6名	1/13(1日)
(b) 初めての刈払機	第1回	刈払機の基礎知識	農業者	7名	5/20(1日)
	第2回	基本操作の習得	各8名	6名	10/1(1日)
(c) トラクタ操作技術向上		トラクタ操作に係る基本技術習得 ・基本操作 ・点検整備 ・ロータリ耕うん	農業者8名	10名	11/4～5(2日)
(d) 初めてのアーク溶接		・アーク溶接の基礎知識 ・基本操作法の習得	農業者10名	10名	11/1～2(2日)
(e) コンバインの整備点検		・コンバインの基礎知識 ・整備点検技術の習得	農業者10名	9名	1/26～27(2日)
(f) スマート農業		・ICT技術の基礎知識 ・関連機器の操作体験	農業者等20名	15名	11/18～19(2日)
(g) スマート農業(ドローン)		・ICT技術(ドローン)の基礎知識 ・ドローンの操作体験	農業者等100名	25名	12/14～15(2日)

c 農作業安全推進コース

名称	主な内容	対象者及び定員	受講者数	期間(日数)
(a) 農作業安全	・農作業事故の現状と課題 ・農業機械の安全対策	農業者、関係機関、 団体職員等 20名	2名	3/17(1日)
(b) 現地支援研修 現地で学ぶ農 作業安全	・農作業事故の現状 ・農業機械の安全対策	JA福島さくら 県中農林事務所 県北農林事務所 玉川村	30名 20名 6名 15名	6/ 5(1日) 10/15(1日) 11/ 6(1日) 3/24(1日)

d 施設利用研修

名称	主な内容	対象者	受講者数	期 間(日数)
(a) 農業機械	トラクタ免許	JAふくしま未来	10名	8/4~5(2日)
		郡山園芸振興センター	3名	10/5~6(2日)
		JAふくしま未来	10名	10/7~8(2日)
		JAふくしま未来	8名	12/13~14(2日)
		JAふくしま未来	7名	12/15~16(2日)
		JAふくしま未来	10名	12/20~21(2日)
		JAふくしま未来	4名	12/22~23(2日)
	けん引運転免許取得	農業者組織	7名	7/20~21(2日)
		JAふくしま未来	5名	1/17~18(2日)
	専門技術向上研修	普及指導員	16名	11/22(1日)
農作業安全研修	郡山園芸振興センター	3名	10/4(1日)	
スマート農業 (ラジコン草刈機)	農業者	30名	11/8(1日)	

2 福島県農業総合センター農業短期大学校運営会議の開催

大学校が適切かつ円滑に運営されるよう、大学校の教育・研修等の基本的事項について、県内各層の意見を徴し、助言を求めるため設置している。令和2年度からは学校教育法に基づく学校関係者評価委員会を兼ねる。

(1) 農業短期大学校運営会議の開催

開催日	開催場所	テ ー マ
令和4年 2月16日	農業総合センター 農業短期大学校視聴覚室	1 令和3年度の教育実績 2 学校評価 3 令和4年度の教育内容 4 学生の活動紹介（映像による卒業論文発表紹介） 5 意見交換

(2) 運営会議委員（敬称略）

氏名	所属・役職名等
鈴木 光一	福島県指導農業士会 会長
降矢 敏朗	うつくしまふくしま農業法人協会
鈴木 正洋	福島県農業会議 担い手・経営対策部長
紺野 明宏	福島県農業協同組合中央会 人材育成部長
菅野 雅敏	就農支援センター 所長
安田 信久	福島県高等学校教育研究会農業部会 部会長
新田 洋司	福島大学 教授
柳沼 力夫	大学校外来講師
大野 達弘	農業短期大学校後援会 会長
小沢 充博	農業短期大学校同窓会 会長
竹内 孝重	農業担い手課 課長

3 福島県インターンシップの受入れ

本年度はオンラインでのインターンシップを開催し、学生の受入れを行った。また、令和3年度県庁技術職ナビゲーター面談実施概要に従い、面談を実施した。

形式	受入部所	期 間	所属団体
オンライン	企画経営部	令和3年10月13日	秋田県立大学生物資源科学部
オンライン	企画経営部	令和3年10月13日	新潟大学農学部
オンライン	企画経営部	令和3年10月13日	山形大学農学部
オンライン	企画経営部	令和3年10月13日	東京農業大学生物産業学部
ナビゲーター面談	果樹研究所	令和3年12月17日	新潟大学農学部
ナビゲーター面談	安全農業推進部	令和4年1月5日	秋田県立大学生物資源科学部

V 食の安全・環境と共生する農業支援

1 安全農業推進部の業務実績

(1) 指導・有機認証課の業務

ア 農薬に関する業務

(ア) 農薬販売届の受理（令和4年3月31日現在）

新規届出	変更届出	廃止届出	販売者総数
47	33	23	1,222

(イ) 農薬販売者立入検査（令和4年3月31日現在）※2月7日

立入検査 延べ数	注意指導票による指導実件数							左のうち 改善済み 件数
	販売の 制限、禁 止	虚偽宣 伝等の 禁止	販売所 の届出	帳簿の 備付、記 載、保管	その他 (表示等)	指導延べ 件数計		
192	17	0	0	7	29	0	36	36

(ウ) 主な農薬適正使用指導記録

月 日	内 容	受講者数
7月9、15日	農薬危害防止講習会	292
12月1、6、7日	農薬適正使用アドバイザー認定・更新研修	143
12月1、6、7日	農薬管理指導士認定・更新研修	31

(エ) ゴルフ場の検査・指導

農薬使用実績に基づく適正使用確認件数	37
--------------------	----

(オ) 航空防除（無人航空機）に関する指導

防除実施面積	12,032.5ha（水稻10,164.1ha 大豆1,601.2ha、麦類266.7ha、その他0.6ha）
事故発生状況	1件
指導対応状況	防除実施者等に対し、周辺住民等への事前情報提供、飛散防止、作業事故防止、事故発生時の報告方法等について文書で周知し、併せて防除所のホームページに情報を掲載した。

(カ) 農作物病害虫防除指針掲載農薬登録変更内容の確認とホームページによる周知

防除指針掲載農薬の登録内容変更に関する情報	12回
-----------------------	-----

(キ) 農薬流通量調査

令和2年10月から令和3年9月までの期間（令和3農薬年度）を対象に、農薬卸売業者及びホームセンターから農薬販売量の報告を求め、県内の流通量を取りまとめた。

分 類	流通品目数	流通量 (t、kl)
殺菌剤	310	1,287
殺虫剤	334	2,068
殺虫殺菌剤	175	1,403
除草剤	583	3,306
その他	142	7,998
合 計	1,544	16,063

イ 農作物の野生鳥獣被害取りまとめ（調査対象期間 令和2年4月～令和3年3月）

総被害面積 (ha)	206.96 (鳥害7.94、獣害199.02)
総被害金額 (千円)	198,391 (鳥害27,991、獣害170,400)

ウ 肥料に関する業務

(ア) 知事登録普通肥料 登録・届出受理

新規登録	登録更新	変更届出	失効届出
6	3	8	5

(イ) 指定配合肥料届出受理

新規届出	変更届出	廃止届出
1	0	2

(ウ) 特殊肥料生産・輸入届出受理

生産業者届出	変更届出	廃止届出
18	12	31

(エ) 肥料販売業務開始届出受理

新規届出	変更届出	廃止届出	有効届出数
24	79	33	1,143

(オ) 肥料生産・販売事業場立入検査

立入検査件数	収去・分析	主な検査・指導事項
52	11	表示票、帳簿、届出内容、重量検査（生産業者）、 内容成分（収去肥料）

(カ) 肥料入荷量調査

調査対象期間は、令和2年6月から令和3年5月までとした。

総入荷量は102,179tで、前年比103%であった。普通肥料の種類ごとの入荷量は以下のとおり。
(t)

窒素質	リン酸質	カリ質	複合	石灰質	有機質	その他
3,485	3,621	3,987	52,900	11,664	1,999	2,380

(キ) 肥料生産数量調査

令和3年1月から12月までの1年間を対象に肥料の生産数量を調査し取りまとめた。

項目	知事登録肥料	指定混合肥料	特殊肥料	輸入特殊肥料
事業者数	19 (12)	5 (2)	515 (402)	7 (2)
銘柄数	39 (24)	24 (7)	596 (510)	13 (2)
生産数量 (t)	1,802	406	198,592	40

()内は生産・輸入実績があるもの

エ 飼料に関する業務

(ア) 飼料販売届出受理

新規届出	変更届出	廃止届出	販売者総数
1	12	0	46

(実質廃止、取扱いなし、ペット用のみの業者は除く)

(イ) 飼料添加物販売届出受理

新規届出	変更届出	廃止届出	販売業者総数
0	9	0	21

(取扱いなしの業者は除く)

(ウ) 飼料製造・販売事業者立入検査

立入検査件数	収去・分析	主な検査・指導事項
13	3	・表示票、帳簿、届出事項、重量検査（製造業者） ・BSE対応ガイドライン、有害物ガイドライン及び 食品残さガイドライン等の遵守状況 ・栄養性及び安全性（収去飼料）

オ 有機認証に関する業務

(ア) 業務経過

月 日	内 容
4月14日、4月23日、 5月12日、10月26日	認証書交付式
3月24日	
4月8日	有機認証検査員委任状交付式
6月15日	第1回認証業務講習会（受講者26名）
9月28日	格付実績及び面積報告（農林水産省へ）
9月30日資料発送	第1回公平性委員会（書面開催）
12月2日	第2回認証業務講習会（受講者22名）
2月15日、2月21日	FAMICによる実地調査の立会対応
2月16日資料発送	第2回公平性委員会（書面開催）
3月1日	登録認証機関内部監査
3月14日資料発送	認証生産行程管理者全体研修会（書面開催）

(イ) 認証状況（令和4年3月31日現在）

申請受理件数	8 (139)	
受理後自ら申請を取り下げた件数	1 (4)	
新たな認証生産行程管理者数	5 (123)	
認証しなかった件数	0 (8)	
認証を取り消した件数	0 (2)	
認証を自ら取り下げた件数	1 (71)	
認証生産行程管理者数	50	個人47、組織3、農家総数57
認証ほ場面積（令和2年度）(a)	6,176	水田4,667、畑1,457、その他51

() 内は業務開始からの累計

(ウ) 有機農産物格付実績（kg）（令和2年度）

野菜	17,137
果樹	247
米	99,465
小麦	0
そば	7,515
大豆	14
その他豆類	47
雑穀	0
きのこ類	65,810
植物種子（エゴマ）	0
香辛料（ハーブ）	57
計	190,291

令和3年9月に農林水産大臣へ報告

(2) 発生予察課の業務

ア 病虫害発生予察事業

(ア) 普通作物

水稲は定点10か所、巡回248ほ場、麦類は巡回32ほ場、ダイズは定点1か所、巡回36ほ場において病虫害の発生状況を定期的に調査した。また、予察灯1か所、フェロモントラップ等14か所（センター2を含む）で害虫の発生消長を調査した。

(イ) 果樹

リンゴで定点8か所、巡回34ほ場、モモで定点3か所、巡回22ほ場、ナシで定点5か所、巡回24ほ場、カキは巡回7ほ場で、病虫害の発生状況を定期的に調査した。また、フェロモントラップ16か所（うち2地点は複数種を調査）、カメムシ越冬量調査2か所で害虫の発生消長を調査した。

(ウ) 野菜・花き

キュウリで定点3か所、巡回8か所、トマトで定点4か所、巡回8か所、イチゴで定点5か所、巡回17か所、キクで定点2か所、巡回9か所、リンドウで巡回9か所において、病虫害の発生状況を定期的に調査した。また、フェロモントラップ16か所（センター2か所を含む）で害虫の発生消長を調査した。

(エ) 情報の提供

病害虫発生予察情報を延べ 14 回発表し、各作物の防除対策資料として提供した。また、水稻斑点米カメムシ類で 1 回、イネドロオイムシで 1 回、イネばか苗病で 1 回、モモせん孔細菌病で 2 回、ナシ黒星病で 4 回、野菜類・花き類ハスモンヨトウで 1 回、イチゴハダニ類で 1 回、ワタアブラムシで 1 回の計 12 回の防除情報を、モモせん孔細菌病で 1 回注意報を発表した。

また、ホームページに各作物の病害虫発生状況、防除対策情報、BLASTAM、予察灯やフェロモントラップのデータなどの防除情報を提供した。

(オ) 国への報告事務

病害虫発生予察現況報告（13 回）、ウンカ類発生現況報告（随時）、各農作物病害虫発生面積報告（10 月、3 月）、その他病害虫発生情報等を報告した。

(カ) 病害虫防除員

農家、農協職員 74 名を委嘱し、予察灯やフェロモントラップの調査及び病害虫発生状況情報を定期的に収集した。

イ 病害虫診断同定

令和 3 年（令和 3 年 1 月 1 日～令和 3 年 12 月 31 日）の依頼件数は、18 件であった。

診断・同定の結果	病害	11 件（ウイルス病等 6 件、糸状菌病 1 件）
	虫害	4 件（ハエ目 2 件、コナジラミ類、カメムシ目）
	その他	3 件（原因不明 3 件）

ウ ミバエ類等侵入警戒調査事業

諸外国から侵入の危険性の高い病害虫であるチチュウカイミバエ及びミカンコミバエを 5 か所、コドリリングを 2 か所、火傷病を 5 か所で調査した。

チチュウカイミバエ、ミカンコミバエ及びコドリリングは、フェロモントラップによる調査を行った結果、誘殺されなかった。火傷病は、目視による調査を行った結果、いずれの調査地点においても疑わしい症状は認められなかった。

エ ウメ輪紋ウイルス (*plum pox virus*) の発生状況調査

東京都のウメにおいて国内初確認されたウメ輪紋ウイルスによる病害（平成 21 年 4 月 8 日、東京都病害虫防除所発表）について、本県で生産されている核果類での発生の有無を調査した。

調査地点は県内 15 か所とし、調査対象植物の栽培面積や過去の調査実績から、農林事務所ごとに調査地点数を設定した。生産園地の調査は、ほ場で目視による病徴確認を行った後、病徴の有無によらず 1 か所当たり 5 樹を選定し、1 樹から成葉 5 枚を採取し、イムノクロマト法によるウイルス検定を行った。苗生産園地の調査は、生産園地と同様に目視による調査を行った後、横浜植物防疫所に試料を送付し、検定を実施した。

一部の樹体で葉の退緑症状が確認されたが、ウイルス検定の結果、すべての検体が陰性であり、本県での発生は確認されなかった。

オ キウイフルーツかいよう病 Psa3 系統の発生状況調査

「キウイフルーツかいよう病の Psa3 系統の防除対策マニュアル」（平成 30 年 5 月 22 日付け 30 消安第 892 号消費・安全局植物防疫課長通知）に基づき、キウイフルーツかいよう病の Psa3 系統の発生調査を行った。平成 26 年 5 月に国内で初めて発生が確認された本病について、本県で生産されているキウイフルーツでの発生状況を調査した。

キウイフルーツ生産園地のある農林事務所農業振興普及部及び農業普及所のうち 2 部所に対し、各 2 園地程度を選定し目視による病徴確認又は生産者への聞き取り調査を依頼した。疑似症状は認められず、本県での発生は確認されなかった。

カ スイカ果実汚斑細菌病

国は国内にまん延すると有用な植物に重大な損害を与えるおそれがある病害虫（重要病害虫）を指定しており、本県未発生病害虫の侵入を警戒する必要がある。また、本病害虫が発生した場合、迅速に初動防除等を開始し、早期に根絶することが重要である。そこで重要病害虫のスイカ果実汚斑細菌病の県内の発生の有無を調査した。

夏秋露地キュウリ主要産地から 10 ほ場選定し、令和 3 年 5～9 月に月 1 回調査した。1 ほ場当たり任意の 100 果について、発病の有無を確認した。スイカ果実汚斑細菌病の発生は確認されなかった。

キ 種馬鈴しょ検査

種馬鈴しょによる有害動植物のまん延を防止するため、種馬鈴しょの生産ほ場検査及び生産物検査に立ち会い、検査の補助を行った。令和3年度は計6回の検査補助を行った。

ク ダリア PSTVd 調査

平成22年に山梨県内の生産施設で栽培されていたダリアでポテトスピンドルチューバーウイルス(D) (*Potato spindle tuber viroid*: PSTVd)が確認されたことを受け、農林水産省植物防疫所及び関係機関と協力の下で、本県で生産されているダリアの発生状況を調査し、感染範囲及び感染経路の特定を行った。令和3年は1ほ場を調査したが PSTVd の感染は確認されなかった。本年度をもってダリア PSTVd の調査は終了となる。

ケ 農林水産データ管理・活用基盤強化事業

国立研究開発法人農業・食糧産業技術総合研究機構を代表とする予察情報 API コンソーシアムに参加し、WAGRI の API として生産者へ直接的でタイムリーに病害虫情報を通知する仕組みを構築するため、各県ごとに異なる予察情報のフォーマットを標準化した API 構築に向けて、予察情報を広域に情報発信するためのシステム実証を行った。本年度は、予察情報を登録するシステムの効率の検証と登録スキームにおける問題点を洗い出すため、予察情報の登録実証を行いながら、機能などについて改善点を洗い出した。

コ 主要病害虫の発生状況

(ア) 水稻

a いもち病

本田での葉いもちの初発確認は、中通り地方と浜通り地方が7月上旬で平年より早く、会津地方が8月上旬で平年より遅かった。8月上旬の発生ほ場割合は平年並で、浜通り地方の一部で発生程度の高いほ場が確認された。

穂いもちの初発確認日は中通り地方で平年並、会津地方で平年よりやや遅く、浜通り地方でやや早かった。発生ほ場割合は全域で平年より高く推移し、発生程度の高いほ場も確認された。

b 紋枯病

紋枯病の初発確認日は中通り地方で平年並、浜通り地方と会津地方で平年よりやや遅かった。発生ほ場割合は平年並～低く推移し、発生程度も低かった。

c 稲こうじ病

9月の発生ほ場割合は中通り地方で平年より低く、会津地方と浜通り地方では発生は確認されなかった。

d ごま葉枯病

9月の発生ほ場割合は会津地方と浜通り地方では平年より低く、中通り地方では発生が確認されなかった。また、発生程度は低く、穂枯れの発生は確認されなかった。

e イネミズゾウムシ

6月の発生ほ場割合は中通り地方と会津地方で平年並、浜通り地方で平年より高く、会津地方と浜通り地方では発生程度の高いほ場も確認された。

f イネドロオウムシ (イネクビホソハムシ)

6月の発生ほ場割合は中通り地方で平年より高く、会津地方では発生は確認されず、浜通り地方で平年よりやや低かった。中通り地方の被害程度の高かった地域では、チアメトキサム剤に対する感受性低下が確認された。

g ニカメイガ (ニカメイチュウ)

フェロモントラップ調査では、5月下旬と8月上旬に誘殺のピークが確認された。幼虫の発生ほ場割合は全域で平年より高かったが、被害程度は低かった。

h フタオビコヤガ (イネアオムシ)

8月の幼虫の発生ほ場割合、発生程度ともに平年より低く、すくい取りでも発生量は平年より少なかった。

i イナゴ類

発生量は平年並で推移し、8月の発生ほ場割合、発生程度はともに平年並であった。

j 斑点米カメムシ類

すくい取り調査では、6月下旬から発生が確認され、畦畔雑草では平年より発生がやや多かった。本田では浜通り地方で発生ほ場割合が平年よりやや高かったが、県全体では平年並となり、発生程度は全体的に低かった。坪刈り調査における斑点米混入率は平年並であった。

k イチモンジセセリ (イネツトムシ)

8月の幼虫の発生ほ場割合は中通り地方と浜通り地方では発生が確認されず、会津地方での発生ほ場割合は平年より低かった。また、発生程度も低かった。

(イ) ムギ類（令和3年産）

a 赤かび病

6月の発生ほ場割合は中通り地方と浜通り地方で平年より高く、会津地方では発生が確認されなかった。一部で発生程度の高いほ場が確認されたが、発生は概ね平年並であった。

b 雪腐病類

会津地方の麦産地での根雪期間は平年並で、枯死面積率は平年よりやや低かった。葉先枯れが多かったが、一部で枯死株も確認された。

(ウ) ダイズ

a 紫斑病

子実調査では、発生ほ場割合は平年並であったが、中通り地方の一部で発生程度の高いほ場が確認された。

b ベと病

8月の発生ほ場割合は中通り地方で平年より低く、会津地方では発生が確認されず、浜通り地方で高かった。子実調査では、発生ほ場割合が中通り地方と浜通り地方で平年より高く、被害粒率の高いほ場も確認された。

c 吸実性カメムシ類

9月の払落し調査では県全体で発生が少なかった。子実調査では、発生ほ場割合は中通り地方と会津地方で平年よりやや低く、浜通り地方で高かったが、被害粒率は平年並であった。

d フタスジヒメハムシ

9月の払落し調査では、中通り地方では発生が確認されず、会津地方と浜通り地方で平年より少なかった。子実調査でも、被害は少なかった。

e マメシンクイガ

子実調査では、全域で連作ほ場を中心に被害粒率の高いほ場が確認されたが、輪作初年目のほ場では被害は少なかった。

f ウコンノメイガ

8月の幼虫による葉巻の発生状況は中通り地方と浜通り地方で平年並、会津地方で平年よりやや低かった。

(エ) リンゴ

a 斑点落葉病

6月下旬から新梢葉での発生が確認され、発生ほ場割合は平年並に推移した。

b 褐斑病

7月下旬から新梢葉での発生が確認された。8月下旬から発生が目立ち始め、発生ほ場割合は平年よりやや高く推移し、10月上旬には平年より高くなった。一部発病葉率の高いほ場も確認された。果実での発生は確認されなかった。

c 腐らん病

5月下旬の枝・胴腐らんの発生ほ場割合は平年並であった。一部ほ場では防除に苦慮している。

d 輪紋病

9月上旬から果実での発生が確認され、発生ほ場割合は平年並に推移した。

e 炭疽病

9月上旬から果実での発生が確認され、発生ほ場割合は平年並に推移した。

f シンクイムシ類

モモシンクイガの果実での発生ほ場割合は、10月上旬以降、平年よりやや高く、被害は県内全域で確認された。交信攪乱剤の未設置ほ場では発生程度が高かった。

ナシヒメシンクイの果実被害は確認されなかった。

スモモヒメシンクイの果実での発生ほ場割合は、8月下旬以降、平年よりやや高く推移し、管理が不十分なほ場では発生程度が高かった。

g アブラムシ類

5月下旬から新梢での寄生が確認され、発生ほ場割合は平年並に推移した。

h ハダニ類

5月下旬から新梢葉での寄生が確認された。発生ほ場割合は6月下旬までは平年並であったが、7月以降平年よりやや高く推移した。

中通り地方ではナミハダニ、会津地方ではリンゴハダニが優先するほ場が多かった。

(オ) モモ

- a セン孔細菌病
春型枝病斑の初確認は3月26日であった。発生ほ場割合は、4月中旬は平年よりやや高く、5月は平年並であった。
新梢葉での発生は5月上旬から確認された。発生ほ場割合は、5月は平年よりやや高く、6~7月は平年並、8~9月は平年よりやや低かった。
果実での発生は5月下旬から確認された。発生ほ場割合は、6月上旬以降、平年並であった。
- b シンクイムシ類
モモシンクイガ、ナシヒメシンクイ、モモノゴマダラノメイガによる果実被害は確認されなかった。
ナシヒメシンクイによる新梢の被害は7月上旬から確認され、9月上旬の発生ほ場割合は平年より高かった。
- c モモハモグリガ
新梢葉の被害は5月下旬から確認された。発生ほ場割合は、5~7月は平年並、8~9月は平年よりやや低かった。
- d ハダニ類
6月下旬から新梢葉の寄生が確認された。発生ほ場割合は、7月は平年よりやや高かったが、8月は平年よりやや低く、9月は平年並であった。
クワオオハダニ、カンザワハダニ、ナミハダニが確認され、優占種はほ場により異なっていた。

(カ) ナシ

- a 黒星病
芽基部病斑の初確認は4月9日であった。5月の果そうでの発生ほ場割合は平年並であった。
新梢葉での発生は6月下旬から確認された。発生ほ場割合は、中通り地方では平年よりやや高く、浜通り地方では平年並~やや低く推移した。
果実での発生は6月下旬から確認された。発生ほ場割合は、中通り地方では平年並~やや高く推移し、浜通り地方ではやや低い~平年並に推移した。
- b アブラムシ類
5月下旬から新梢での寄生が確認された。発生ほ場割合は平年並~やや低く推移した。
- c ハダニ類
新梢葉の寄生は、浜通り地方では6月下旬から、県北地域では7月下旬から、県中・県南地域では8月下旬から確認された。発生ほ場割合は、6~7月は平年並であったが、8月は浜通り地方で平年よりやや高く、中通り地方は平年並、9月は県全体で平年より高かった。
中通り地方はナミハダニ、浜通り地方はクワオオハダニが優占するほ場が多かった。

(キ) カキ

- a 円星落葉病
新梢葉での発生ほ場割合は平年よりやや低かった。

(ク) 果樹共通

- a 果樹カメムシ類
リンゴの果実被害は7月下旬から確認され、発生ほ場割合は平年並であった。
モモの果実被害は、平年同様確認されなかった。
ナシの果実被害は8月下旬から確認され、発生ほ場割合は平年並~やや高く推移した。
カキの果実被害は確認されなかった。

(ケ) 夏秋トマト

- a 灰色かび病
7月から発生ほ場割合がやや高くなったが、平年並に推移した。8月以降発生程度の高いほ場割合がやや高くなった。
- b 葉かび病
6月から発生が確認され、発生ほ場割合は平年並に推移したが、9月に発生ほ場割合及び発生程度の高いほ場の割合が高くなった。
- c すすかび病
7月から発生が確認され、発生ほ場割合は例年並に推移した。
- d かいよう病
6月から常発ほ場での発生が散見された。
- e オオタバコガ(タバコガ類)
フェロモントラップによる誘殺ピークは一部地域を除き平年並の8月中下旬であった。被害果の発生ほ場割合は平年よりやや低く推移した。

- f コナジラミ類
発生ほ場割合は平年並に推移した。9月に発生程度の高いほ場割合が高くなった。一部地域でタバココナジラミの寄生が確認され、黄化葉巻病の発生も確認された。
- g アザミウマ類
7月から被害果（白ぶくれ果）の発生が確認されたが、発生ほ場割合は平年よりもやや低く推移した。

(コ) 夏秋キュウリ

- a ベと病
6月から発生が確認され、発生ほ場割合は平年よりやや高く推移した。
- b うどんこ病
7月から発生が確認され、発生ほ場割合は平年よりやや低く推移した。
- c 炭疽病
6月から発生が確認され、7月以降発生量が増加し、発生ほ場割合は平年よりやや高く推移した。
- d 褐斑病
8月から発生が確認され、発生ほ場割合は平年よりやや低く推移した。
- e モザイク病
6月に発生が確認され、発生ほ場割合は平年よりやや低かった。
- f アブラムシ類
定植直後から寄生が認められた。発生ほ場割合は平年並に推移した。
- g ハダニ類
6月から寄生が確認され、発生ほ場割合は栽培期間を通して平年より低く推移した。

(サ) イチゴ（令和2年定植）

- a 灰色かび病
果実被害は2月以降に確認された。発生ほ場割合は平年並に推移した。
- b うどんこ病
11月に一部ほ場で発生程度の高いほ場が確認されたが、発生ほ場割合は作期を通じて平年よりやや少なく推移し、果実被害は12月から確認された。
- c 土壌病害（炭疽病、萎黄病）
定植直後から発病株が確認され、炭疽病、萎黄病ともに発生ほ場割合は平年並であった。
- d アブラムシ類
定植直後から寄生が確認され、11月に一部発生程度の高いほ場が確認されたが、発生ほ場割合は11月以降平年並に推移した。
- e コナジラミ類
発生ほ場割合は平年並に推移した。
- f アザミウマ類
12月から花での寄生が確認されたが、発生ほ場割合は平年並に推移した。
- g ハダニ類
主要寄生種はナミハダニで、11月まで発生ほ場割合は平年よりやや低かったが、以降は平年並に推移した。
- h ハスモンヨトウ
10月に寄生が確認され、栽培期間を通して発生ほ場割合は平年並に推移した。フェロモントラップによる誘殺ピークは9月上旬で平年並だったが、誘殺数はやや多かった。

(シ) キク

- a 白さび病
苗床からの持ち込みによると思われる発生が5月から確認された。発生ほ場割合は、7月に平年よりやや高くなり、発生程度の高いほ場も多く確認された。
- b アブラムシ類
定植直後から寄生が確認され、発生ほ場割合は平年並に推移した。
- c ハダニ類
6月から寄生が確認されたが、7月はほとんど寄生が認められず、8月の発生ほ場割合は平年並だった。
- d オオタバコガ（タバコガ類）
6月から被害が確認され、発生ほ場割合は平年よりもやや低かった。
- e アザミウマ類
定植直後から寄生が確認され、発生ほ場割合は平年並に推移した。発生ほ場割合は平年並に推移した。

- f ナモグリバエ
5～6月まで発生が確認され、発生ほ場割合は平年並に推移した。

(ス) リンドウ（例年：2015年～2020年の6年間平均）

- a 葉枯病
6月から発生が確認され、発生ほ場割合は概ね例年よりやや高く推移した。8月中旬の豪雨により、上位葉に発生しているほ場も確認された
- b 褐斑病
8月に発生が確認され、発生ほ場割合は例年並に推移した。
- c ハダニ
発生種はカンザワハダニで、5月から発生が確認され、発生ほ場割合は例年より低く推移した。
- d リンドウホソハマキ
芯折れ被害は6月から確認され、発生ほ場割合は例年並に推移したが、6月は発生程度の高いほ場が確認された。

(3)分析課の業務

ア 農林水産物を対象とした緊急時環境放射線モニタリングの実施

災害対策基本法及び原子力災害対策特別措置法等に基づき農林水産物の緊急時環境放射線モニタリング検査を実施した。当課は、主務課が作成したサンプリング計画に基づき農林事務所等が採取した試料の放射性物質(放射性セシウム)を測定し、測定結果を原子力災害現地対策本部に報告した。県が公表した農林水産物の緊急時環境放射線モニタリング実施状況は次のとおりである。

農林水産物の緊急時環境放射線モニタリング実施状況

令和3年3月31日現在
福島県環境保全課

【令和3年度(出荷確認検査)※1】

食品群	品目数	基準値 ^{※2} (100Bq/kg) 以下件数	基準値 ^{※2} (100Bq/kg) 超過件数	検査結果 件数	月 別											
					4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
玄米 ^{※3}	1	1,055	0	1,055	0	0	0	0	15	561	478	1	0	0	0	0
穀類(玄米除く)	6	177	0	177	0	0	9	34	14	5	32	63	18	0	0	2
野菜	177	1,673	0	1,673	155	146	284	354	154	84	212	132	80	21	18	33
果実	34	418	0	418	0	1	32	40	54	135	97	43	10	4	2	0
原乳	2	86	0	86	7	8	7	7	7	7	7	7	7	7	7	8
肉類	5	3,455	0	3,455	311	232	269	379	176	286	357	341	300	284	246	274
鶏卵	2	141	0	141	10	11	11	12	12	12	12	12	13	12	12	12
はちみつ	1	35	0	35	0	9	26	0	0	0	0	0	0	0	0	0
牧草・飼料作物	—	647	0	647	3	37	170	23	49	90	99	75	101	0	0	0
水産物(海産) ^{※4※5}	146	3,955	1 ^{※7}	3,956	451	328	382	289	148	350	313	344	332	249	363	407
水産物(河川・湖沼) ^{※5}	16	399	2 ^{※5}	401	21	23	69	49	45	61	44	36	3	1	0	49
水産物(内水面養殖)	5	46	0	46	10	2	3	8	2	2	3	3	0	1	6	6
山菜(野生)	14	525	0	525	147	217	116	30	0	0	0	0	3	1	2	9
山菜(栽培)	1	75	0	75	63	10	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
きのこ(野生)	48	139	0	139	0	0	0	13	11	61	26	28	0	0	0	0
きのこ(栽培)	23	553	0	553	39	19	44	33	29	134	146	63	15	8	7	16
果実(野生)	1	4	0	4	0	0	0	0	0	3	1	0	0	0	0	0
樹実類	2	30	0	30	0	0	0	0	0	7	14	3	2	0	2	2
合 計	484 ^{※6}	13,413	3	13,416	1,217	1,043	1,424	1,271	716	1,798	1,841	1,151	884	588	665	818

- ※1 出荷・販売用の品目を対象に実施した検査(出荷制限等品目の解除に向けた検査^{※9}を除く)
- ※2 食品衛生法における食品の基準値(セシウム134、セシウム137の合算値)(一般食品)100Bq/kg、(牛乳)50Bq/kg
- ※3 玄米は原発事故で避難指示等のあった一部地域(米の全量全袋検査を継続する12市町村)を除き、令和2年度からモニタリング検査に移行
米の全量全袋検査を実施した12市町村：田村市、南相馬市、広野町、楡葉町、富岡町、川内村、大熊町、双葉町、浪江町、葛尾村、飯館村、川俣町(旧山木屋村)
米の全量全袋検査の結果
福島県 農林水産部 水田畑作課 <https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/36035b/kome-kensa.html>
ふくしまの恵み安全対策協議会 <https://fukumegu.org/ok/contentsV2/>
- ※4 ズワイガニ(オス)、ズワイガニ(メス)はそれぞれ1品目として集計
- ※5 シロザケ(筋肉)、シロザケ(精巣)、シロザケ(卵巣)は「海産」と「河川・湖沼」でそれぞれ1品目として集計
- ※6 シロザケ(筋肉)、シロザケ(精巣)、シロザケ(卵巣)は「海産」と「河川・湖沼」の区別なく合計ではそれぞれ1品目として集計
- ※7 基準値超過は、クローン1件
- ※8 基準値超過は、既に国から出荷制限の指示が継続されているイワナ1件及びヤマメ1件

●出荷制限等品目の解除に向けた検査(※9)(令和3年度公表)

食品群	品目数	基準値 ^{※10} (100Bq/kg) 以下件数	基準値 ^{※10} (100Bq/kg) 超過件数	検査結果 件数	月 別											
					4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
野菜	6	79	0	79	1	3	0	0	0	0	57	12	6	0	0	0
果実	3	75	0	75	0	0	0	0	0	0	4	3	68	0	0	0
山菜(野生)	2	22	1 ^{※10}	23	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	18
きのこ(野生)	2	86	1 ^{※10}	87	0	0	0	0	0	87	0	0	0	0	0	0
合 計	13	262	2	264	6	3	0	0	0	87	61	15	74	0	0	18

※10 野生の山菜・きのこは、複数年にわたる検査データに基づき出荷制限解除を行っており、制限解除の際に関係する複数年のデータを公表している。超過した2件は、平成25年5月12日に測定したくさぞつ(こごみ)1件、平成30年11月13日に測定したクリタケ(腐生菌)1件。

●食品群の区分方法を変更し、品目数を修正(平成26年5月2日、平成29年9月8日)
詳細は福島県 農林水産部 環境保全課ホームページ参照 (<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/36021d/monthly-report.html>)

イ その他検査の実施

出荷等制限品目の解除可否を判断する等、上記アの検査に資するため、県の自主的な検査を次のとおり実施した。

検査名	検査実績	検査の概要
事前確認検査	1,570点	農林水産物の緊急時環境放射線モニタリング検査の品目のうち、出荷等制限品目の解除可否を判断する検査等
その他の検査	147点	農林水産物の緊急時環境放射線モニタリング検査の他に主務課が必要とし、環境保全農業課が認める品目等の検査

ウ 放射性物質測定技能試験

測定・分析の技能の維持や向上のために取り組んだ各種技能試験とその結果は次のとおりである。

参加した精度管理	実施主体	検査項目	評価結果
IAEA-TEL-2021-03 World Wide Open Proficiency Test	国際原子力機関(IAEA)	Cs-134, Cs-137 Co-60	良好
福島県放射能分析精度管理事業	福島県環境創造センター	Cs-134, Cs-137	良好

2 有機農業推進室の業務実績

(1) 有機農業推進担当者等連携会議の開催

有機農業の技術確立、普及を目的とし次のとおり開催した。

回	開催月日	内 容
第1回	4月16日	令和3年度環境にやさしい農業拡大推進事業、事業実施計画等について協議
第2回	6月23日	広野スマート農業実証ほ見学会を実施、普及活動の進捗状況等について協議
第3回	7月21日	あいづ有機農法生産組合の産地見学会を実施、環境にやさしい農業拡大推進事業の進捗状況等について協議
第4回	8月23日	事業推進活動状況等について協議
第5回	10月20日	事業推進活動状況等について協議
第6回	12月1日	年度評価及び次年度事業実施計画等について協議
第7回	2月2日	普及指導活動総合評価、現地実証ほ成績・各種イベント等について協議

(2) 各種技術研修会等の開催

有機農業技術に関する栽培技術や販路拡大の支援、実需者などの理解促進を図るため、研修会などを開催した。

回	開催月日	場 所	研修名	内 容	参加者数
1	10月14日	福島市	桜の聖母短期大学生向け理解促進講座	有機農業及び有機 JAS 認証制度等に関する講義に加え、オーガニックふくしま安達代表幹事を招き、二本松市東和地域における有機農業の取組事例について講義を行った。	対象学生 24名
2	1月21日	郡山市	郡山女子大学短期大学部学生向け理解促進講座	有機農業及び有機 JAS 認証制度等に関する講義に加え、(有)ハッピーファーム代表取締役社長と(株)agrity代表取締役を招き、郡山市内における有機農業の取組事例について講義を行った。	対象学生 38名
3	3月23日	農業総合センター	環境にやさしい農業セミナー	講演「有機不耕起栽培の理論と拡大への実践」講師 福島大学農学群食農学類教授金子信博氏 また、現地実証ほ成果報告(2か所)を行った。	56名

(3) 有機農産物販売促進支援

有機農産物販売促進活動を、次のとおり実施した。

回	開催月日	場 所	行 事 名
1	11月7日 11月14日	福島市、白河市、会津若松市(2)、喜多方市、磐梯町、南相馬市、相馬市	福島県有機栽培米生産者訪問見学会 8カ所(米穀小売店 15社・22名)
2	2月20日	オンラインによる開催	首都圏における福島県有機栽培米商談会(8団体)

- (4) 有機農業者組織への活動支援
 有機農業者組織への活動支援を次のとおり行った。

対象組織名	支援内容	活動月日
郡山環境保全 農業研究会	研修会（二本松有機農業研究会視察）	9月9日
	定例会・総会	7月7日、10月27日 令和4年3月23日

- (5) 広報誌「オーガニック通信」の発行
 有機農業推進のための各種情報を掲載した広報誌を3回発行した。
 第1号（6月18日発行） 267部（中通り）
 第2号（12月16日発行） 267部（中通り）
 第3号（3月18日発行） 267部（中通り）

- (6) 農業総合センター農業短期大学校での有機農業の講義・研修の実施
 ア 本科2学年の学生に対して6月から8月にかけて7回の講義を行った。
 イ 就農研修（中級）有機農業講座の受講生8名に対して、研修を実施した。
 6月9日 有機農業の基礎、ぼかし肥づくり実習 所内
 6月16日 水稻有機栽培に関する講義・現地研修 所内、郡山市有機現地ほ場
 8月4日 野菜有機栽培に関する講義・現地研修 所内、郡山市有機現地ほ場

VI 県民との交流・情報発信

1 交流事業

(1) クイズラリー

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、センターまつりの代替行事として開催した。

開催期間	内容	参加人数
7/21～8/29	農業や農業研究に関するクイズラリー	134名

(2) 農的楽しみセミナー

回	開催日	内 容	講 師	参加人数
1	6/22	家庭菜園の病害虫対策	大竹 裕規	14名
2	6/29	ブルーベリー栽培の基礎	湯田 美菜子	14名
3	7/27	夏秋野菜の管理方法（台風接近により中止）	柳内 柚香	－
4	12/2	ブルーベリーのせん定	湯田 美菜子	22名

(3) 子どもアグリ科学教室

開催日	内 容	講 師	参加児童数
8/17 (中止)	・玉ねぎの皮で布を染めよう ・バターづくり	萩原 瞳	25名 (中止)

(4) イモ掘り体験学習

回	月 日	内 容	講 師	保育園名	参加児童数
1	9/22	サツマイモ 収穫体験	橘 美音	ことりやまこども園	13名
2	9/30		雨宮 潤子	岡ノ城保育園	23名
3	10/19		橘 美音	こぼと保育園	19名
4	10/23			八山田こども園	22名

(5) 第12回田んぼの学校

回	月 日	内 容	講 師	参加人数
1	5/28	講義「米作りについて1」 実習「田植え」	鈴木 幸雄	5名
2	6/23	講義「米作りについて2」 実習「田車による除草作業」	鈴木 幸雄	5名
3	9/29	実習「稲刈りとはせ掛け作業」	鈴木 幸雄	5名
4	11/10	講義・実習「お米の食べ比べ」	松崎 拓真	5名

※ 郡山市立高倉小学校の5年生児童を対象とした。

(6) 農業総合センター農業短期大学の取組

回	月 日	内 容	講 師	参加人数
1	5/24	サツマイモ植付け体験（中島幼稚園）	菅田 充	48名
2	5/25	サツマイモ植付け体験（認定こども園ポプラの木）	菅田 充	28名
3	7/15	サツマイモ草むしり体験（認定こども園ポプラの木）	菅田 充	28名
4	10/8	サツマイモ収穫体験（中島幼稚園）	菅田 充	90名
5	10/28	サツマイモ収穫体験（認定こども園ポプラの木）	菅田 充	85名
6	4/23	果樹の開花について（認定こども園ポプラの木）	半谷 広	32名
7	7/12	果樹の収穫前管理について（認定こども園ポプラの木）	半谷 広	31名
8	3/14	果樹のせん定について（認定こども園ポプラの木）	半谷 広	32名
9	8月～ 11月	講義 矢吹町との連携 実習 フロンティア農園（野菜作り）6回	齊藤 誠一	104名

2 視察見学者の受入れ状況

月	本 部					果樹研究所					畜産研究所				
	団体数				人数	団体数				人数	団体数				人数
	県内	県外		計		県内	県外		計		県内	県外		計	
国内		国外	国内		国外		国内	国外							
4月	1	0	0	1	4	2	2	0	4	16	0	0	0	0	0
5月	1	0	0	1	7	2	0	0	2	5	0	0	0	0	0
6月	4	0	0	4	22	11	1	0	12	143	1	0	0	1	50
7月	6	0	1	7	141	3	0	0	3	49	0	0	0	0	0
8月	1	0	0	1	5	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0
9月	4	1	0	5	93	0	0	0	0	0	2	0	0	2	13
10月	2	0	1	3	17	3	1	0	4	42	0	0	0	0	0
11月	6	4	1	11	312	1	3	0	4	10	0	0	0	0	0
12月	3	0	0	3	34	2	0	0	2	20	1	0	0	1	3
1月	4	0	1	5	70	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2月	1	2	1	4	12	0	1	0	1	1	0	0	0	0	0
3月	4	0	0	4	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	35	7	5	47	725	25	8	0	33	287	4	0	0	4	65
月	会津地域研究所					浜地域研究所					浜地域農業再生研究センター				
	団体数				人数	団体数				人数	団体数				人数
	県内	県外		計		県内	県外		計		県内	県外		計	
国内		国外	国内		国外		国内	国外							
4月	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
5月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	3	0	7	15
6月	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	2	31
7月	24	5	0	29	29	1	0	0	1	13	0	1	0	1	2
8月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
9月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
10月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	3	44
11月	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	2	0	3	40
12月	6	30	0	36	36	0	0	0	0	0	1	0	0	1	15
1月	4	0	0	4	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3月	2	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
計	36	35	0	71	74	1	0	0	1	13	9	9	0	17	149

注1) 人数は個人見学者と団体見学者の合計。畜産研究所は沼尻分場を含む。

注2) オンラインツアーへの対応含む(本部)。

3 施設の利用状況

(1) 多目的ホール、大会議室 ア 件数及び利用者数

月	農業関係		一般		県関係		合計	
	件数	人数	件数	人数	件数	人数	件数	人数
4月	4	125	7	445	4	290	15	860
5月	6	425	4	197	5	187	15	809
6月	3	250	3	180	7	310	13	740
7月	6	221	10	355	6	270	22	846
8月	0	0	13	714	7	270	20	984
9月	1	16	14	884	2	120	17	1020
10月	6	360	30	2198	6	255	42	2813
11月	3	210	23	1236	7	380	33	1826
12月	2	40	16	1393	10	440	28	1873
1月	0	0	4	190	7	315	11	505
2月	2	35	3	220	1	25	6	280
3月	6	405	6	400	2	90	14	895
合計	39	2,087	133	8,412	64	2,952	236	13,451

イ 会場別（多目的ホール）

月	農業関係		一般		県関係		合計	
	件数	人数	件数	人数	件数	人数	件数	人数
4月	0	0	0	0	0	0	0	0
5月	0	0	0	0	0	0	0	0
6月	0	0	0	0	0	0	0	0
7月	1	40	2	60	2	120	5	220
8月	0	0	5	350	4	180	9	530
9月	1	16	7	630	1	100	9	746
10月	5	350	13	1227	2	125	20	1702
11月	2	200	8	545	3	210	13	955
12月	0	0	9	1110	5	210	14	1320
1月	0	0	1	60	1	25	2	85
2月	0	0	0	0	0	0	0	0
3月	2	180	2	150	1	40	5	370
合計	11	786	47	4,132	19	1,010	77	5,928

ウ 会場別（大会議室）

月	農業関係		一般		県関係		合計	
	件数	人数	件数	人数	件数	人数	件数	人数
4月	4	125	7	445	4	290	15	860
5月	6	425	4	197	5	187	15	809
6月	3	250	3	180	7	310	13	740
7月	5	181	8	295	4	150	17	626
8月	0	0	8	364	3	90	11	454
9月	0	0	7	254	1	20	8	274
10月	1	10	17	971	4	130	22	1111
11月	1	10	15	691	4	170	20	871
12月	2	40	7	283	5	230	14	553
1月	0	0	3	130	6	290	9	420
2月	2	35	3	220	1	25	6	280
3月	4	225	4	250	1	50	9	525
合計	28	1,301	86	4,280	45	1,942	159	7,523

(2) 開放実験室 (利用件数)

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
件数	0	0	2	1	3	6	33	22	1	1	0	0	69

(3) 図書室

ア 受入れ書籍類

項目	冊数
図書類	628冊
雑誌類	236冊
資料類	212冊

イ 県民貸出冊数

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
貸出者数	4	10	10	8	6	6	6	9	8	5	5	3	80
貸出冊数	7	27	20	11	10	16	10	21	13	9	13	5	162

4 研究成果の発表

(1) 学会等研究発表 その1

No	所 属	発表、講演者	演 題	名 称 等	年 月
1	安全農業推進部	高倉 慎 浅野 千春 青木 大祐	福島県における露地栽培キュウリに寄生するワタアブラムシのネオニコチノイド剤に対する感受性	第75回北日本病害虫研究発表会	2022.2
2	企画経営部	星 太介	ブロッコリー選別自動収穫機の開発と課題	農業食料工学会東北支部令和3年度支部大会	2021.8
3	生産環境部	古川 鞠子	収穫時期別アスパラガスの機能性成分群の視覚的考察	第69回質量分析総合討論会	2021.5
4		古川 鞠子	福島県産リンゴの含有成分および褐変特性の品種間差	園芸学会令和3年度秋季大会	2021.9
5		松岡 宏明	福島県内の農地における放射性物質に関する研究(第53報)除染と保全管理後の水田での家畜ふん堆肥連用による地力回復技術の実証	日本土壌肥料学会2021年度北海道大会	2021.9
6		松岡 宏明	除染後水田での家畜ふん堆肥を活用した地力回復技術の実証	農業農村工学会年次大会企画セッション	2021.9
7		梅津 輝	ドローン空撮画像を用いたブロッコリーの生育評価と窒素吸収量の推定	日本土壌肥料学会2021年度北海道大会	2021.9
8		梅津 輝 鈴木 芳成	土砂が流入した台風被害水田における簡易・迅速評価法により推定した可給態窒素に基づく被害対応の判定手法	第64回東北農業試験研究発表会	2021.9
9		梅津 輝 大越 聡	灰色低地土畑のブロッコリー栽培における肥効調節型肥料の施用と土壤水分が一酸化二窒素の発生に及ぼす影響	第64回東北農業試験研究発表会	2021.9
10		松木 伸浩	福島県東北地方におけるクモヘリカメムシの発生と越冬の可能性	第75回北日本病害虫研究会	2022.2
11		前原 瞳 山田 真孝 藤 晋一	福島県におけるイネばか苗病菌のプロクロラズ剤に対する薬剤感受性低下	第75回北日本病害虫研究会	2022.3
12		大竹 裕規 堀越紀夫	トマトかいよう病に対するカーバナトリウム塩液剤の防除効果	第75回北日本病害虫研究会	2022.3
13		岡田 花音 松木 伸浩 堀越 紀夫	福島県県南地方のトマトに寄生するコナジラミ類の薬剤感受性	第75回北日本病害虫研究会	2022.3
14		松木伸浩 田淵 研 舩谷悠祐 渡邊朋也	冬期気温データを用いたクモヘリカメムシ発生地域予測手法の広域適用性	令和3年度カメムシ類等難防除害虫の発生状況と防除対策に関する検討会	2022.3
15		松岡 宏明	現地実証から評価したゼオライトによる水稲への放射性セシウム吸収抑制効果の持続性	第23回「環境放射能」研究会	2022.3
16	作物園芸部	鈴木 誉子	リンドウの培養中の越冬芽形成に及ぼす日長と培地組成の影響	園芸学会令和3年度秋季大会(ポスター発表、オンライン)	2021.9
17		鈴木 誉子	リンドウの培養中の越冬芽形成に及ぼす温度と培地組成の影響	園芸学会令和4年度春季大会(ポスター発表、オンライン)	2022.3
18		田中 智子 福田 秀之 野田 正浩 松野 香子	リンドウ新品種‘天の川’の育成	園芸学会令和3年度秋季大会(ポスター発表、オンライン)	2021.9
19		本田 祐希 岡田 景子 福田 秀之 大河内 栄 野田 正浩 諏訪 理恵子 田中 智子 松野 香子 鈴木 芳成	カラー新品種‘はにかみ’、‘ミルクームン’、‘キビタンイエロー’の育成	園芸学会令和3年度秋季大会(ポスター発表、オンライン)	2021.9
20		関根 綾	おたねにんじん’かいしゅうさん’培養個体の効率的な順化方法の開発	園芸学会令和3年度秋季大会(ポスター発表、オンライン)	2021.9

(1) 学会等研究発表 その2

No	所属	発表、講演者	演題	名称等	年月
21	作物園芸部	関根 綾	おたねにんじん'かいしゅうさん'培養個体の順化前処理におけるショ糖の効果	園芸学会令和4年度春季大会(ポスター発表、オンライン)	2022.3
22	果樹研究所	安達 義輝	高着色性の早生系統'リンゴ福島8号'	令和3年度園芸学会秋季大会	2021.9
23		尾形 亜希子 三田村 諭	果樹(モモ)における10月中旬の浸水害の影響	第64回東北農業試験研究発表会	2021.9
24		七海 隆之	福島県におけるリンゴ黒星病菌のDMI剤およびQoI剤に対する感受性	令和3年度日本植物病理学会東北部会	2021.10
25		藤田 剛輝	ナシ黒星病に対するキノプロール水和剤の防除効果	令和3年度日本植物病理学会東北部会	2021.10
26		藤田 剛輝	ナシ黒星病に対するインピルフルキサム水和剤の防除効果	令和3年度日本植物病理学会九州部会	2021.11
27		吉田 昂樹	福島市におけるナシヒメシンクイ第5世代幼虫によるニホンナシ果実被害発生状況と対策	第75回北日本病害虫研究発表会	2022.2
28		中村 傑	福島県会津地域のリンゴ園における気門封鎖剤と下草管理を組み合わせたリンゴハダニの防除体系	第75回北日本病害虫研究発表会	2022.2
29		藤田 剛輝	福島県におけるナシ黒星病菌子のう胞子の飛散消長と乗用草刈機による落葉の粉碎処理の防除効果	第75回北日本病害虫研究発表会	2022.2
30		七海 隆之	モモせん孔細菌病に対するマンゼブ水和剤の防除効果	令和4年度日本植物病理学会大会	2022.3
31		藤田 剛輝	福島県における梅雨期以降のニホンナシ'幸水'果実の黒星病に対する感受性と重要防除時期	第68回関東東山病害虫研究会	2022.3
32		藤田 剛輝	ナシ黒星病に対する各種SDHI剤の果実における防除効果	令和4年度日本植物病理学会大会	2022.3
33		果樹研究所 生産環境部	七海 隆之 湯田 美菜子	福島県におけるモモ胴枯細菌病(モモ急性枯死症)の発生実態	第75回北日本病害虫研究発表会
34	畜産研究所	篠田 肇	トレハロースを用いた性別判別胚の凍結及び移植技術の実証	第59回福島県獣医畜産技術総合研究発表会	2021.7
35		石田 真菜	黒毛和種におけるゲノム情報の改良・選抜への適用性の検証	第59回福島県獣医畜産技術総合研究発表会	2021.7
36		木村 有希	除染後水田における肉用繁殖雌牛の放牧実証	第70回東北畜産学会福島大会(オンライン)	2021.9
37		真船 優美	イメージング質量分析法による牛肉赤身中のオレイン酸の可視化	第70回東北畜産学会福島大会(オンライン)	2021.9
38		齋藤 大士	AI(人工知能)活用による超音波肉質推定技術の開発	第70回東北畜産学会福島大会(オンライン)	2021.9
39		原 恵	AI(人工知能)活用による超音波肉質推定技術の開発	令和3年度日本動物超音波研究会(オンライン)	2021.10
40		青山 勝也	酒粕、白酒ヌカ及び醤油粕のペレットの給与が肥育豚に及ぼす影響	第115回日本養豚学会	2021.11
41		青山 勝也	酒粕、白酒ヌカ及び醤油粕のペレットの給与が官能評価に及ぼす影響	第116回日本養豚学会	2022.3
42		片倉 真沙美	水田輪作体系における子実用トウモロコシの品種および播種時期が収量と収穫適期へあたえる影響(第1報)	2022年度日本草地学会岩手大会	2022.3
43	会津地域研究所	笹川 正樹 濱名 健雄 山田 真孝 江川 孝二 佐藤 弘一 高橋 元紀	福島県会津地域平坦部における水稻初冬直播き栽培の適応性	日本作物学会第252回講演会	2021.9
44		大竹 真紀	シュッココンカスミソウの機械移植体系	東北農業研究第74号	2021.12

(1) 学会等研究発表 その3

No	所属	発表、講演者	演題	名称等	年月
45	浜地域研究所	渡邊 滉士 大野 光	ダイズの成熟期頃の冠水が品質に及ぼす影響	日本作物学会東北支部会第64回講演会	2021.7
46		大野 光 渡邊 滉士	福島県浜通りの津波被災地区での水稻生育障害の要因と改善策	日本作物学会東北支部会第64回講演会	2021.7
47		三田村 敏正 遠藤 わか菜 松木 伸浩 吉岡 明良 田淵 研	東電福島第一原発事故による被災地域における営農再開後の水田生物の多様性評価	日本昆虫学会第81回大会	2021.9
48	浜地域研究所 生産環境部	吉岡 明良 三田村 敏正 松木 伸浩 清水 明 大内 博文 小熊 宏之 <i>JO Jaeick</i> 深澤 圭太 熊田 那央 神宮 翔真 田淵 研	自動撮影による赤トンボ類相対密度調査～成虫及び羽化殻のトランセクト調査との比較	第69回日本生態学会	2022.3

※ 斜体字は当機関外所属

(2) シンポジウム等講演

No	所属	講演者	内容	名称等	年月
1	安全農業推進部	遠藤 あかり	福島県農業総合センターにおける放射能分析の取り組み	第228回農林交流センターワークショップ「食品を対象とした放射能分析(初級者編)」	2021.11
2	有機農業推進室	岡崎 徹哉	中山間地域における水稲スマート有機栽培体系の実証	スマート農業推進フォーラム2021in東北	2021.10
3		岡崎 徹哉	中山間地域における水稲スマート有機栽培体系の実証	アグリビジネス創出フェア スマート農業実証プロジェクト取組地域セミナー	2021.11
4	生産環境部	古川 鞠子	県産農産物の機能性成分に関する試験研究の紹介	福島大学食農学類授業「食品機能学Ⅱ」	2021.6
5		松木 伸浩	営農中断が水田の生物多様性に及ぼす影響～被災地域の水田に生き物は戻ってくるのか～	令和3年度東北農業試験研究推進会議生産環境推進部会病害虫研究会(夏期)	2021.8
6		大竹 裕規	トマトかいよう病の防除対策	令和3年度東北農業試験研究推進会議生産環境推進部会病害虫研究会(夏期)	2021.8
7		堀越 紀夫	キク白さび病の防除対策	令和3年度東北農業試験研究推進会議生産環境推進部会病害虫研究会(夏期)	2021.8
8		松岡 宏明	東日本大震災からの復興のための除染後水田での地力回復技術の開発	東北土壌肥料協議会総会藤原賞受賞講演	2021.7
9	果樹研究所	南 春菜	早期成園化と省力化を可能とする日本ナシの新一文字型樹形	とちぎ農産物マーケティング協会果樹部会なし専門部研究部研修会	2021.7
10		安達 義輝	果樹における地球温暖化の影響と対応研究	気象講演会「気象と農業」	2021.12
11	果樹研究所 作物園芸部	安達 義輝 秋葉 未歩	福島県の品種開発について(リンゴ・イチゴ)	新宿高野フルーティライフ教室	2022.1
12	畜産研究所	原 恵	最新AI肉質評価システムについて	福島県立相馬農業高校授業	2021.9
13		原 恵	最新AI肉質評価システムについて	福島県立磐城農業高校授業	2021.11
14	浜地域研究所	三田村 敏正	水生昆虫について	「水との共生」出前講座 水辺の会わたり	2021.7
15	浜地域農業再生研究センター	齋藤 隆	除染後農地の問題点と農業復興に向けた取り組み	2021年度日本土壌肥料学会主催シンポジウム 「原発事故から10年－これまで・今・これからの農業現場を考える」	2021.11
16		齋藤 隆	除染後農地における放射性セシウムの実態とKURAMAを活用した研究の取り組み	第9回「原発事故被災地域における放射線量マッピングシステムの技術開発・運用とデータ解析に関する研究会」と第460回生存圏研究所シンポジウム「第11回東日本大震災以降の福島県の現状及び支援の取り組みについて」	2021.12

(3) 学会誌等投稿 その1

No	所属	著者	題名	発表誌名	巻(号)頁	年月
1	企画経営部	池田 健一	農家自らが小型トラクタでも施工可能な浅層暗渠施工器の開発(第一報)	東北農業研究	第74号 P27-28	2021.12
2		星 太介、 新妻 俊栄他	ブロッコリー選別自動収穫機の開発と課題	農業食料工学会 東北支部報	第68号 P9-12	2021.12
3		宮川 貴光、 新妻 俊栄	生産管理システム導入による作業記録の有効性と課題 一水田作 2 法人の事例分析から一	東北農業研究	第74号 P117-118	2021.12
4		新妻 俊栄 横田 祐未 八木田 靖司 柳内 柚香	福島県におけるタマネギ栽培の経済性評価 一津波被災地域における新技術の実証試験を事例として一	農業経営研究	題59巻 第4号 P57-62	2022.1
5		新妻 俊栄 芳賀 三千代 小泉 拓真	水田作複合経営におけるタマネギ栽培の導入効果に関する考察 一福島県の津波被災地域における農業法人を対象に一	農村経済研究	第39巻 第2号 P87-96	2022.1
6	生産環境部	鎌田 拓郎 五十嵐 秀樹 大竹 裕規 梶 和彦 今給黎征郎 福重 幸 原田 陽帆 山形 敦子	気象データから算出した感染リスクに基づく薬剤散布によるキク白さび病に対する防除の試み	北日本病害虫 研究会報	第72号 P13-18	2021.12
7		鎌田 拓郎 松木 伸浩 岸 正広	コムギ幼苗を餌としたイネクロカメムシの簡易飼育方法の確立	北日本病害虫 研究会報	第72号 P79-81	2021.12
8		松木 伸浩 山内 富士男 岸 正広	福島県東北地方におけるクモヘリカメムシの発生と斑点米被害	北日本病害虫 研究会報	第72号 P87-92	2021.12
9		松木 伸浩 田淵 研 舛谷 悠祐 渡邊 朋也	冬期気温データを用いたクモヘリカメムシ発生地域予測手法の広域適用性の検証	北日本病害虫 研究会報	第72号 P93-98	2021.12
10		矢吹 隆文	低温貯蔵下で貯蔵性が異なるモモ品種間のエチレン発生量の差異	東北農業研究	第74号 P67-68	2021.12
11		古川 鞠子 矢吹 隆文	福島県産果実の品質・加工適性評価(原料果)	令和3年度食品試験研究成績・計画概要集(公立編)	P9	2022.2
12	作物園芸部	鈴木 寛人	福島県のトップブランド米「福、笑い」の栽培法	東北農業研究	第74号 P31-32	2021.12
13		平 敏伸 丹治 克男 安田 裕基子	福島県内の大豆ほ場におけるアレチウリの発生状況とフルチアセットメチル乳剤の効果	東北農業研究	第74号 P45-46	2021.12
14		柳内 柚香	福島県におけるタマネギセット栽培に適する品種及び定植時期の検討	東北農業研究	第74号 P105-106	2021.12
15	果樹研究所	藤田 剛輝 高岩 和史	ニホンナシ‘王秋’及び‘甘太’の生育後期における黒星病に対する果実感受性	日本植物病理 学会報	第87号 P161	2021.8
16		七海 隆之 菅野 孝盛 柳沼 久美子	モモせん孔細菌病に対する酸化亜鉛水和剤の防除効果	日本植物病理 学会報	第87号 P191	2021.8
17		三田村 諭 尾形 亜希子ほか	果樹(モモ)における10月中旬の浸水害の影響	東北農業研究	第47号 P69-70	2021.12
18		中村 傑 吉田 昂樹 菅野 孝盛	福島県のリンゴ園地から採集したリンゴハダニに対する数種殺ダニ剤の効果	北日本病害虫 研究会報	第72号 P141-144	2021.12
19		中村 傑 吉田 昂樹 菅野 孝盛	福島県のモモおよびナシ園地から採集したクワオオハダニに対する数種殺ダニ剤の効果	北日本病害虫 研究会報	第72号 P145-147	2021.12

(3) 学会誌等投稿 その2

No	所属	著者	題名	発表誌名	巻(号)頁	年月
20	果樹研究所	中村 傑 吉田 昂樹 菅野 孝盛	福島県の果樹園地から採集したナミハダニに対する数種殺ダニ剤の効果	北日本病害虫研究会報	第72号 P148-153	2021.12
21		七海 隆之	生育期に酸化亜鉛水和剤および銅水和剤を組み入れた防除体系によるモモせん孔細菌病の防除効果	北日本病害虫研究会報	第72号 P56-60	2021.12
22		<i>Akira Kawaguchi</i> Takayuki Nanaumi	Model-based forecasting of twig canker incidence of bacterial spot of peach in Fukushima Prefecture	Journal of General Plant Pathology	Volume 88 P41-47	2022.2
23		七海 隆之 菅野 孝盛	福島県におけるリンゴ黒星病菌のDMI 剤および QoI 剤に対する感受性	日本植物病理学会報	第88号 P66-67	2022.2
24		藤田 剛輝	ナシ黒星病に対するキノプロール水和剤の防除効果	日本植物病理学会報	第88号	2022.2
25		藤田 剛輝	ナシ黒星病に対するインピルフルキサム水和剤の防除効果	日本植物病理学会報	第88号	2022.2
26	畜産研究所	青山 勝也 小林 準 佐藤 尚史 真船 優美 石川 雄治	酒粕・飼料用米及び醤油粕を用いて製造したペレットの給与が豚の発育及び肉質へ与える影響	日本養豚学会誌	第58巻 第1号	2021.3
27	浜地域研究所	<i>Kohe WATANABE</i> Toshimasa MITAMURA <i>Tadashi ISHIKAWA</i>	First Record of the Back Swimmer Species <i>Anisops elstoni</i> Brooks (Hemiptera: Notonectidae) in Japan, with a Key to the Japanese Species	Japanese Journal of Systematic Entomology	27(1):1 38-140.	2021.6
28		渡邊 滉士 大野 光	ダイズの成熟期頃の冠水が品質に及ぼす影響	日本作物学会東北支部会報	第64号 P7-8	2021.12
29		大野 光 渡邊 滉士	福島県浜通りの津波被災地区での水稻生育障害の要因と改善策	日本作物学会東北支部会報	第64号 P21-22	2021.12

※ 斜体字は当機関外所属

(4) 雑誌等投稿

No	所属	著者	題名	発表誌名	巻(号)頁	年月
1	生産環境部	三浦 吉則	水田からのメタン発生抑制のための稲わら処理に関する研究	JATAFF ジャーナル	第9巻 第4号 P37	2021.4
2		梅津 輝	ドローン空撮画像による露地栽培ブロッコリー生育の「見える化」	作物生産と土づくり	2021年10・11月号	2021.11
3	作物園芸部	山口 繁雄	秋出荷作型トルコギキョウの本葉2対展開苗の低温処理による切り花品質向上	施設と園芸	No.194 夏	2021.7
4		石井 詩歩	夏秋トマトのミスト噴霧による高温対策技術の確立	施設と園芸	No.196 冬	2022.1
5	果樹研究所	南 春菜	新一文字型整枝	農業技術大系 果樹編	追録第36号	2021.6
6		七海 隆之	モモせん孔細菌病の総合的な防除の取り組み	植物防疫	第75巻 P300-304	2021.6
7		七海 隆之	モモせん孔細菌病春型枝病斑の発生傾向と複数回病斑せん除による防除効果	最新農業技術・品種 2021	-	2021.7
8		横澤 志織 七海 隆之	<i>Podosphaera leucotricha</i> によるモモうどんこ病の発生と防除	植物防疫	第75巻 P609-613	2021.11
9		柳沼 久美子 七海 隆之	せん孔細菌病	モモ・スモモ大事典	P511-514	2021.12
10		志村 浩雄	新梢成長と樹勢診断	モモ・スモモ大事典	P157-160	2021.12
11		七海 隆之	モモせん孔細菌病の総合的防除対策	グリーンレポート	2021年12月号 P16-17	2021.12
12	畜産研究所	鈴木 庄一	会津地鶏ムネ肉はイノシン酸含量が多い	畜産福島	No.627	2021.4
13		石田 真菜	黒毛和種におけるゲノム情報の改良・選抜への適用性の検証	畜産福島	No.628	2021.7
14		片倉 真沙美	大規模水田輪作体系における子実用トウモロコシの利用について	畜産福島	No.629	2021.9
15		宮野 英喜	県内産トウモロコシ子実サイレーズは発酵混合飼料(TMR)の原料として適している(農家実証)	畜産福島	No.630	2021.11
16	浜地域研究所	三田村 敏正	野蚕の種内変異と飼育によって出現した多様な形質	蚕糸・昆虫バイオテック	90(3):151-155	2021.12
17		三田村 敏正	東日本大震災における東京電力福島第一原子力発電所事故による被災地の水生生物—営農再開後の水田では生物多様性は保たれるのか	JARUS	No.128:17-21	2022.2
18		三田村 敏正	湿地に生息する微小水生半翅類	昆虫と自然	57(4):19-23	2022.3

※ 斜体字は当機関外所属

5 刊行物

刊 行 物 名	発行年月	発行部数
令和2年度農業総合センター業務年報	2021. 9	※
福島県農業総合センター研究報告 第13号	2022. 3	100
令和3年度福島県農業総合センター研究成果集	2022. 3	※
農業総合センターだより 第3号	2021. 6	7,500
第4号	2021.11	7,500

※ 農業総合センターホームページに掲載

6 主要作物の生育情報の提供

内 容	提供回数	月 日
作況情報※	水稻生育状況 18	6/1、6/8、6/15、6/22、6/29、7/6、7/13、7/20、7/27 8/3、8/10、8/17、8/31、9/7、9/21、10/5、10/12、3/7
	大豆生育状況 4	7/29、8/12、9/8、2/1
	麦類生育状況 5	R2年産 3/20、4/1、5/1 R3年産 12/17、2/16、3/8、3/24
果樹の生育概況	21	R2 4/1、4/9、4/20、4/30、5/17、6/1、6/15、7/1、7/15、 8/2、8/16、9/1、9/15、10/1、10/15、11/1、12/2、 R3 3/1、(3/10)、(3/23)

※ 農業総合センターホームページに掲載

7 インターネットによる情報提供

(1) 農業総合センターホームページにおいて、各種技術情報、交流事業の情報等の提供を行った。
ホームページアクセス数(トップページアクセス数)

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
2,397	2,610	2,962	3,779	3,055	2,662	2,679	3,062	2,026	1,760	1,815	2,809	31,616

※1 ホームページのアクセス件数はボット(プログラムによる自動アクセス)を除いた数としている。

(2) 農業総合センターホームページ内に「ラウンド農ふくしま Web」を設け、これまで広報誌で発信していた業務やイベント紹介等の情報発信を行った。

R3.4月～R4.3月 掲載記事数 26件、ページアクセス数合計 630

(3) 農業総合センター浜地域研究所 Facebook (<https://www.facebook.com/nogyocentre.hama/>) において、情報発信を行った。

令和3年4月～令和4年3月 掲載記事数 1件、リーチ数合計 122

8 マスメディアによる報道 その1

※ 媒体 新：新聞、雑：雑誌、テ：テレビ、イ：インターネット、他：その他

No	媒体	掲載・放送日	掲載紙・報道局	報道内容	取材対応等
1	新	4月号	タウンメディア	県農業総合センター発表会 再開水田で生物多様性確認	浜地域研究所
2	テ	4/8	NHK総合	AI(人工知能)を用いた肉質判定と肉質改善への活用に関する取組み	畜産研究所
3	新	4/10	福島民報新聞	希望を胸に入学式 アグリカレッジ 5学科に52人	農業短期大学校
4	新	4/10	日本農業新聞	52人が入校目標へ誓い 福島県農業短期大学校	農業短期大学校
5	新	4/16	福島民友新聞	モモせん孔細菌病注意	安全農業推進部
6	新	4/17	日本農業新聞	桃せん孔細菌病県全域に注意報	安全農業推進部
7	新	5/20	日本農業新聞	桃・梨・ブドウ病害虫の発生動向と防除のポイント(病害編)	果樹研究所
8	新	5/20	日本農業新聞	営農再開 水田に虫が戻った 28種確認 風評払拭に期待	浜地域研究所
9	新	5/25	福島民友新聞	営農再開 水田に虫戻る 8市町村44カ所調査	浜地域研究所
10	新	5/26	農業共済新聞	スタンプ板で足跡採取 獣種の特定に成果(地方総合版) スタンプ板で足跡採取 獣種を特定 対策に生かす(東北営農技術版)	浜地域農業再生研究センター
11	新	5/26	福島民報新聞	35品種丁寧に 坂下で大田植え	会津地域研究所
12	新	5/31	福島民友新聞	田んぼの学校 めかるむ泥に苦労 郡山で農業体験	企画経営部
13	テ	6/5	FCT	ふくしまチャレンジ情報館「米の新品種づくり」	作物園芸部
14	新	6/11	日本農業新聞	伝統の「植付祭」基本の稲作体験	農業短期大学校
15	新	6/13	福島民報新聞	コメの品質低下招く クモヘリカメムシ 県内で被害地域拡大	生産環境部 安全農業推進部
16	新	6/23	日本農業新聞	家庭菜園のセミナー開講	企画経営部
17	新	6/23	日本農業新聞	栽培から流通まで学ぶ福島県農業短大30日から直売実習	農業短期大学校
18	新	6/30	日本農業新聞	ブルーベリー講習 圃場で収穫体験も	企画経営部
19	新	7/9	全国農業新聞	合成性フェロモンを活用したヒメボクトウの防除技術	果樹研究所
20	新	7/13	日本農業新聞	斑点米クモヘリカメムシ福島県で発生拡大	生産環境部
21	テ	7/25	日本テレビ	シューイチ 県オリジナルモモ品種「はつひめ」	果樹研究所
22	新	7/29	日本農業新聞	切り花や加工体験 高校生向け説明会	農業短期大学校
23	テ	7/31	仙台放送	あらあらかしこ 福島県のモモ栽培	果樹研究所
24	新	8/9	福島民友新聞	農業クイズ 挑戦いかが	企画経営部
25	新	8/11	福島民報新聞 福島民友新聞	輸入規制撤廃へ動画作成	農産物流通課 安全農業推進部
26	イ	8/12	県公式Youtubeチャンネル	Just how delicious is Fukushima Food? Yeah, you'll see	農産物流通課 安全農業推進部
27	テ	8/14	FCT	ふくしまチャレンジ情報館「アグリカレッジ福島で農業について学ぼう」	農業短期大学校
28	新	8/19	福島民報新聞	動物12種の判別表作成 足跡で素早く判定	浜地域農業再生研究センター
29	新	8/22	福島民友新聞	フロンティア農園 開園	農業短期大学校
30	テ	8/25	FTV	キビタンG0! 復興を支えるブドウ「あづましづく」	果樹研究所
31	新	9/9	日本農業新聞	宿根カスミで移植機活用	会津地域研究所
32	新	9/9 9/24	朝日新聞夕刊 朝日新聞福島版	希少種福島沿岸ですくすく 増す多様性 農産物の風評払拭に期待	浜地域研究所
33	新	9/15	福島民報新聞	リンドウ 3種のカラー 栽培の様子初公開	作物園芸部

8 マスメディアによる報道 その2

※ 媒体 新：新聞、 雑：雑誌、 テ：テレビ、 イ：インターネット、 他：その他

No	媒体	掲載・放送日	掲載紙・報道局	報道内容	取材対応等
34	新	9/15	福島民友新聞	デビュー夢見る 県オリジナル花	作物園芸部
35	新	9/17	読売新聞	県独自 新品種お披露目 リンドウ、カラー計4品種	作物園芸部
36	新	9/18	日本農業新聞	農産物直売会 彼岸用花き人気	農業短期大学校
37	イ	9/18 9/25	県公式Youtube チャンネル	首都圏等消費者交流事業(オンラインツアー) 海に幸(秋)コース	消費生活課 安全農業推進部
38	新	9/22	日本農業新聞	畑の窒素分簡単把握	生産環境部
39	新	9/26	日本農業新聞	リンドウ、カラー 期待膨らむ新品種	作物園芸部
40	新	10/2	福島民友新聞	田んぼの学校「福、笑い」笑顔の収穫	企画経営部
41	新	10/7	福島民報新聞	技術移転セミナー 南相馬でナシ栽培技術研修	果樹研究所
42	新	10/9	福島民友新聞	環境創造センターコミュニティ福島 科学教室「コミュニティサイエンスアカデミア(食の安全確保の取組への理解促進)	安全農業推進部
43	テ	10/10	NHK総合	小さな旅 果実とわたしの一本道～福島県福島市	果樹研究所
44	新	10/12	日本農業新聞	ナシのジョイントV字樹形による早期成園化技術と 晩生種に対する効率的な防除(技術移転セミナー)	果樹研究所
45	テ	10/13	FTV	キビントンG0!「県オリジナル花き品種が誕生！」	作物園芸部
46	新	10/19	日本農業新聞	日頃の研究成果擲隆祭で学生披露	農業短期大学校
47	新	10/19	日本経済新聞	福島和牛の品質AI診断	畜産研究所
48	他	11/1	山木屋地区自治会 広報誌はやぶさ	山木屋在来ソバの現地実証の取組みの紹介	浜地域農業再生 研究センター
49	新	11/2	毎日新聞	福島県のモモ栽培	果樹研究所
50	新	11/5	全国農業新聞	トルコギキョウ作型適応苗活用による秋出荷	園芸課 作物園芸部
51	雑	11/5	FUKUSHIMA TO DAY ふくしまの 今(2022.1)	Delicious food that's safe for everyone to eat	安全農業推進部
52	新	11/9	日本農業新聞	雨よけハウス桃守る 難防除せん孔細菌病 福島県 などで対策	果樹研究所
53	新	11/11	日本農業新聞	直売実習にぎわう 野菜や花き人気	農業短期大学校
54	新	11/18	日本農業新聞	技術移転セミナー 県産米安定生産へ	作物園芸部
55	新	11/20	福島民報新聞	リモコン草刈機体験 アグリカレッジ福島で研修会	農業短期大学校
56	雑	11/20	月刊江戸楽	特集 日本一の米を志して～米どころ福島の挑戦～ ・米どころ福島を知る ・米どころ福島の米	作物園芸部
57	新	11/21	福島民友新聞	田んぼの学校 児童がコメの香りや味確認	企画経営部
58	新	11/24	農業共済新聞	宿根カスミソウ汎用野菜移植機利用で定植時間が6 分の1に	会津地域研究所
59	テ	11/24	FTV	キビントンG0!「オタネニンジンの生産拡大に向けて」	会津地域研究所
60	新	11/25	日本農業新聞	各学科が作柄報告	農業短期大学校
61	新	11/29	福島民報新聞	技術移転セミナー 県産花きの安定生産に向けて	会津地域研究所
62	イ	11/30	JAPAN Forward	Safer than Safe:Inside Fukushima's Food Monitoring System	安全農業推進部
63	他	11/30	ラジオ福島	ふくしまチャレンジ通信 果樹の品種開発とふくしまの 新しいりんご「べにこはく」	果樹研究所 生産環境部
64	新	12/1	日本農業新聞	自動操舵トラクタ実演会	有機農業推進室
65	新	12/2	日本農業新聞	1年生ら直売 来年度へつなぐ	農業短期大学校

8 マスメディアによる報道 その3

※ 媒体 新：新聞、 雑：雑誌、 テ：テレビ、 イ：インターネット、 他：その他

No	媒体	掲載・放送日	掲載紙・報道局	報道内容	取材対応等
66	テ	12/6	NHK総合	浜通り地域でのブドウ栽培の拡大を目指して(技術移転セミナー)	果樹研究所
67	新	12/8	日本農業新聞	ブルーベリー講習 圃場で剪定方法学ぶ	企画経営部
68	新	12/8	日本農業新聞	技術移転セミナー タマネギ直播技術を紹介	作物園芸部
69	新	12/9	朝日新聞	浜通り地域でのブドウ栽培の拡大を目指して(技術移転セミナー)	果樹研究所
70	新	12/10	日本農業新聞	浜通り地域でのブドウ栽培の拡大を目指して(技術移転セミナー)	果樹研究所
71	新	12/14	日本農業新聞	スマート農業 実践研修に汗	農業短期大学校
72	テ	12/18	FCT	AI超音波肉質診断	畜産研究所
73	新	12/24	福島民報新聞	農業振興に向け連携(JA東西しらかわと連携)	農業短期大学校
74	新	12/25	日本農業新聞	農業基盤盤維持発展へ(JA東西しらかわと連携協定)	農業短期大学校
75	新	12/31	福島民報新聞	酒かす飼料で豚肉質良化	畜産研究所
76	他	1/11	ふくしまFM	福島県農業短期大学校の令和4年度一般入校試験後期募集	農業短期大学校
77	新	1/14	福島民報新聞	福島復興 世界へ発信 駐日大使ら来県	国際課
78	新	1/14	福島民友新聞	15カ国の駐日大使 復興、県産品に理解	安全農業推進部
79	新	1/25	日本農業新聞	果樹病虫害の発生動向と防除(モモせん孔細菌病)	果樹研究所
80	テ	2/5	FCT	ふくしまチャレンジ情報館 県オリジナルリンゴ「べにこはく」の魅力	果樹研究所 生産環境部
81	他	2/5	広報いいたて	足跡による獣種判別資料に関する研究成果の紹介	浜地域農業再生 研究センター
82	新	2/13	日本農業新聞	特産ヤーコンで古里再生の菓子(村長にレシピ贈る)	農業短期大学校
83	新	2/19	福島民友新聞	来月試験研究発表会開催 オリジナルイチゴ誕生 大ぶり特徴、名称募集へ	企画経営部
84	新	2/19	福島民報新聞	来月1日から研究成果発表会 「福島ST14号」県が開発	企画経営部
85	新	2/22	日本農業新聞	国内初の方式の傾斜対応小型草刈機を開発	会津地域研究所・ 農研機構
86	新	3/2	福島民友新聞	防霜へ果樹の発育予測(研究成果発表会)	果樹研究所
87	新	3/5	日本農業新聞	県イチゴ新品種開発	作物園芸部
88	新、 イ	3/7	日本農業新聞	あんぐる:重ねた証明 開いた道	安全農業推進部
89	新	3/8	日本農業新聞	防霜 危険度を可視化(研究成果発表会)	果樹研究所
90	新	3/9	福島民報新聞	被災地の営農再開へ情報提供(研究成果発表会)	浜地域研究所 浜地域農業再生 研究センター
91	新	3/12	福島民報新聞	58人学び舎巣立つ アグリカレッジ福島卒業式	農業短期大学校
92	新	2/12	日本農業新聞	農業発展に尽力誓う 就農者過去最多25人	農業短期大学校
93	イ	3/22	Euronews	Produce from Fukushima back on market as controls guarantee safety	安全農業推進部
94	新	3/26	日本農業新聞	果樹栽培学び笑顔で修了式	果樹研究所

VII 職員・財産

1 職員数

(令和3年4月1日現在)

職 種	本 部	果 樹 研究所	畜 産 研究所	沼尻 分場	会津地域 研究所	浜地域 研究所	浜地域農業 再生研究センター	農業短期 大学校	計
行政職	40(29)	2	2	1	1	1	1	32(29)	80(58)
研究職	72	15	24	3	9	6	9	0	138
技能労務職	17	8	15	4	6	3	0	5	58
計	129(29)	25	41	8	16	10	10	37(29)	276(58)

()は技術職員の内数

2 施設・ほ場の面積及び飼養家畜数

(1) 施設・ほ場の面積

区 分	建物		宅 地 (ha)	田 (ha)	畑 (ha)	山 林 (ha)	原 野 (ha)	その他 (ha)
	棟数	面積(m ²)						
農業総合センター (内訳)	67	28,886.54	12.1	12.5	19.2	3.2	0.3	5.2
交流棟	1	2,594.49						
管理研究棟・実験棟	1	7,039.93						
附属施設(建物)	65	19,252.12						
果樹研究所 (内訳)	28	4,749.41	1.9		8.1			
庁舎	1	1,680.86						
附属施設(建物)	27	3,068.55						
畜産研究所 (内訳)	74	18,042.52	19.1		40.4	2.7		
庁舎	1	1,166.48						
附属施設(建物)	73	16,876.04						
沼尻分場 (内訳)	26	6,548.72	8.6		114.9	121.6		3.3
庁舎	1	132.68						
附属施設(建物)	25	6,416.04						
会津地域研究所 (内訳)	18	6,828.75	4.6	9.7	5.5			1.3
庁舎	1	2,442.59						
附属施設(建物)	17	4,386.16						
浜地域研究所 (内訳)	15	1,508.52	0.6	2.4	1.0			
庁舎	1	472.50						
附属施設(建物)	14	1,036.02						
浜地域農業再生研究センター (内訳)	2	692.51	0.3					
庁舎	1	478.01						
作業所棟	1	214.50						
農業短期大学校 (内訳)	56	19,791.99	5.7	5.1	23.3	9.8	3.0	5.0
校舎	1	2,002.36						
附属施設(建物)	55	17,789.63						

(2) 飼養家畜数

ア 牛、豚及び鶏の飼養頭(羽)数

区 分	乳用牛			肉用牛						豚				鶏				
	経産牛	育成牛	子牛	種雄牛	雌牛	育成牛	子牛	直待牛	検機牛	供卵牛	肥育牛	種雄豚	種雌豚	子豚	肥育豚	保存鶏	育種鶏	種鶏
畜産研究所	33	21	3	7	-	-	-	3	12	9	36	19	54	203	101	582	1,938	703
畜産研究所沼尻分場	-	-	-	-	75	-	37	-	-	-	23	-	-	-	-	-	-	-
農業短期大学校	9	5	1	-	11	-	12	-	-	-	6	-	-	-	-	-	-	-

※ 令和4年3月31日現在

令和3年度 福島県農業総合センター業務年報

令和4年9月

福島県農業総合センター

〒963-0531 福島県郡山市日和田町高倉字下中道116番地

電話 024-958-1700

FAX 024-958-1726

<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200a/>
